

譜熟行程看欲盡 青山一髮是井州
に次したといつて、次の句を贈られた。

(八) 悟堂先生シンガポールに入らんとしたの詩に次す

曾把井州作故郷 井州今日拜天皇

半生雄略圖南志 一任快飛千仞鳳

又、大月を仰いでこんな句を得たのである。

六 清夜の吟 十二月十四日夜

去國舟無片累侵、獻皇躬有舊丹心、

長瀾一路南征客、倚盡舵樓清夜吟、

國を去つて舟に片累の侵すなく、皇に獻じて躬に舊丹心あり。

長瀾一路南征の客、舵樓に倚り盡くして清夜に吟す。

窓外の波の音に客夢を破られ、外に出てみると夜も更けてゐる。寒月は高天にか、つて氣は水の如く涼しい。而してこの月は我が六十五年の心を照らすといふのである。

翌十五日朝、床を出ると、船はまだ九州の南端にあつて、種子ヶ島沖を通りつゝあつた。

二 明治先覺の海外發展物語りを讀んで

餘談になるが、同船の三井菊地君が矢野龍溪先生の『浮城物語』を携へてゐたので、これを借りて讀んでみた。

この小説は我々の青年時代に愛讀したものの一つで、第一回は明治十七年即ち一八八三年、マダガスカル女王バナバロ三世が王位に即き、越へて二年、佛人がマダガスカルと和を講ずる迄、前後二百餘回に渉る可きのところ、六十三回で假りに一段落としたもので、これから先は作良、立花の兩雄が浮城、海王の兩艦を印度洋に乗出し、或は南極に漂ひ、或は南米に漾ひ、或はアビシニヤ、アラビヤの沿岸を歴走し、或は遠く南アフリカに彷徨する等、その結構は雄莊偉大、風雲の氣多く、兒女的情少なく、人をして一讀快潤ならしむべしと著者自身の告白せる通り、當時の一部青少年をして感奮興起せしむるものがあつたのである。

この著は明治二十三年の作で、今の報知新聞の前身、郵便報知に掲載され、間もなく單行本となつて現はれたものである。

顧みれば明治廿三年と云へば私は郷里の中學鳳鳴義塾四年級で小學校以來の希望であつた陸軍大將から海軍大將へ轉向、翌二十四年に笈を負ふて上京、芝新錢座の攻玉社に入り、翌二十五年冬海軍兵

學校機關生徒の募集に應じ、幸に合格して二十六年二月江田島の人となつたが、その頃始めてこの小説を手にしたのであつた。江田島在學中、北邊を憂ひて郡司大尉の千島探險を試みるあり、同志の人川口甲助がこれに投じ、遂に骨を絶北の野に曝したこともある。惟へば年を閲する四十九、半世紀に近い歳月が流れたのであるが、私の興亞一貫の進路は支那より南洋へ、南洋より南米へ、南米より世界へと展開してなほ倦むを知らない。今又この信念によつて南征二十幾回目の船に上つてこの書を見る。感激一入深いのも亦當然のことであらう。菊地君が『浮城物語』を見て、拙著『興亞一路』に及べば、明治より昭和へかけての國民海外發展に一聯の繫りを感じるといふことを、しみじみ語られたが自ら微笑をもつて迎へざるを得ない心地がするのである。

浮城物語の骨子は、第六回の大事業から第七回の新版圖に互る統領作良の演説に盡きる。これを實地に演出させたものが全篇である。曰く、

『我々がこの地球に生れ來つた以上、この地球を横行するの自由がある。日本に生れたるの故を以て、その働きを日本にのみ限るべき道理はない。視よ、我々の眼前に横はる海洋は是れ天の我々をして地球を横行せしむる道路である。五大洲の中、何れのところか、天の我々に蹂躪を許さざる地あらん。我々は既に此の地球に生れ來つた。應に此の全地球を以て一舞臺とし、稀世の大業を成すべきのみ、何ぞ必ずしも日本にのみ躑躅たらんや。』

諸君は、微々たる一商會を以て、印度の大半を占有せし人物あるを知つてゐるか。又六十餘の小兵を以て、ペルー王國を取つた英雄ビザロあるを知つてゐるか。今我々の一行は多からざるも、猶ほ百餘名に上る。計劃良ろしきを得ば、何ぞ大業を成すに難からん。人生朝露の如し。假令蜻蛉州の一隅に退縮して黄老養生の道を求むるも、豈に克く百歳の壽を超へんや。骨を埋むるの青山は到る處に在り。世界何れの處にか墳墓の地無からんやである。

西洋人は地球を以て功名の地と爲し、日本人は自國を以て功名の地と爲す。痛嘆の至りである。昔神后異域を征し給ふと雖も、その事藪焉たり。豊公師を海外に出すも、亦寸土を加ふる能はず。嗚呼何ぞ我國人の小膽なるや。日本千古の英雄中我々の心事を知る者は、唯一個の猿面公あるのみ。他は是れ蠻觸數ふるに足らず。我々は今將に全地球を蹂躪して、無人の地を席捲し、日本に幾十倍する大版圖を拓き以て之を

『陛下に献じ、我々請ふて其の地を鎮めんとす。若し不幸にして、日本の國力是を所有するに勝へずんば、我々諸君と共に自ら其の地に王たらんのみ。云々。』

作良統領は更に進んでその方略を述べて曰く、

『我々は先づ香港に立寄つて南洋諸島を巡航し、物資を交換、利益を得て更に一隻の新艦を買入れ、兵備を整へて印度洋に出で、續いて南緯四十度、東經六十度の地に在る一島を得て本據と爲さん。而

して我々は諸君と共に將來海上の大王たらんことを期す。この島は即ち我々の居るべきところ、故に是を名附けて海王島とせん。

海王島を略せし後は、マダカスカルを取り、それより手を延べて接近せるアフリカの内地を攻略すべきである。アフリカ大陸南緯二十度より赤道に至る約三百萬平方哩に互る國土は、未だ定主あることなし。是れ天の我々に賜ふところにあらずや。若し歳月を遷延せば十年を出でずして、アフリカの中原必ずや列國衝争の巷と化せん。是れ我々が本年に於て此の大業を思ひ立ちし所以である。云々かくて百餘名の同志結束して相誓ひ、二千噸の海王丸に搭じて、まづ香港を経て、ジャバに出て、オランダの鎮臺と葛籐を始め、又一軍艦を海賊の手より奪つて、之を浮城丸と名附けて南洋を横行し、遂にジョクジャ及びソーウロの二土侯を助けて獨立の旗を擧げしめたが、戦利あらずして再擧を謀るといふ當りで話が杜絶して居る。

龍溪先生はかく五十年の昔に於て、日本男兒の一團が國家の前途を慨し、南洋に進出して英蘭兩國を對手にジマバ、スマトラ方面の經略を試みるといふので、飽くまで日本人海外發展の理想を描寫して、人心を鼓舞作興するところ、永遠の若さと力とを持つ明治文學の傑作たるに耻ぢない。此の著が岩波文庫の一として、最近、世上に浮び出たのは最も時宜に適せる企で、昭和青少年の雄心を鼓吹する多大なるものあるを疑はない。

此の著に先だちて南進論を反映する小説としては、須藤南翠の『旭章旗』あり、や、後れて遅塚麗水の『南蠻大王』末廣鐵腸の『南洋の大波亂』などがあつたことを記憶する。此等は何れも類似の思想を寫出してゐるのである。

龍溪先生は豊後佐伯の人で、嘉永三年に生れ、昭和六年、八十二歳の老齡を以て東京で没せられた。先生夙に神童の名あり、明治初年福澤翁の門に入り、後大隈侯の幕下に參じて任官、俊秀の評を得、侯の下野に伴つて之に殉じ退官した。爾來、筆に口に自由民權を唱へ、立憲政治を論じ、明治十五年には同志と共に改進黨を組織して、政界の花形となつた。私が先生の聲咳に接したのは、先生の駐支公使時代のこと、即ち明治三十年大隈外相の下で働いて居られた頃、私は東亞同文會の前身東亞會の幹事として、翌三十一年夏北京に至り、適々戊戌政變に際會し、革新派の侍講王照を拉して北京を脱出せしめ歸朝した際、在京中であつた先生と會見、政變の狀況を報告した秋であると記憶する。

先生は風度端正。容貌閑雅。古名士の風があつた。趣味としては讀書の他に繪畫の鑑賞あり、花卉あり、乗馬あり、又科學の研究をも好まれたといふ。浮城物語中の作良統領の思想、行動は實に先生を象徴せるものといふべく、政治家の典型としては諸葛孔明を擧げ、宋の名臣言行録は終生の愛讀書であつたといふ。日本の武將としては楠公の他、小早川隆景、直江山城守に推服せられたそうだ。以て先生の風格を髣髴するに足るものがある。

仍つて思ふ、私は先生に後るる二十七年にして此の世に生れたが、猶ほ維新の風雲を距る遠からず。五歳にして豊太閤を以て自ら擬して悪童の魁となり、十歳にして鎮西八郎の風骨に憧憬し、天下第一の官たらんより天下第一の人たらんことを期し、爾後の行動は多くこの線より離れず、若冠十八歳にして海軍を辭して臺灣に渡り、十九歳にして大陸を踏んだのを皮切りとして歐山米水を窮め、二十七歳にして韓國に任官、三十四歳にして第二次世界周遊を試み、歸途南洋の一角に地を卜して開拓の業を創め第一線に立つこと十二年、大正十年より十一年へかけての第三次世界周遊となり、大正十三年四十八歳にして議政壇上の人となり、同時に海外移住拓殖機關の主腦となり、事業の範圍は南洋より南米、中米に伸び、業を創むる七ヶ國、人を送る十六萬、昭和十一年六十歳を以て主腦者の地位を去れるも關係の事業及び海外關係團體の幹部として關與するもの三十餘に及び、同年秋の南洋行、翌十二年の第七次世界周遊、十三年より昨夏にかけて前後三回の北中支、滿洲、朝鮮行而して昨秋再度の朝鮮行より、今次二十幾回目の南洋行となつて、この船中に在るのである。臺灣渡航後四十七年に互る足跡を顧みれば、私も浮城物語劇中の一人たるの心地がする。唯だ龍溪先生は晩年韜晦して出でず、八十二の高齡を以て平穩裡に大往生を遂げられたが、私は六十五歳となつて雄心猶ほ衰へず、果して何れの處に向つて此の骨を埋むべきか、眞に一笑の他はない。宜ろしく天の命に従ひ、此の國難打開に涓滴の誠を致し、死して始めて止むあるのみである。偶々龍溪先生の浮城物語を南行の船中で

卒讀して、我が日本の變遷と我々の使命未だ終らず、否益々重加しつゝ、あるを認めて自重自愛せざるを得ないことを改めて痛感した。時は十二月十六日、日漸く西に没せんとして、紺碧の水は愈々紫色を加へつゝ、あるを認めたのであつた。

三 ダバオの日本村を望んで

十七日起き出してみると、船は臺灣の東に在り、風も漸く暖か味を及び、我人共に薄着に代へた。夜に入つて波は高く、十八日の晝頃はルソンの沖、北緯十四度東經二十七度の邊に在り、波猶ほ高く、折から舞込んで來る電報に應酬し、又船中唯一の世間との接續線であるラヂオに、内外の事情を微かに知り、朝夕讀書に親しみつゝ、倦み來れば、誰れ彼を捕へて歎語し、或は一人甲板に出て大海を吞吐し舟中の快味を満喫したのであつた。

十九日朝、船は既にルソンを北にし、ミンダナオの沖に近づいてゐるので、波も漸く低い。午後には同島の東を通つて、雲煙の外に島影を認めた。同島の南端、ダバオ灣に臨む一帯の土地には、海拔一萬尺のアポ火山を背景として、太田興業始め多數の邦人會社、個人が麻の栽培をして居る。私は馬來半島の開拓に従事してから十餘年の後、始めて此の地に遊び、移住開拓兩方面に適當せるを認め、海興の首腦として就任後直ちに其の地を見て積極的援助の方針を定め、爾後十二年の間に此の方面へ

一萬餘の人を送り、自ら亦その地を訪ねること兩回に及んだ、そうして今日の盛況を見ると感慨自ら、深いものがある。アポールの山は雲煙の外に隠れて居たが、間近の山々は薄く之れを認めることが出来た。此處に於て一首なかるべからず。

七 ミンタナオ島を望む 二月十八日

孤舟漂蕩大濤間 俯仰乾坤意自閑

南下一千三百里 有浮比嶋夕陽山

孤舟漂蕩大濤の間、乾坤を俯仰して意自ら閑なり。

南下一千三百里、浮ぶあり比嶋夕陽の山。

一片の舟が大濤の間に浮んでゐる。この裏に客あり、獨り乾坤に俯仰して、如何にもどかである。馬關を南に去る千三百里、夕陽がヒリツピンの山々を照らしてゐる景色は何ともいへないのである。

この邊から水の深さは一萬八千尺から二萬三千尺にも及ぶといふことである。恐らく世界中最も水の深いところであらうか。従つて魚貝も食物がないから、棲むことが出来ないといふ船員の話であつた。

八 海中魚貝なし

托形扁舟心自舒 炎涼圈外世煩疏

水深二萬三千尺 絶海紫瀾無貝魚

形を扁舟に托して心自ら舒かに、炎涼圈外世煩疏なり。

水深二萬三千尺、絶海の紫瀾貝魚なし。

形を扁舟に托して居るが、心は自づからのびのびとしてどかであり、況んや炎涼圈外に在つて、利名の如きは問題ではない。この邊の水深は二萬三千尺とあつて、紫黑色の水中には魚も貝も無いといふが、私の心境と一脈通じるものがあると歌つたのである。

二十日曉起して甲板に出てみると、未だダバオ灣外の群島が見えた。アポールの山は相變らず姿を見せないが、一人、曾遊を思ふて私の感想は滾々として盡きない。吾れ大正十三年春海興の主腦となつて、同年夏、先づ此の嶋に航して拓地植民の適地たるを認め、歸來、同僚に諮つて、移民の奨励、開拓の進捗に力むる十有二年、其の間人を送る萬餘、地を拓く八千、居然たる海南の新扶桑を現出せしめたるもの。私の第一次比嶋視察の收穫であつて、彼我に寄與する多大なるものがある。然るに近來は何事ぞ、我が平和的進出をさへ阻止せんとする輩のあることを、いつも申す通り、天の命に順ふものは榮え、之れに逆ぶ者は枯れる。復た曷んぞ疑はんやである。

船中携ふるところのジョン・ガンサーの『インサイド・エイシャ』を再讀して思ふところ多く、又白人の太平洋進出の史跡を閲し、我が邦人の現状に及んで自らの力猶ほ足らざるを耻づるところが多

い。東亞共榮圏の確立といひ、亞細亞新秩序の建設といふも、猶ほ壁間の畫餅たる域よりや、進んだ程度である。私の如きも南洋開拓に身を投じてから三十餘年後續の者寥寥として數ふるに足らず、之を白人が過去四百年に亘つて南方經營を續けて來たのに比すると、未だ未だこれからだと思ふのみである。人寡く資も亦乏しい日本。六十幾歳の私が猶ほ遑遑として歳晩に南征二十幾度の船に上らざるを得ないことを想ふと一笑の他はないが、幸に壯心奮に依つて剛に、所謂成を後世に期し、自ら種を蒔いて實は之れを他に與へよう。かゝる境地に安住せる私は、大きな聲で獨り哄笑したのであつた。當日の日記を見ると、

『二十日朝、ダバオ灣外に於て、一路初一念を貫かんのみ、哄笑哄笑。』
と書いてある。

四 突圍に入つて

ダバオ灣外を過ぎ、ボルネオとセレベスの海峡に入つて波は益々平かに、暑さも加つて身の熱帶圈内に入つたことが思はれる。東京、バタビヤ兩方面の無電に應答しつゝ、夜に入つて一同と共にすきやき會に盃をあげ、神戸牛を喰ひ大に談じた。而して若い人達は大に歌つた。

こゝで些か私事に互るが、長男陽一の妻と長孫の二人が印度の任地を離れ、ボンベイより榛名丸の

客となつて歸朝の途にある。恰も同船が南支那海を渡りつゝある頃なので、

『ゲンキナリヤ、ヨウーサンガツ、ドイツヘテンニンノメイヲウケ、チカクカルカツタヲタツ、ボ克蘭インコウノセンチュウニアリ』
と無電をうつたところ、彼女から、

『デン、ウレシクハイス、一ロゴハイアンライノル』

との返電に接した。彼女は恐らく此の時始めて私の南洋行を知つたのであらう。そして長孫に祖父さんの消息を傳へたであらう。彼女の夫のドイツ轉任も、此の時始めて知つたのかと思ふ。人生の離合集散は豫め測り難く、ゲーテの所謂人間の限界なるものをしみじ味はされるのである。況んや我々一家の如き世界を家とする身にあつては、東西相距つるのは常事であつて、敢て寂しがらにも及ばない。寧ろ快き微笑を禁じ得ないのである。後で解つたのであるが、長男は一月末に印度を出で、この記を草しつゝある際には早や南支那海に在り、近くこの二十四日に着神の豫定である。私は六十幾歳となつて猶ほ青年の意氣を失はないが、流石に彼等兒孫との團圓を想へば歸朝後の夢も悪くはないと獨り船窓で微笑したのであつた。

適々船橋に倚つて遠くを眺めると、船は眞西を指して太陽の没する邊に突進して居る。夕日の殘光が萬波に映じ、その光景凄絶、紺碧から紫黒に變りつゝある海心に何が躍るか、鯨でも居れば劍を抜

いて直ちにこれを居りたい心地もするのである。臺灣を南に去る洋々たる大海、その間を縫ふフキリピン群島、ボルネオやセレベスの大小幾百の島々、悉く是れ我等の雄心を鼓吹せざるものはない。そこで

九日 没 十二月二十日

巨舶衝濤指直西 夕陽没處水雲凄

不知海若何邊躍 一劍唯須斬巨鯢

巨舶濤を衝いて直西を指し、夕陽没する處水雲は凄し。

知らず海若何の邊にか躍る、一劍唯だ須らく巨鯢を斬るべし。

と歌つたのであつた。

越へて二十一日朝食後、船長等の求めに應じて悪筆を揮ひ、前夜來緝き來つた『支那四千年史』を讀んで漢族興亡の跡を追ひ、延いて現在の戰闘時代に及んだ。日々の無電は益々内外の多事を思はしめるものがある。午後四時半頃一臺の爆撃機が、我が船をかすめて低く飛來した。申す迄もなく蘭印のものである。そこで少し言過ぎではあるが次の句が浮んだ。我が平和的意圖を知らずして、徒らに國防に汲々たるは却つて兩國の親善を阻害するものではないか。心ある人士が、わが大和の眞精神を汲み、進んで新秩序の建設に協力せんことを希つたのであつた。

十 偵 機 十二月二十二日

雲碍炎洋山影微、偵機一隻掠船飛

要知我有平和策、唯合坦懷基地歸

雲は碍つて炎洋山影微かに、偵機一隻船を掠めて飛ぶ。

知を要す我に平和の策あり、唯だ合さに坦懷基地に歸るべし。

夕食後赤道を南に越へ、赤道祭に滿飲高歌する聲が聞こえた。私は遅くまで眠らず、獨り舷頭に立つて天半に残る月が弓のやうなのを眺めた。

十一 看 月 十二月二十二日夜

身馳南北渾球界 思入東西治亂中

赤道直頭炎滿舶 天邊涼影月如弓

身は馳す南北の渾球界、思は入る東西治亂の中。

赤道の直頭炎舶に滿ち、天邊の涼影月弓の如し。

神戸を船出して此處に滿十日、愈々二十三日にはスラバヤに着く豫定である。都合よく行けは、直ちに上陸、二十四日はトサリ高原に涼味を喫し、夜行でスラバヤを立ち、二十五日にはバタビヤに入る筈であつた。

世界を見渡しつ、

二十二日朝、無電が入つた。平沼、柳川兩相親任とのこである。國內新體制確立に一步を進めたものであらう。遙かに祖國を望んで一億一心の眞の具現を希ふて、兩相に短信を寄せてその自愛を祈つた。陸に上れば再び俗事紛紛。復た世務に追はれることであらう。然し、此處船中は南洋と雖も涼風が吹いて、何ともいへない良い心地がする。そこで涼風と題して左の二絶が出来た。以て船中生活の一端を覗つて欲しい。

十二 涼 風 其の一 十二月二十三日

世事紛紛總不關 鼓將雄志向南寰
 繡書倦罷舷頭立 萬斛涼吹征客顏

世事紛々總て關せず、雄志を鼓し將つて南寰に向ふ。

繡書倦み罷んで舷頭に立てば、萬斛の涼は吹く征客の顔。

十三 其の二 同日

一劍橫行五大洲 天涯何處展皇猷
 茫茫寰宇小於豆 上在南征萬里舟

一劍橫行す五大洲、天涯何れの處にか皇猷を展べん。

茫茫たる寰宇豆よりも小に、上つて在り南征萬里の舟。

(二月二十一日記)

(二) 南洋の樂土ジヤバ 十五首

一 上陸第一日の快眠快食

二十三日の夜八時半、我が日昌丸はスラバヤの埠頭に横づけとなつた。バタビヤから遠く出迎への石澤總領事始め在留官民の多數がサロンに上つて芳澤使節に挨拶を交換され、續いてレシデント始め蘭人側の歓迎の挨拶があつた。その際、總領事から一片の公文書が私に手交された。それは私の入國に際し、税關其他の繁雜な手續を省かされる爲め、蘭印總督府より寄越されたもので、

『これを關係官吏に示せば一切煩雜なことはない筈です。』

とのことで、移民官に見せると直ちに査證を與へて呉れた。私の東京出發に先だつてパブスト公使からも總督あてに紹介狀が寄せられてゐるが、是も旅行中の煩雜を慮る心盡しの一つであつた。私は石澤總領事にも厚く禮を述べた。

芳澤使節がまづ上陸され、私もその後を追ふて舊知のホテル・オランエ第五十七號室に入つた。三菱商事の田中支配人、正金の有吉副支配人來訪され、續いて十時半頃、わが小坂君亦來つて隣室に入る。更に三菱の河原、南協の山口等の諸君も後を追つて來り會された。河原君は高松長三君の姻戚に

世界を見渡しつゝ、

當り、天外知己多しの感がある。ビールの盃を舉げて歡談、十一時客散じてマンデーを試み、日記をつけ終つて尊に入る。部屋の裝備は熱帶向きで、天井も高ければ寢臺も廣々として、例のダッチ、ワイフを股にはさんで眠りに就けば、南洋の樂土たるジャバの悠々たる生活がしみじみと味はれるのである。

翌二十四日午前六時半起床、マンデーしてポイ齋らす所のコーヒ一杯を傾け、衣を更へて七時半食堂で朝食をとつたが、パイヤ、オートミル、ハム・エッグス、パンにバターにミルクにいつれも美味津々、わが食欲をそゝらざるはない。足れる國、満てる國の感はかういふところにも深いのである。ポイの静かにして敬虔な態度も、何となくこやかな感じがする。

食後チソロパンの河田君、チマラカの西村君來訪、有吉君を加へて所用を辯じ、三菱の河原、明葉の伊藤君等と共に街頭に出て、有名な動物園を見て三菱支店に立寄り、一路自動車にて郊外七十キロのラワン高原に至り、山莊に入つて主人心盡しの御馳走にあづかり、飽くまで好山好水を賞しつゝ、詩情を養つた。山莊は輪奐の美を盡した堂々たる建物で、百萬圓を費したといふことだが、時節柄三菱がこれを賃借して、社員の週末休養にあてゝゐる處である。海拔僅かに二千尺ではあるが、四面山を負ひ、溪に臨み、鬱蒼たる樹木、爛斑たる花卉の裏にあるので、此處に立籠つて天語を靜中に聴くのも亦旅中の一快事であつた。恰かも良し、雨晴れて前山は一層青々とし、後庭には百花が咲き誇つて

居る。蘭人三百餘年に亘る統治ぶりには、なか／＼味ひがあつて容易に模し難いものがある。そこで一絶が出来た。

十四 羅 灣 山 莊 十二月二十四日

雨霽重疊疊色青、百花撩亂滿前庭、

蘭旗三百餘年跡、天語無聲靜裏聽、

雨霽れて重疊、疊色青く、百花は撩亂して前庭に滿つ。

蘭旗三百餘年の跡、天語聲なく靜裏に聴く。

この景色のよい山莊で、將來ある若人と語り、更に蘭人經營の跡を偲び、聲なき天の言葉を靜中に聴くといふのである。

午後三時、山莊に惜しき別れる告げて、四時半ホテルに歸つて在留同胞數名と會談、六時四十五分發の直通一等寢臺車の人となつた。正金、三菱、明葉、その他在留同胞の見送りに掛しつゝ、小坂君と一路バタバヤに向つたのである。人も知る如くジャバでは道路が極めて良ろしく、自動車旅行は愉快であるが、汽車はこれに反して甚だ面白くない。車内の裝備も悪ければ、動搖も甚だしく、讀書することさへ不便である。夕食後間もなく床に就いたが、夢は覺され勝ちであつた。おまけにクリスマス祭日のことであるから乗客も多く、一等車三臺を増結したも尙ほ滿員の有様である。ふと今を距る滿

三十年の昔、即ち明治四十三年の今月今日、第二次世界周遊の途次、カイロから紅海に出で、ポート・スーダンに上陸、ヌビヤの沙漠を越へ、カルツームに入ったのであつた。ポート・スーダン、カルツーム間の直通列車は、熱帯地方相當の設備があり、一人一室を占領させてくれたので、朝夕の食事も室内で出来、浴衣一枚で涼をとることさへ許された。爾來春風秋雨幾變遷、此の身は幸に猶ほ健全で、單身復た南行の途に上つてゐる。その姿を顧みる時、自然に一首が口をついて出た。

十五 三十年前のスーダン行を憶ふて 十二月廿四日夜、於車中

耶蘇誕日客魂安、擬^三向^下天南試^一一搏^一、

三十年前斜照裏、單身仗劍入^{スウダン}蘇丹、

耶蘇誕日客魂安く、天南に向つて一搏を試みんと擬す、

三十年前斜照の裏、單身劍に仗つて蘇丹に入る。

その意味は、正道を踏み正義に仗りさへすれば、世界何れの處でも何等の不安、不快もない。私は今天南に向つて一搏を試みんとするが、想へば三十年前の今月今夜は單身でヌビヤの沙漠を渡つて蘇丹の都、カルツームに入つて、白宮に平素尊敬せる俠雄ゴールドンを弔つたことであつた。車中當時、折柄來合されたゴールドン救援軍參謀長であつたキツチナー元帥と共に其の翌々日、ナイル河に舟出して河馬狩りをやつたこと、白宮の庭に猶ほ咲き誇るゴールドン手植のバラを賞したこと杯に、綿々

として思は盡きないのであつた。

二 バタビヤから、バンドンへ、ガルヘ、チンロバンへの高原狩り

翌くれば二十五日朝曉起、沿道のゴム林や甘蔗畑や水田に南洋生活の舊夢を追ひつ、七時四十分バタビヤはケーニグス・ブレインの驛に着いた。

小谷領事、堀口南協幹事、香田南國重役、三菱宮脇君等の知人に迎へられ、直ちに舊知のホテル・デス・インデスの百四十八號室に入つた。四年前泊つた部屋の直ぐ隣である。是も知人の心使ひの一つであらう。直ちに小谷君に就て蘭印總督と會見の手續を依頼し、昭和ゴムの關係要務を終へて諸君と別れ、香田、堀口二君の東道にて、小坂君と四人二臺の自動車に分乗、アスファルトの大道を疾驅する六十キロ、バイテンゾルグに至りホテルに小憩の後まづキベロン總務長官邸に刺を通したところ、残念ながら二十四日以来、總督と共に遠くチバナスの別邸にクリスマス後の休日を送つて居るとのことであつたから、名刺を托して去り、農事試験場に熱帯有用植物を見、キナ、カボック、コーヒ、ゴム其他が鬱蒼と繁茂せる有様に、自然の恩恵豊かなるを羨みつつ改めて當年の南洋生活を回顧し、更に植物園に入つてラッフルス夫人を弔ひ、新に出來た規模廣大なる日本式庭園を見た。正午ホテルに歸つて食事を攝り、午後一時からは南國産業經營のチムラン農園に赴いて、茶及びゴムの製造を見た。

此の園にはたしか大正八、九年の頃、今の南國事務の小倉君在任當時に訪問したことがあるが、今は案内の香田君の指揮の下に榮えてゐるのである。わが同胞が手を熱帯産業に着けて、業者相繼ぎ、漸次その功を收めつゝあることは、眞に快心の出来事と申さねばならぬ。

三時ホテルに引返して香田君に別れ、小坂、堀口二君と共に一臺の自動車にてバイテンゾルグを立ち、ザーラ山を右に掛し、ゲデイ峯を前に拜しつゝ、海拔四千九百尺のブンチャック峠上の旗亭に小憩して先づ高原の涼風に浴した。總督別邸のあるチバナヌを経て、一路連山の翠色を仰ぎ、近く植ゑつけたばかりの青々とした水田の隣には、刈入れ時となつた黄色い稲の穂が揺れてゐる有様、これ亦熱帯の天恵であらねばならぬ。かくて薄暮、ブレアンガー州の首都、將來の政治的中心と豫想され、現に軍國の府たるバンドンに着き、之も舊知のホテル・ホームマン百八十四號室に入つた。バタビヤから此處に至る約百九十キロ、かなりの行程であつた。

十六 西ジャバ高原行 十二月二十五日

滿眼、連山翠色深、輕車穿走鬱葱林、

日沉百里番敦路、拂面涼風洗客襟、

滿眼の連山翠色深く、輕車穿ち走る鬱葱の林。

日沉んで百里番敦の路、面を拂ふ涼風客襟を洗ふ。

常に感じることであるが、バタビヤから長驅して高原地帯に入ると、すがすがしい涼風が面を拂つて、如何にも愉快になるのである。殊に夕方になると、この感が深いので、此の句が浮び出たのである。

ホテル・ホームマンは新に近代式建築を爲し、室數も百八十に上るといふことであるが、クリスマス祭夜のこと、とどの部屋も満員、廣大な食堂も談話室も超満員客止めの盛況で、夜半まで舞踏の聲が聞えて來た。

バンドンは昨年五月のドイツ軍オランダ侵入以來不穩の氣に満ち、ドイツ人に對しては勿論、最近はその同盟國たる我が日本に對しても快からず、在留邦人に對して一回ならずの不祥事を起しつゝある處。そこで高田日本人會長を招いて、數時間に互つてその實情を聞いたが、流石に生々しい現地報告には大いに得るところがあつた。在留邦人の長老、中堅が今日を築く迄には十年、二十年、三十年血涙の努力がある。之を保育、長養するは當然のことであるが、その任に當る人は肚あり、經驗あり、力ある人でなければならぬ。十一時日本人會長去り、更に要務を辨じて寢に着いたのは午前一時であつたが、階下の歡聲は尙ほ酣であつた。知らず本國を失へる彼等の心境如何。歡樂の裡に哀調あり。彼等の立場を思へば、寧ろ同情の感が湧くのである。

二十六日朝六時起床、七時朝食、八時出發。六十キロを驅つて十時半、三千二百尺の高原にあるホ

テル・ニャンプランに行李を下し、更に去つて四千五百尺の高原ホテル、チソロバンに着いて暫らく休息した。

チソロバンホテルはニャンプランより約十五キロ、八千七百尺のチコライ山を眼前に望み、前後の庭園には百花爛漫、涼風到つて四時暑を知らざるの仙境である。四年前にはニャンプラン二泊の豫定を變じて、わざ／＼一夜の静寂を味つた處、當時の光景は今猶ほ眼前に残つて居る。その時に泊つた部屋、小禽の入つたこと、花畑、チョコレイの鬱々蒼々たる姿、何れも舊の如く私をして頓に旅懷を慰めしめるものがあつた。空室さへあれば、此ホテルに一泊したのであるが、祭日のこと、て全室満員、已むなくコクテール一杯にベランダで休憩し、老若男女嬉々として眼前に展開する夢の如きの樂境に於てプールに水浴してゐるのや、花畑をそゞろ歩きしてゐるのを見てゆるゆる會遊を偲んだのであつた。前回はまだ十月始めで、花の満開は當然と思つたが、十二月の末でも同様花に満ちてゐるのは、熱帶の恵まれたる風色として天恵の渥きを思はざるを得ない。

十七 智蘇魯盤客舎にて 十二月二十六日

智山如舊 拔雲根、紅卉黃花掩紫垣、

游跡分明在眼底、小禽入室午風軒、

智山舊の如く雲根を抜き、紅卉黃花紫垣を掩ふ、

游跡は分明に帳底に在り、小禽室に入る午風の軒、

結句に小禽室に入る午風の軒と歌つたのは、今私の坐つてゐる前の建物が嘗て泊つた部屋で、小禽が晩に室に入つたことを思ひ出したのである。

正午ニャンプランへ引返し、三十三號室に入つた。小さい部屋で、設備萬般ホームマンとは比較にならない。然し、此の部屋だけが空いてゐたのである。此のホテルには大正十一年歐洲よりの歸途、小谷領事夫妻に導かれ、我々夫婦と四人始めて一泊して以來、今度で三回目である。部屋は小さいが、眼下にガルーの平原を望み、又遙かに聳える連山を眺めた景色は捨て難い。午後小坂堀口兩君はガルー郊外の温泉に遊ばれたが、私は獨り残つて紀行を綴り、静思の時を恣にした。

十八 ガールの高原ホテルにて 十二月二十六日

又趁遊跡上高原、三訪白雲深處村、

風色依然人未老、乾坤浩氣滿腔香、

又遊跡を趁ふて高原に上り、三たび訪ふ白雲深處の村。

風色は依然として人未だ老いず、乾坤の浩氣滿腔に呑む。

此の句の意味は、又曾つての跡を追ふて高原に上つた。白雲深き處のニャプランには三度來たが、風色は相變らず良く、私も未だ老いない。此の高原に立つて乾坤の氣を滿腔に呑む心地は何とも言へ

ないものだといふのである。

ジャバの天恵に富み、蒸々たる民口四千六百萬を擁して、猶ほ綽々たる餘裕の存するのは、全く垂涎千丈たらしめるものがある。前述の通り青々とした水田の直ぐ隣りに、刈取りを待つ黄稻がある。

十九 高原の自動車行 十二月二十六日

朝攀層嶺白雲關、夕度平疇翠靄間、

一路薰風三百里、青苗黄稻後先斑、

朝に攀つ層嶺白雲の關、夕に度る平疇翠靄の間。

一路薰風三百里、黄稻後先に斑なり。

即ち薰風三百里、青苗黄稻が前後して、斑色を呈する實況を歌つたのである。

此處で舊作の二三を述べて、寫實の不足を補ひたい。

ガル―高原客棧 其の一

十里高原一掬涼、廿年重到此仙郷、

客樓今夜何堪感、虎擲龍拏夢一場、

同 其の二

朝出王都車若翔、好山好水畫中行、

快馳二百卅餘里、仙一郷還仙一郷、

チソロバン客棧 其の一

愜心又好養吟魂、夕泊西瓜最上村、

不_レ管前峯紫將黑、一庭花彩正爛斑、

同 其の二

避_二將塵境_一領_二仙寰_一、浴後落_レ窓欲_レ暮山、

忽看小禽飛入室、天涯有_レ友去無_レ言、

此の感は今も異ならないのである。

熱帯に来て眼に着くのは早起の習慣である。之は日中極暑の爲めに、朝の間に働けといふ自然の法則とも言へる。先住民族も夜の明けないうちに畑に出たり、三々五々街頭に出て仕事をして居るが、オランダ人も同様で、午前八時には大抵事務所に出勤するのである。そこでこんな詩を作つたことも覺えてゐる。

曉を破つて行く

尊食上_レ程心亦清、連山黛色欲_二分明_一

更怡早起茲成俗、無數黎庶破_レ曉行、

世界を見渡しつ、

夕食後三人一室に相接して眠り、明くれば二十七日六時起床、六時半朝食、六時五十分ホテルを出で、一路バンドンを経て長驅再びブンチャック越へに小憩して、ブレアンガー高原を俯瞰しつゝ、軽いランチを攝り、バイテンゾルグを過ぎてバタバジャに歸つたのは午後一時、二百五十キロを六時間で突破したわけである。

ホテルの部屋に入つて、直ちに豫定を定め、南協の岩見君を伴つて下町に三井、三菱、正金、臺銀、南國、南洋倉庫、東印度日報等を経て上町に引返し、總領事館、ジャバ銀行總裁邸から轉じて同銀行を訪ふて蘭印日本協會々長ウキツヘルス君に敬意を表し、官邸に石澤總領事を訪ふて用談、六時ホテルに歸つて一浴更衣、七時半再び官邸に總領事を訪問晚餐を共にしつゝ、意見の交換をし十時歸館、元の第四百十八號室に入つて十二時過漸く眠つた。

舊知の官房長イデンブルグ君は、三十年の春、私が始めてジャバを訪れた時の總督インデブルグ氏の令息で、前回訪問した時は教育局の長官であつたが、今や總督の最高幕僚として重要な位置に在る人である。私はその面會を楽しんでゐるが、病後靜養の爲め三週間の休暇を得てフキリツピンへ出掛け、一月中旬でなければ歸らないとのこと、残念ながら断念したのであつた。其他の蘭人側との會見はウキルヘルス君と面會の後に行ふこととした。

ホテル・デス・インデスはガルーのニヤンプランよりも一層親しみのある處で、一度ホテル・ネザ

ーランドに泊つた外は常に此處に投じてゐる。先に小林全權の泊られたのも、現に芳澤使節の泊つて居られるのも同じく此のホテルである。特に私の泊つた第四百十八號室は、昭和十一年に泊つた第四百十七號室の隣りで、室内の設備、器具、浴室、寢室、ベランダ、事務室いづれも快適、熱帯生活といふことを考慮して甚だ至れり盡せりであるから、旅客としては落着いた生活を生活することが出来る。そこでホテルを自家として泊つて居る人々も少なくなく、ファクトライの前社長で現に爲替管理局長の舊知、クレナ・デ・ヨング君の如きも第五百十號室に起居して、此のホテルから通勤して居るのである。

三 バタバジャの忙がしい日は續く、

二十八日朝は芳澤使節タンジョン、ブリオク上陸の日なので、在留同胞の重なる人士は皆出迎へに行き、日蘭會商の蘭人側も同様なので、獨り部室にこもつて出です。十一時半約を踏んで來訪されたエルスリ夫人を迎へ午餐を共にして語つた。

前遊の時、夫君エルスト君はバンタムの知事であつた。私はその案内で蘭印發祥の地たるバンタムから遠くスダン海峡の邊まで巡視して、創業の當時を偲んだのであつた。後、官を辭した同君は、暫らく東京なる夫人の里に假寓されたこともあり、當時もオランダ公使館その他で時々相語つた思ひ出

がある。同君は先頃歸瓜し、夫人も最近東京から移住されたのであるが、折悪しく夫君は病後とあつて夫人のみが來訪されたのであつた。夫人は目白女子大學の出身で、二十餘年前エルスト君に嫁し、ジャバに於ける日本婦人中最も優れた人の一人である。夫人から時局に對する一般の空氣やその他に就て詳しい實感を聽いて得るところが少なくなかつた。午後二時の汽車で夫人はバンドンに歸られ、私は部屋に入つて始めて此の地特有の午睡をとつた。蘭人は大抵午睡をとる習慣で、午睡は生活の一部を爲すと申してもよい。午前は八時頃から働くが、暑い日盛り、午食後三時頃まで休養するのである。店もその時間は休んで、午後四時頃から又復た開くのである。もつとも日本人商社や銀行は、先住民族や華僑との取引關係等から、午餐の時間を除いては引續き執務して居る。試みにふわ／＼したペランダのソファに横たはつて、華胥の境に遊び、覺めて庭禽の聲を耳にしつ、午後の茶を味ふと、自ら心氣の爽然たるものがある。

午後五時舊友原口君來訪。同君はセレベスに事業を持ち、現に代表部に顧問の名を連ねる、ジャバ在留邦人中屈指の事情通である。同君から蘭人の心理状態、今回の交渉經過等に就て聽取、流石に得るところ少くなかつた。晚餐を共にした原口君は九時辭去され、私は獨り部屋に歸つて靜思、マンデ―を試みて辱に就いてバタビヤの第二日を終つた。

此の日、蘭印情報部長リットマン君は、圓、ギルダの新協定に關する談を發表したが、是はジャバ

銀行ウキツヘルス總裁と正金銀行今川支店長との隔意ない友情に芽生へ、遂に實を結んだもので、彼我通商貿易の促進に裨益するところ少くないと思はれる。

午前十一時發表のリットマン情報部長談は次のやうなものであつた。

『我等は去る十二月二十四日、ジャバ銀行の横濱正金銀行との間に、蘭印と日本との間の爲替取引の圓滑化の目的を以て、協定を成立せしめたことを聽いたが、我等は此の協定が兩國間の通商貿易促進に貢献するであらうことを希望する。

此の機會に、ジャバ銀行は東京正金銀行内に圓貨の當座勘定を開き、又横濱正金銀行はバタビヤのジャバ銀行内にギルダ―當座勘定を開くこととする。此の協定の目的は、此等當座勘定を通じ、現金支拂を可能ならしめんとするものである。

一方銀行の殘高が相手方の銀行との間に決めた一定金額を越へた場合は、その銀行はその超過分だけ相手方銀行から米貨ドルを買ひ付ける資格が與へられる、この協定の技術的話し合ひは現存の圓貨とギルダ貨の關係を何等變更するものではない。

然しながら此の協定によつて決済が簡易化される爲め、賣買爲替率の如きは一層近く決定されることになるであらう。

將來、蘭印内の諸銀行は、例へば日本から商品を輸入するためには、支拂ひのためジャバ銀行に直

接圓を求めなければならぬであらう。

蘭印爲替管理局でも、此の協定に關して銀行に既に通達済みであり、又これに關する措置も同時に発表した。日本に於ても同様な措置がとられたものである。』

又、芳澤使節上陸の第一聲は、兩國交渉の道を拓くものとして、之も次に掲げて置く。曰く、

『自分は今回、小林商工大臣の後任として渡來した次第であるが、出來得る限り速かに殘された問題に就て商議を開始したいと思つて居る。自分は日蘭印間に緊密なる友好關係を維持増進することの必要性の重大なことを顧念し、之を以て日蘭印相互の利益なりと確信して居る。従つて此の見地に基き、自分は才能の最善を盡し交渉の任に當る心算であるから、關係各方面に於かれても眞面目な協力支援とを切望する次第である。』

といふのであつた。

二十九日は例によつて七時起床、コーヒ一杯を傾けてマNDERし、朝餐後同宿の川本君と語り、總領事館の〇〇副領事を招き、午餐を共にして華僑問題に關する同君の研究を聴取した。華僑問題が東亞新秩序建設に重要な一要素であることは言を待たない。汪政權の發展が華僑の向背によるところ少くないのも亦事實である。私は在南の華僑が汪政權支持、日支和平の線に沿ふて動くことを期待するのを無理だと思はへない。〇〇君は東亞同文書院出身で、永く南支に在り北京にも駐在し、スラバヤ

を経てバタビヤに轉任された篤志の士であるが、此處にも書院出身の一枚を見出したことは私の喜びであつた。

君去つて三時からその日も一睡を試み、覺めて午後の茶を岩見君と共にし、六時蘭印副總督兼蘭領評議會議長スピット君秘書官ドクトル・ヤンセン君が日語を學び、篤學の士であると聞いたので、その寓ホテル・ガレリーに訪ふて蘭印の歴史、古文書等に就て相語り、七時歸つて岩見君と晚餐を共にし、得るところの華僑に關する研究文書を閲讀して、十一時寐に就いた。

朝來の雨は止まず、ジャバの雨期も困つたものだと思ひながら、夢はやがて祖國に飛んだのであつた。

四 蘭人側との交驩

三十日は早起、午前八時既に街頭に出で南協支部を経て、商店街に食料品、靴、布地等の土産を買ふて日昌丸に托して東京へ送つた後、東亞局にローピンク君を訪ねた。同君は日蘭交渉一方の立役者である關係上、日本人側には種々の批評もあるやうだが、彼は私と會見して、

『幸に芳澤使節、石澤總領事、小谷領事を迎へたのだ。今後幾多の波亂はあるであらうが、決して前途は悲觀しない。必ず何とか纏まるであらう。』

と言つた。その時、彼は

『私の父は本國で農務大臣をしてゐたことがありますが、井上さん、貴方はきつと御面識があるでせう。』

とのことなので、

『面識があるどころか。御尊父は私が二十五年前の冬、バイテンゾルグへ参つた時、農務局長であられた。その時、蘭印上下は悉く我企業に對して好意を寄せられ、時の總督ファン・リンベルグ・ステイルム伯爵の紹介によつてロービンク局長を訪ねたのであるが、御尊父はジャバ、スマトラで企業をするなら技師をお借し申さうとか、日本人研究者は自由に農事試験場へ入れようとか、高等農林學校にも日本學生を入學させようとか、色々親切な御申出があつた。オランダ本國で、大臣時代の御尊父に面會したかどうかは、今記憶に残つてゐないが、ロービンクの名は忘れられぬものです。』

と答へた。

それから總領事館、代表部、陸海軍武官府等を歴訪して改めて挨拶をし、十一時轉じて下町にウキツヘルス總裁、アルゲミーネ・ランドパウ・シンジカートのクラーマ博士、ハンデルス・マスカツピ一のヒル事務等主なる蘭人を歴訪して同じく挨拶を交換して歸館、食後〇〇副領事、咲村正金副支配人、新聞特派員、東日記者等の訪問を受け夜に入つた。夜は七時から前田海軍武官邸に赴き、晚餐を

共にしつゝ、親しみ深く語り、九時ホテルに歸つて更に總領事館、南協の諸君と打合せを遂げ十一時寢に就いた。

五 あはただしい年末年始の飛行旅

華僑頭首との會見

三十一日は曉起、二三氏の見送りを受けて自動車を飛行場に走せ、七時半發のクニルム機に投じてサラマンに向つた。スラバヤの天野南海支店長も同乗されたが、乗客僅かに五人、年末で往來の乏しきによるのであらう。機は忽ちにして上空に上り、眼底の乾坤點塵なく、右には一萬尺に上る西ジャバの高山が點々として雲外に聳へ、麓にはキナ林、コーヒ園、茶畑、さてはゴム園等が點綴され、又平野には水田が或は青く、或は黄に相連り、村は村と接し、家は家と接し如何にも樂土の天恵を示す好風景であつて、四年前に同じく飛行機によつてバタビヤからスラバヤに飛んだ時のことを思ふの情に堪へなかつた。況んや時も時、歳晩に當つてジャバの空を飛ぶとは、追々たる身世、我れ自ら笑ふ堪へたるものがある。

二十 サラマン行の飛行機上 十二月三十一日

乗機歳晩入ニ高旻、寥廓乾坤絶點塵、

世界を見渡しつゝ、

誰知炎南千里客、將迎六十五回春、

機に乗じて歲晚高晏に上り、寥廓たる乾坤點塵を絶つ。

誰か知らん炎南千里の客、迎へんとす六十五回の春。

之は身は炎南千里の外にあつて、將に六十五回の春を迎へんとする氣持ちを歌つたのである。これについても昔の詩に次のやうなものがあつた。

終日高山を仰ぐ

禾黍菁菁百里間 行行鎖日客心閒

玉容一萬三千尺 卽是瓜哇不二山

又一萬二千餘尺のストラマツト山を仰いだが、その秀容は寧ろわが富士山に優るやうである。唯だ惜しいことには雪がない。そこで次のやうな詩を作つたことも記憶してゐる。

ストラマツトを雲表に望む

芙蓉八朶向天開 故國神山彷彿來

可惜炎南不看雪 居然富嶽萬峰魁

山麓には支那人の墓が累々として在るのが眼立つ。彼等は千二百年の昔から此の島に渡つたので、既にジャワ丈で七八十萬も居るであらう。漢民族が牢として抜くべからざる力を持つて居ることは、

此の多數の墓、然かもそれが立派に維持されて居るのを見ても解るのである。四年前、私はかう歌つた。

沿道到る處支那人の墓地有り

墳塋累累碧山隈 漢族霸圖留迹來

植到隣邦三百萬 孫嶺嶽麓別天開

私の恆に言ふ、ローマは一日にして成らず、犠牲の在る處則ち底力が生れる。種子を蒔けば實る、蒔かねば實らぬといふ眞理は、支那人の墓を見ても實感されるのである。

飛行機は流石に速い。九時十五分には早やスマランに着き天野君に掛し、正金笹村副主任に迎へられ、直ちに出張所に入つて建源社長の黄中涵君を訪ねた。建源はいふ迄もなく蘭印華僑百五十萬中第一の富豪、網を世界に張つて、貿易に、企業に、航運に活動して居る世界的規模の大會社である。堂堂たる新式の大建築を見ても、その廣汎な規模が解るが、其の實力は相當深く根強いものといはねばならぬ。現社長は父祖の業を繼いでゐる四十幾歳の壯年で、専務の韓君も列席して話は東亞共榮圈の確立から、蔣政權の歸趨、中日の和平から在華華僑の心理、建源自體の經營方針等に及び、歡談二時間餘、互に會得するところが少くなかつた。彼はオランダ籍民であるが、猶ほ孫中山の肖像を掲げてゐる。私が中山の舊知とあつて、一層心をうちあげたのであらう。

十二時半正金に引返したところ、バタバヤからの電話で、總督との會見は一月二日午前九時半との報知である。これより先、バタバヤ出發前、石澤總領事に電話したところ、芳澤使節との會見が二日と豫定されてゐるので、私はその後にならうとのことであつたが、事實は私の方が先になつて終つた。そこで元旦の飛行機でバタバヤに引返すことに決し、幸にその坐席を得た。今度のサラマン行は、黃君との會見が唯一とも云ふべき用件であつたから、その用件は終つたし、歳末多忙の同胞を訪ねることをひかへ、只だ笹村君とのみホテル・バビロンに午餐を共にした。このホテルも私には舊知である。笹村君に別れて、一路六十キロを馳せた私は、オンガラン山腹海拔四千三百尺の高原に設けられたる、高橋君經營のアンブル・ガーデンに投じた。

此の花園は先年、やはり同君に迎へられて午餐をいたゞき、高原の風色を恣にしたことがある。今、又この親しみあるガーデンに紀元二千六百年を送り、二千六百年を迎へるのも何となく微笑まれるのである。折から熱帯式の豪雨沛然として至り、天地爲めに晦冥、形容し難いもの凄景色であつた。そこで、

二十一 アンブルガーデンの高橋農園にて 十二月三十一日

白雨覆盆天亦昏、涼風颯颯滿高原、
故人迎我今如昨、楚楚山樓笑語溫、

白雨盆を覆して天も亦昏く、涼風颯颯として高原に滿つ。

故人の我を迎ふる今昨の如く、楚楚たる山樓笑語温かなり。

豪雨は盆を覆して天も亦昏く、涼しい風が此の高原一帯に滿ち／＼て居る。故人は我を迎へること今も昔も變らぬ。そこで、同宿の青年數名を集め、盃を舉げて年の暮を送つて寢に就いたのは十二時を過ぎて居た。山樓の笑語はいかにも温かな實況であつた。猶ほ夜に入つて雨晴れ、眼下に電燈が煌煌たるものを認めたので尋ねてみると、それは島内に於ける蘭人のナチス五部隊を拘留してゐる新設のバラックであることが解つた。此處にも姿を變へた南方樂土の一風景が見られたのである。

六 高原の正月

花園は四千三百尺の上に在るので、然も雨後のこと、て熱帯に在るの心地もなく、全くわが秋であつた。雞の聽を聲いて、元旦六時に床を出ると、陽光燦々として乾坤を輝らし、眼前に在る九千二百尺のメルパウ、その背後に姿を見せて居るメラビーの活火山、一萬一千尺のソンビン、一萬餘尺のソンドロが尊き姿を現はし、又庭前庭後の花晶には百花爛漫と咲き亂れて居る。主人の植ゑたキナ樹、日本杉等が大きな榕樹を圍つて、如何にも光景雄大且つ好麗で、何とも形容出來ぬ清淨な元旦であつた。ソンビン、ソンドロの兩山を眺めた詩がある。

世界を見渡しつ、

ソンペン、ソンドロの峽を過ぐ

高一萬三千尺山 人過雙嶺翠微間

駐車崖上不能去 如此大觀稀可班

衣を更めて、遙かに東方を拜して、聖壽の萬歳を頌した。そこで、恭々しく次の一絶を得た。

廿二 紀元二千六百一年元旦

庭前花接遠山眉、眼底雲生珍客肌、

遙拜東天倚高閣、頌將聖壽賀新禧、

庭前の花は接す遠山の眉、眼底雲は生ず珍客の肌に。

遙に東天を拜して高閣に倚り、聖壽を頌し將て新禧を賀す。

かくて一同、日本酒と雑煮に家郷そのまゝの正月を迎へ、それから高橋君の案内で花畠や牧場を見、正午正金笹村君を迎へ、相携へて花園を辭し、一路山を下つて反対側の高原避暑地ホテル・コツペンに上つた。山腹に朱薔白屋、軒を連ね、蘭人の正月を山莊やホテルに迎へて、或はプールに或はテニスコートに嬉々たる様子、世界大戰もどこに起つてゐるのか、やはり南方は樂士であるとの感が深かつた。ホテルに小憩してビールの盃を傾け、快談する間もなく相うながして再び車上の人となり、一路七十餘キロを下つて、午後三時四十分スマラン郊外飛行場に着いた四時十五分發の定期でバタバヤ

へ歸る爲めである。これより先、アンブル・ガーデンで又一首を得た。山莊の半日靜かに詩魂を役したことを歌つたものである。

廿三、同 其の二

嶺雲溪霧濕苔痕、芳草馨花繞彩門、

鷄旦山莊天宇爽、畫圖景促幾詩魂、

嶺雲溪霧苔痕を濕し、芳草馨花彩門を繞る。

鷄旦山莊天宇爽かに、畫圖の景は促す幾詩魂。

笹村否と別れて機上の人となつたのは、定期に遅るゝこと十五分、四時半であつた。歳晩にバタバヤを立ち、元旦再び歸つてバタバヤの人となる。これも飛行機のお蔭で、多忙なるわが人生には自ら微笑の他はない。機上二首を得た。

廿四、元旦又バタバヤに歸る 其の一

元旦駕機天外浮、山河的歴映斜暉、

不知鄉國那邊是、志在善隣猶未歸、

元旦機に駕して天外に浮び、山河的歴として斜暉に映す。

知らず鄉國那邊か是なる、志は善隣に在つて猶ほ未だ歸らず。

世界を見渡しつ、

廿五、同 其の二

山村水郭送相迎、孤鶴冲天氣宇清、
 一瞬飛過三百里、吟思未定到吧城、

山水郭送つて相ひ迎へ、孤鶴天に冲して氣宇清し。

一瞬に飛び過ぐ三百里、吟思未だ定まらず吧城に到る。

其の一は元旦に天外に飛べば、眼下の山河は的歴として相映じてくる。知らず郷國の何の處か是なる。私は今、志を善隣に抱いて此の地に居るので、未だ歸らないといふのである。

其の二は山村水郭送つては迎へ、孤鶴天に上つて氣持は轉た清い。僅か二時間で三百マイルを飛んだので、一片の詩も就らない中に早やバタバヤに歸つたといふのである。

六時バタバヤに着き、南協の堀口、岩見二君に迎へられ、ホテルに入つて用務を辨じ、十一時暮に就き、この愉快なる元旦を終つたのである。

七 蘭印總督との會見

翌くれば二日早起、總領事館の増田君を伴ひ、八時大雨を冒してバタバヤを出で一路六十キロを馳せて、九時バイテンゾルグ着。まづキペロン總務長官をその私邸に訪ふて久淵を叙し、九時二十五分

總督官邸に至り海陸兩武官に案内されて、ファン・スターケンブルグ總督と面會した。

總督は四年前に私を引見せられた同じ部屋に、同じ温顔を以て迎へられた。話は廣田内閣時代に帝國の眞意を披瀝した當時の思ひ出話からその翌年、オランダ本國に赴きヘーグのわが公使館に寄寓する二十餘日、連日連夜に亘つてコライン首相兼外相、ベールト・ブロークランド樞相、植民、農務、文部の閣僚始めファン・ワレ日蘭協會々長、アムステルダム、ロッテルダム兩商工會議所會頭、其の他朝野の主なる人士と交驩したことから、現今の國際情勢の變化に及び、我が國民は依然蘭印と善隣友好關係に立ち、相互互讓の精神により國交の圓滿を期待し、芳濟使節、石澤總領事等と蘭印側の忍耐と努力により、その目的を達成せらるべきことを信ずる旨を述べ、更に過去三十餘年に亘り日本蘭印間の平和の橋として微力を捧げ來つた自分としては、今後も同じ熱意を以て努力する故、蘭印側に於ても例へばウキツヘルス君の如き有力者の中に私同様の氣持を以て善處する人の多からんことを期待する旨を話した處、總督も一々首肯して相互圓滿の解決を圖りたい意向を洩らされた。私は又、持参した拙著『詩と人と境』の中に挿入した寫眞を示し、

『これはコライン首相が私に贈られたチューリップの球根が、遠く海を距てた日本の私の茅屋に移植されて咲いたところで、その爛斑たる様を見るにつけても、日蘭兩國の親善を自然の法則までが希望してゐるやうであります。』

と述べ、前回來遊の際に手に入つた總督着任當時の寫眞をも示して、懐舊の話題とした。總督は私の蘭印に於ける企業状態や伊藤公統監時代の韓半島に於ける私の閱歷等に就ても言及され、頗る愉快さうに見受けられた。そこで私は更に改めて二十五年前、スチルム伯の總督時代、スマトラの企業に就て總督並にローピンク局長や農事試験場長等から好意ある援助を受けたことを想起し、現在の緊迫する情勢に遺憾の意を表すと共に、速かに兩國の平穩なる關係に引戻したいものであるといふ熱意を披瀝したのである。かくて快談約四十分の後確い握手を交して辭去、十一時過バタビヤに着き、總領事館をめぐつて記者團と語り、今後の日程を練つた。

前回、蘭印總督を訪ねた時、私は次の詩を得た。

一從南土訪藩廷、回首空加廿六齡、

舊知嶺峯八千尺、剉羅山翠一迎青、

そこで、之に次韻して、

廿六、正月二日再訪蘭印總督 次舊韻

和風依舊滿藩廷、別後回頭加四齡、

再會今朝談底事、天晴山色一層青、

和風舊に依つて藩廷に滿ち、別後頭を回らせばや四齡を加ふ。

再會して今朝底事をか談ず、天晴れて山色一層青し。

と歌つてみた。和かな風が舊の如く官邸に吹き滿ちて居る。一別以來早や四年の月日を経たが、今朝復た會つて様々の話をした。官邸前には雨後のくつきりとしたザーラの山色は一層青い、感無量といふのである。明治四十四年に始めてイデンブルグ總督と會見してから、あの時まで二十六年なので『廿六齡を加ふ』と歌つたが、今は三十齡を加へたわけである。何といふあわたましい人生であるか。ザーラの山の緑はいつ見ても變らない、自然はかくの如く無心で朗らかであるのに、人間は何故區々の愛憎にこだわらねばならぬか。山に對しても日蘭交渉は是非成立せしめねばならぬ。

長男はドイツ轉任の爲め、一月二十四日カルカッタ出發一旦東京へ歸るとの電報を寄越したので、最近カルカッタから轉任された宮脇君を招いて相語つた。私の英領印度行は一昨年來の懸案であるが支那行の爲め機会を逸したので、今次は是非一遊せんものと豫め英領印度政府の許可を得、旅券の査證をも貰つて置いた。然し、今後の豫定がまだ確定しないので、私の行く行かぬに拘らず長男には豫定通り出發せよと返電を依頼したのである。

八 經濟相及び東亞局長と語る

三日は午前九時から出動、まづ芳澤使節、太田代表をその新假寓に訪ふた。新假寓は元イタリ―總

領事官舎で、三菱の賃借してゐるもので住宅街に最も景勝の地を占め、建築の様式も室内の装備も最も熱帯生活に適して居る。芳澤君には此の好居で悠々頽張つて貰ひたいものである。

陸軍武官室を経て、十一時東亞局長ローピンク君を訪ふ。彼は前述の通り、日蘭交渉當面の人で、『石澤、小谷兩氏の再來任、芳澤使節の來着によつて緊張の空氣はやゝ緩和の方向を辿りつゝある。會議の前途は必ずしも悲觀を要せず、否寧ろ樂觀を以て當面の障害を排して善處したい。』と洩らされたので、私も總督に語つたと同様、

『互譲と誠意によつて一段の努力を望みます。』と述べ終始談笑裡に終つた。

十二時半下町の正金に今川支店長等と會し、午餐を共にしつゝ、同君から爲替協定に至つた事情を始め、ウキツヘルス君が蘭印に於ける財界の巨頭として總督の最も有力な經濟顧問であること、日本を能く理解せる一人であること等を聞いた。いふ迄もなくウキツヘルス君は蘭印日本協會長として、私とは相當懇意の間柄であるから、此の話は實にうれしかつた。

午後四時十五分、約により日蘭會商蘭印側代表、經濟長官ファン・モーク君を官衙に訪ひ儀禮を交換した、ファン・モーク君もローピンク君同様わが國に來朝されたことがあり、儀禮交換の中にも自ら和かな氣持が流れた。私の望むところは、此處でも同じく一つ、會議の成功を祈り同代表の善處を

望むのみである。五時辭去、街頭で買物をし、六時宮脇君の來訪を受けて更にカルカッタへの打電を托し、七時半からは小谷邸の晚餐會に臨み、堀口君夫妻も同席された。領事夫妻とは二十餘年來の知己で、大正十一年我等夫妻が歐米漫遊の歸途當地に立寄るや、共にガルーの高原に同宿したこともあり、バタビヤに於ても色々お世話になり、昭和十一年蘭印總督府訪問の際も領事の同伴を得たこともある。従つて懷舊談も多く和氣部屋に満ち、食事後更にベランダに出で、折からの新月が西に落ちんとするのを望みながら、十時半漸く辭去した。

九 爲替管理局長とも語る

四日午前中は岩見君を伴ひ、博物館に領内各種族の文化を檢討し、産業館に領内各地の豊富なる物産を研究し、後メダン、シンガポール間の飛行機切符をレザープし、歸つて二時半〇〇君と華僑問題を語り、四時から再び街頭に出で、七時に爲替管理局長クレナ・デ・ヨング君と語つた。同君は嘗てフアクトライ社長であり、バタビヤ一方の有力者、先年オランダへ出遊の際面識を得てゐるので、これ亦胸襟を開いて語ることが出来た。

この日は土曜のことゝて、芳澤使節もスカブミのセラピンタナ・ホテルに赴かれ、その他の多くもバタビヤに居らず、私は一人新月を仰ぎ、靜かな夜趣を味ひながら十一時夢中の人となつた。

十 安息の一日

五日は新年の第一日曜である。内外人の多くは暑を避けて郊外に去り、往來の人も少ない。私は岩見君と共にまつホルトガル寺に創業時代身を熱沙に捧げた總督やその夫人の靈を弔ひ、續いてさらし首に當時の民族運動を偲び、長驅十三キロ、タンジョン、ブリオクに海岸防備の様子を見、午後は映画劇に民風を探つた。開幕と同時にウキルヘルミナ陛下の御尊影を拜し、續いて總員起立裡に國歌が奏され、『ニーデルランド・ザル・ヘルリーゼン』即ちオランダは再び立ち上るべしとの力強い言葉が現はれる。祖國復興を祈念する彼等の熱意がまざ／＼と感じさ、れる。この言葉を書いたパツヂが市中で賣られてゐたので、私もこれを買つてバタバヤに滞在中これを胸のボタンに挿したことであつた。街頭には『スパイを警戒せよ。』とかドイツ人を憎む激烈な言葉が貼付けてある。午後七時ホテルに歸つて安息の一日を終つた。

この夕、靜かに蘭印三百六十年史を思ひ返してみた。

オランダが十六世紀末、スペインに反抗して獨立の運動を起し、之に成功したのみでなく、遠く南洋に探險隊を送り、遂にハウプトマンのジャバ到着となつたが、當時はホルトガル人が頑張つてゐたので、止むなく船をスマトラに返し、それからジャバの西端に在るバンタムに入航した。バンタムの

王は彼等を歓迎したので、之と條約を結んで更にマデイラ、バリイ等の島々にも足跡を残した。續いてバン、ネツクが第二回遠征隊を送つてこれが成功すると、オランダ人は或は會社を興し、或は個人力によつて、先を争つて東に向つた。彼れネツクが第五回の遠征をしたのは、正に一六〇〇年のことで、バンタム迄十ヶ月を要したとこふことである。それから廣東の河口に上陸したのもその際であつた。かくて東洋の事情が解るにつれて、一六〇二年には東印度會社の創立となり、東洋への艦隊は十五、船數は六十五といふ數に上つた。第一回の遠征隊が本國へ歸つたのは一五九七年であるから、此の間僅かに五年、如何に彼等の冒險敢爲の精神が旺盛であつたか、覗はれる。その後彼等の經營は着々進捗し、ホルトガルが勢力範圍として居たジャバ、スマトラへの進出が特に目覺ましく、一六〇九年にヂヤガタラを東洋貿易の本據とした頃から、ホルトガルの勢力は日一日と衰へた。

その頃イギリスは何をしてゐたか。彼等はオランダに先だつこと二年、東印度會社を起して續續商船隊を東洋へ送つたのである。従つてホルトガル、オランダ、イギリス三巴となつて争つたが、南洋方面に於てはオランダが斷然強く、特に一六二三年イギリス、ホルトガルの兩國人がモロカス群島のアンボイナで大量に虐殺せられるに及び、流石に敵しかね十七世紀末にはイギリスは一時手を引き、印度經營に全力を盡すこと、なつた。

南洋一體を制壓したオランダは、漸次矛を北に向けて遂に一六二二年、臺灣を占領してアンピンに

近く、ゼイランジャヤ城を造り、更に臺南に赤崁城を築いて守を固くした。當時の情況は臺北の府博物館に在る文献によつて我々の眼にも曝されてゐるのである。臺灣がオランダ人の手に歸すると、マニラにあつたスペイン人がその占領を削て、一六二六年に基隆に上陸して淡水を取り、附近に幾多の城を築いたが、結局オランダに破られ一六四一年には全島オランダの手に歸した。然し、間もなく一六六一年鄭成功が臺灣に王と稱するに及んで、全面的に敗退したのである。

いづれにしてもハウプトマン以來、冒險敢闘のオランダ人がジャバを中心として、蘭印の經略に當つたことは頗る目覺ましい。就中クーンが少年の時イタリー某商店の小僧となり、東印度會社の有望なことに雄心を誘發され、十八歳にして南洋に渡りその會社の下廻りを勤めたが、すんすん頭角を顯はし、僅か三十一歳で第四代總督の印綬を帯びジャバを統治すること七年、一旦本國へ歸つたが、マラタム王國がオランダに叛旗を翻すに及んで、彼は再び總督となつて之を討伐し僅か四十二歳を以てコレラに罹つて陣中に没した。犠牲は獨りクーンのみではない。かのスタンフオード・ラツフルスの如き、同じく英國東印度會社の社員であつたが、時の總督ミントー卿の信頼を受け、僅か三十歳の若年でナポレオン戦争に際し、蘭印が一時イギリスの管理に移ることとなつたので、ジャバの副總督となつたことはシンガポールの建設者としての彼の名と共に不朽に傳へられてゐる。彼は最愛の夫人をバイテンゾルグ駐在中に失ひ、其の墓を植物園の一角に建ててゐるが、墓碑に「我忘れず、永久に汝

を忘れず」といふ意味の文字を刻んでゐる。彼の一生は悲惨を極め、不遇の中に四十四歳の短生涯を終へたことは實に同情に堪へないが、シンガポールに於けるラツフルス廣場、ラツフルス博物館、ラツフルス記念大學、ロンドンに於けるインピリアル・インスティテュートのラツフルス文献等を見れば、彼があらゆる不幸不運を克服して堂々たる人生の最後の勝利者となつたことは、後世をして讚嘆せしめ、後人をして奮起せしむるのである。今次のシンガポール滞在中、一日ラツフルスブレースのケリー・アンド・ウォルシュ書店を漁つたところ、彼の書いた「ヒストリー・オブ・ジャバ」二冊が現はれて來た。

『いくらだ』

と聞くと、

『三百弗です』

と答へた。喉から手が出たが餘り高いので斷念した。これは餘談であるが、彼の書いたものが二冊で三百弗もするといふことは、如何に彼の妻が英人の心の中に今猶ほ去來して居るか解るではないか。

かく考へる時、又してもローマは一日にして成らずといふことが、しみじみ感じさゝれる。我々は之を自省自奮の材料とすると共に、自ら進んでクーンとなり、ラツフルスとならねばならぬ、といふ

やうなことを考へてゐるともう夜も更けて來るのであつた。

十一 朝夕の涼味、快的の生活

附記したいのはホテル生活の朝夕のすがた、しい氣分、快適な氣持である。特に朝の一時は千金に値するものがある。

前述の通り蘭印では先住民族も早起で、大抵未明には起るが、オランダ人も中々朝が早い。これは熱帯生活自然の要求であらう。私にとつても蘭印の朝は思案の時であり、仕事の時であらねばならぬ。ジャバでは年中六時過に陽が出て、六時頃に陽が没するのである。私は大抵六時半には起出で、廣いベランダに姿を現はし、是れ亦極めて心地のよいソファに腰を下し、ボーイの齎らすコーヒの一杯に睡氣を覺し、澄み渡る大空を眺めつつ大氣を吞吐し、更に長椅子によつて安息して居ると、直ぐ眼前にある榕樹の周囲は、それこそ百尺もあるべく、鬱々として軒檐を覆ひ、高々として天に聳へてゐる。又小禽が嬉々として舞ひ、時々飛んで部屋の中へ入つて來ることがある。以前、チソロパンの高原ホテルで小禽の入つて來たことを歌つたが、これはチソロパンに限つたことでない。このホテルでも時々あることで、如何にも平和な世界の一象徴であるかに見へる。

六日朝、ヨング君と共に朝食を攝つたが、彼はかつきり八時五分前にホテルを出て行つた。此の朝

の氣持を歌つたのが左の詩である。

廿七、 朝 一月五日

欣欣小禽繞舍鳴、高高榕樹壓軒楹、

滿身爽氣吧城旦、醒却天涯驛夢輕、

欣々たる小禽舍を繞つて鳴き、高々たる榕樹軒楹を壓す。

滿身の爽氣吧城の旦、醒却す天涯驛夢輕し。

詩の意味は欣々たる小禽が、家をめぐつて鳴き、高々たる大榕樹が軒を壓してゐる。バタビヤの朝は身に浸みるの爽氣が、いかにも氣持よく、遠く天外に客となつてゐる氣がしないといふのである。夕食前の一時も亦捨て難い。日中は日光が直射して暑に堪へられないこともあるが、陽が西に傾くと自ら涼風が吹きまくつて、爽快の感が深い。六時半頃になつて日が入ると、一層涼味は加はつて來る。そこで夜の會食のない日には、獨りホテルのテラスに出でて大空を仰ぎながら、ビールかコクテールの一杯を傾けて長嘯することを生活の一部とした。恰も新月の素晴らしい時で、又一絶が出來た。

廿八、 新 月 一月五日夜

對盡炎南活畫圖、眼中風物待清娛、

客窓未睡詩難就、起看天邊月一弧、

世界を見渡しつゝ、

對盡す炎南の活畫圖、眼中の風物清娛を待つ。

客窓未だ睡らず詩就り難く、起つて看る、天邊の月一孤。

炎南千里の外に在つても興味は窮らない。眼中の風物は總て詩の中に入つて來る。今宵も爽かて眠り成り難いから獨り戸外に出て天邊の月、弓に似たるを仰ぐといふのである。

十二 忙がしい月曜

六日朝七時半、ヨング君と朝食を共にし、九時にはウキツヘルス君の來訪を受け、十時半には南協支部を経て、クニルム飛行取扱所に赴いて旅行のことを定め、正午にはホテルへ歸つて臺銀の森支配人と會食し、午後二時半部屋に歸つて小憩、先に問合せたメダン、シンガポールの間の飛行坐席を得たついでに、更に旅程を案じてシンガポール滞在を一週間とし、バンコックへ飛ばんとして之を相談したところ、何れも都合よしとのことに愈々十九日にはメダンからシンガポールへ、二十六日シンガポールを立ち廿七日にバンコック着のKLM機によることとした。同時に右旅程に關し、メダン、シガポール、バンコックの三方面に發信した。午後四時半、南國産業松原支配人來訪、ジャバの農業を聽き、七時から大東酒家に南協の堀口君他五君を招き、青空の下青草の上、新月を仰ぎ野天にて支那料理を飽喫した。南協支部も私が大正六年、松本君の總領事時代、時の總督スチルム伯の贊同を得て

開設してから、早や二十五年の月日を経過した居る。最初の常任幹事小谷君が今の小谷領事である。舊記を繕いてみると、時の芳川會頭がスチルム總督に送つた手紙がある。その大要に曰く

『南洋協會は南方諸國と我が帝國との間に於ける相互の事情を疏通し、彼等の經濟的發展を圖り、且つ國交の親善を期する爲め、わが國に於ける有力なる官民一致の贊同によつて設立されたものである。特に貴國と我國とは深き歴史的因縁を有し、地理上より見るも將た經濟上より見るも、利害相一致すべき關係にあつて、相互の隔意なき了解はやがて彼我の經濟的結合を一層強固にし、以て兩國人の幸福を増進せしむるのみならず、又世界的平和に寄與するあるものを信ず、是れ本會が相互の事情を闡明し、兩國人士の親善を媒する爲めいさゝか努力しつゝある所以である。』

本會は嘗て貴國の催しにかゝる東印度博覽會に際しても、之を邦人一般に紹介し以て日蘭貿易に資するところがあつた。又昨秋、貴國政府よりの農商務長官ドクトル・ロービンク氏を一般人士に紹介し、且つ歓迎したるが如き常に善意的仲介の勞を取つて來た。

近時兩國間の貿易も益々良好、邦人の商用を負ひて貴國に赴く者多く、兩國人間の關係も愈々密接となるであらう。その間に立ち世界人道の爲め、兩國々交の親善に努めんとするのである。今回本會の創立者として當初より盡力しつゝある井上理事が貴國に行くこととなりたれば、本會は同君に託し總督閣下に對し、謹んで深厚なる敬意を表す。

大正六年十二月七日

芳 川 顯 正

かくて私のジャバ滞在中、松本總領事の協力を得て支部を設け、オランダ語に熟達せる小谷君を常任幹事に煩した。当初はオランダ法制の翻譯に始まり、産業、經濟その他の調査發表となり、續いてシンガポール商品陳列館の分館をバタビヤに設くるに及び、業務は進展し商品の紹介、取引の仲介等に及び、最近堀口君を所長として事務益々輻輳しつゝあるやうである。此の夕はこれにあづかる同胞と水入らずの歡談を試みたことは、私の最も喜びとするところでなければならぬ。十時ホテルへ歸り、十一時琴に就いた。

十三 教育視察と華僑問題

七日は教育視察日である。六時起床、南協の山口君を伴ひ中等教育督學官事務所に赴き、フアン・ホイトブレン君と語り、西部小學校督學官クラネン君の案内で市内に在る歐人と先住民族混合の小學校、高等小學校、中學校、先住民族のみの小學校等を順次に參觀した。

私は由來、教育に興味を有し、青年時代東亞同文書院設立に與つたのを始めとし、現在の南洋協會實習生制度を設ける以前、即ち大正六年シンガポールに商品陳列館を開くや館長木村博士は教育家でもあつたから、學生會館部を設けて南洋貿易に志ある青年數十名を前後三年に亘つて見習はしたのが、

事は早や二十五年の昔になる。更に近く東京に於て海外移植民の教育機關を管し、遠くブラジルに農事實習場を設け、北海道の拓植教育機關にも參觀して來た私としては、一日をさいて此の方面を視察することは當然の日程といはねばならぬ。

ジャバに於ける先住民族の教育は甚だ幼稚であつて、資力あるものは遠くオランダ本國にその子弟を送つてゐるが、歐洲大戰後はそれも不可能となつた。現在バンドンに高等工業、バイテンゾルグに高等農林、バタビヤに醫文科大學等も出來てゐるが、まだ一々微々たるものである。混合教育の學校では先住民族が七割三分、支那人一割五分、蘭人及びハーフ、カスト一割二分といふことであつた。七年制の小學校では、最初の一年は馬來語を教へて居るが、漸次オランダ語に移すやうである。かういふ小學校もバタビヤに八校を數へてゐる。案内のクライメン君は蘭印で教育に従事すること二十五年、馬來人、オランダ人の子弟に就て詳しく説明をしてくれたのであつた。

同君に別れてから日本人小學校を參觀した。在外子弟の教育が容易ならざることとは解つてゐるが、時節柄生徒が漸減する事實を示されて今更らの感にうたれた。

十二時半英國總領事H、E、C、ウォルシュ君を訪ねて會談した。彼も亦在任二十五年に及び、昭和十一年にスラバヤ滞在中、姉齒領事の歡迎茶話會に招かれた時に、私と會見したことを記憶してゐるといふことであつた。實は邦人が英領方面へ渡航するには族券の査證極めて煩雜であると聞いたの

で、何等の豫告なく突然同君を訪問したのであるが、彼は快く私を迎へてくれたのである。此處でも私は考へさ、れる。今日泰國に於ける英國公使として令名あるクロスビー君の如き、ケンブリッヂ卒業後前後三十年を泰國に送り、サアの位を授けられて居る。彼が歴代の泰國關係に隱然たる勢力のあることは、決して五年や十年の努力によつてはなないのであつて、實に半生の苦心が結實したものである。然るに我國はどうか。公使の在任は永くて四、五年短い者は一年足らずで轉任してゐる。これでは眞の外交などは及びもつかないといふ他はない。私がバタビヤを訪れる度にわが總領事の顔は變つてゐるが、彼ウオルシユ君は在南二十五年、四年前にスラバヤで面會したといふので、話は滑らかに進行するのである。

十一時ホテルに歸つて西村、佐藤兩君の來訪を受け、零時から南國松原支配人の招待で午餐を攝り、同盟支局長も参加された。午後三時半吾孫子小學校長の來訪を受けて兒童教育問題に就て語り、五時から堀口君の新居に招かれて協會支部員一同と親しい團樂の一時を過ごし。六時半一旦ホテルに引返し、直に約を履んで〇〇副領事宅を訪れ、晚餐を共にして何かと相語つた。〇〇君は北京に在ること多年支那通であるから、話は自然支那問題から華僑問題に及んだ。實は此の日、華僑の有力者と會見の筈であつたが、事故の爲め果さず、〇〇君との會談はこの缺を補つて餘りがあつた。十一時辭去、ホテルに歸つて寢に就いた。

十四、スピット副總督と語る

八日朝もヨンダ君と朝食を共にし、九時から街頭に出で、總領事館に別れの挨拶をし、十一時、一旦ホテルに歸り、十一時半印度評議會に蘭印副總督兼印度評議會副議長たるスピット君を訪ねた。彼も在留三十年、先に明判官として知られ、又蘭印國民參議會（ライオナリス）の議長であつたこともある。彼は私が拓植問題に就て經驗あることを知つてゐると見へ、領内移住問題に就て胸襟を開いて語つた。

『中部ジャバ方面よりする外領への移住は、わが政府に於ても努力を重ねつゝあるが、最初は面白くなかつたのです。スマトラの如き一葦帶水の近くにある爲めでもありませんが、餘り彼等の習慣を無視したのが良くなかつたので、立派な家屋を建て種々の設備をして集團移民をさせても、直ぐ故郷へ戻りたがるのです。そこで最近では、彼等の舊慣性情に即した移住方式をとることにしましたが、なか／＼難しいものです。』

といふことであつたから、私はその參考資料の寄贈を希望したところ、後刻わざわざホテルへ届けてくれたのであつた。

スマトラのトバ湖北からタバヌリ州へ入つたところに、蘭人の植民地がある。これは先年も視察した處であるが、今次再び訪れてみると全然失敗に終つてゐる。然し、その原因は氣候、土地、栽培物

にあるのではなく、移住者の素質が不適當であつたと解つた。

かくて快談一時間固い握手をして別れたが、人間到る處知友ありの感を深くした。十二時半から水曜會がある。此の會はシンガポール、スラバヤ等にも見られる通り重なる銀行、商社の人人が一週一回集つて、食事を共にしつゝ、會談するのである。戒嚴令下の蘭印として多數の集會は一切省くこと、したので、南協其他の總會開催も除け、特に此種の會に列して舊知新知の方々と相語つたのであつた。

十五 ジャバ銀行總裁の招宴

二時半部屋に歸り、東京市經濟局代表佐藤君と語り、六時再び原口君の來訪を受けて種々の問題に就て論じ合ひ、八時半キヤピトルに於けるウキツヘルス總裁の晚餐會に出席した。國民評議會議員のクローネマン君、フアクトラ副社長ファン・デ・スタツト君、ボルネオ・スマトラ商社のカウクエルド支配人、コブラ救濟局のピアズターヘン君等の諸君も出席せられ、何れも親しみ深いバタバヤ財界の有力者であつた。コクテールの盃を舉げた後食卓に就けば、談笑盡さず、酒盃の重なるに連れて更のうち解けて語り會つた。かくてウキツヘルス君に送られてホテルへ歸つたのは、午前もはや一時を過ぎてをつた。

ウキツヘルス君は六十一歳、クローネマン君は五十五歳、その他は五十歳前後の人々で、私は既に六

十五歳、當地では古強者の一人であらねばならぬ。大體熱帯に於ける白人の生活は、二十歳前後に見習として本國より來任、三十年を勤め上げ、五十歳にもなれば豊かな恩給を受けて引退するのが普通である。ウキツヘルス君の如き人は珍しい活動家といふ可きであらう。

古い話であるが、私がジャバに企業をする爲めに總督の紹介によりブレアンガー州の茶園支配人エルブスゲン君と、四十年間ジャバに在つて、土語に通じ當ての茶園支配人であつたベルグマン君それと同行の松本支配人と一行四人、バタバヤを發して遠くスカブミに出でゲテイ山彙を廻り、南下してジャバ島の反對側に候補地を求め視察したことがあつた。エルブスゲン君は四十三歳、六尺豊か、二十五貫の大男、ベルグマン君は既に六十歳を越へてゐるが、元氣は壯者に譲らず、四人自動車を乗り捨て騎馬にて奥深く山村を巡つたのである。或る日、豪雨に遭つて川止めを喰ひ、橋も無いので一旦村長宅に引返したが、翌日更に出發、川又川を渉る中に私は落馬、漸く危機を脱して行を續けたことがあつた。此の時ベルグマン君は先頭に馬を進めて後を顧みず、私が

『オイ、何故俺の危きを見て助けに來なかつたのか。』

となじつても、唯だニコ／＼と逞しく笑ふのみであつた。パイオニヤにとつて、かゝることは尋常茶飯事といふのであらう。六十一歳の彼が、山あれば山を越へ、川あれば川を渡る、全身濡れ鼠となつても毫も意に介せず、たゞ一路驍進して倦まない雄姿は面憎い程であつた。彼の永年に亘るジャバ

生活は、彼の肉體を鋼鐵としたのであらう。流星の私も亦微笑を以て答へるより仕方がなかつた。

更に附記したいことは、蘭人の身體の強靱で且つ熱帯に慣熟してゐること、本國に於て勢力のある人物は、大抵蘭印生活をした者が、蘭印に事業關係を持つ者かであるといふ事實である。オランダ近代の傑物と云はれる元首相コライン君の如きも蘭印には十數年間の生活を経て現にその子供はジャバに居る。ヘーグ・ロータリーの會長はバタビヤ生れであり、ハンデルスバングの專務ダンロツプ君もチェリボンで生れた。此の如く三百餘年に亘る彼等の蘭印統治は其の國人を驅つて熱帯生活に堪へる體格と氣魄を練成せしめて居る。近來、わが青年の體質が面白くないと聞くが、之は最も憂ふべきことで、私共人口問題に關係して居る者としては政府を助け、健康報國の國策遂行に向つて努力せねばならぬことを、一層痛感せしめられるのである。況んや海外に發展する國民は、是非共鋼鐵の肉體と心力とを持たねばならぬ。古い日記の一節に私はかうも書いてゐる。

『雨中の馬行、河川の徒渉、泥土の山登り、共に最近十年來經驗しなかつたところである。私は馬來半島の開拓に當り、草莽を開き虎や象を對手にし、又マラリヤと闘かつた經驗はあるがジャバでの山行は近頃でない快心の一事であつた。近來ジャバに旅行する人は、かの坦々たる大道、田園悉く拓けて鐵道あり、自動車あり、飛行機さへ便利に利用出来る。その安易さは良いが、開拓の深き快味に觸れることは難しくなつた。然し、蘭印の眞の開拓はこれからである。パイオニアはその苦痛を甘受

し、親ら種子を蒔いて、成を後世に待つもの、眞の快味を満喫せなければならぬと思ふので、青少年諸君の雄心に訴ふべく、此のエピソードを附加した所以である。

十六 下街の半日

九日は午前八時半、山口君を東導として先づジャバ銀行にウキツヘルス君と會して最後の別れを惜しみ、新に掘り出されたといふクーンの墓に展し、且つ當年の遺物を參觀した。彼は一六一七年から同二三年に至る第一回の總督、續いて二七年から二九年に至る第二回の總督となり、マラタム軍包圍の中にバタビヤに於て四十二歳を一期として夭折したが、その八ヶ年の努力と犠牲は大蘭印の基礎を築いた。更にオウタール・ブレインに於ける彼の銅像、バタビヤ博物館特別室に於ける東印度會社時代の机、椅子、書棚等を偲ぶ時、私の胸は何かしら熱いものを覺へるのである。クーンの回顧は何時までも盡きないが、私は日程を急がねばならない。そこで歩を移して三井、三菱、正金、臺銀、南洋倉庫等を歴訪して別を告げ、下町に個人經營の森村タオル工場を訪ねて創業の苦心談に耳を傾け、一旦ホテルへ歸り、零時半芳澤使節を新居に訪ひ午餐を共にしつゝ、御互にバタビヤ着以來の結論を述べ合つたのであつた。

十七 芳澤使節歓迎會とバタビヤ最後の日

三時ホテルに歸つて小憩してゐると、間もなく協和鑛業の本田少將來訪、石油問題に就てその意見を開陳された。五時過石澤總領事を訪ふて其の話を語り六時半歸館、七時堀口君の案内で日本人會主催の芳澤使節歓迎會に列した。參會者は百數十名、舊知の人々も多い。月原會長の挨拶に對して使節の答辭あり、一同歡を盡して十時散會。

十日はバタビヤ最後の日である。

九時報道部長リットマン君を事務所を訪ひ、十時ホテルに歸つて出發の準備をし、内地への通信の時を過した。長男から愈々鹿島丸によつて歸朝する旨來電あつた。然し私はバンコックに出で空路歸朝の希望である。

正午日本人會長の招待で、珍らしく日本料亭に會食して在留同胞のことを聴き、夜は森臺銀支店長のすきやき會の御馳走になつた。思へば十二月二十三日スラバヤに上陸してから茲に十九日、最初の二日の高原と、サマランの二日を除けば前後十五日間をバタビヤに暮したわけである。朝夕の忙しい日程を些かの疲労もなく、短日月間に總督始め官民有力者と交歡し得たのは頑軀の賜であつた。又博物館に舊跡に蘭印の古き歴史を探り、又街頭に生きた今日の蘭印を識り、教育、産業其の他に就ても

耳目を新にし得たのは幸運と申すのは他ない。蘭人側の欲するところ、先住民族の爲すところ、華僑の動くところ、總てわが襟懐に觸れた。私は之を報國の丹心に生かさねばならぬ。朝夕のホテル生活の快味は、旅行中の喜びであつて、身天外に在るの心地しなかつたことも楽しい思ひ出である。私は感謝の念を以て、ジャバに於ける此の簡單な紀行の筆を擱くこと、しよう。

(二月二十二日記之)

(三) プランターの魅惑する大スマトラ 二十四首

一 バタビヤからメダンへ

一月十一日朝六時早起、八時半飛行場に着き領事館豊嶋、三井杉山、三菱宮脇、正金咲村、臺銀森、南國松原、南海天野等諸君の見送りを受けて九時半出發した。爪哇銀行のウキヘルズ總裁から飛行場宛「幸福なる歸航を祈る」旨の來電に接した。バタビヤを出たクニルム機は、折柄の快晴に恵まれ間もなく上空に昇り、一路針路を西北にとり青々としたスンダの海峽も瞬時に越へ、直ちにスマトラの空へ入つた。思へば一身國に許す六十年、地北天南到る處に鴻爪を留めて來た。ジャバの山河を踏破つた後、早くも亦スマトラの空に浮ぶので、

廿九 蘇州に向ふ 一月十一日

一身許國六旬秋、地北天南任去留、
瓜嶋山河看得後、又浮雲外向蘇州、
一身國に許す六旬の秋、地の北天の南去留に任かす。
瓜嶋の山河看得後、又、雲外に浮んで蘇州に向ふ。

スマトラは私の最も魅惑を感じて居るところで、眼の下には無限に連らなる樹海が蒼々として天に接して居る。河はその間を幾灣曲して海に注ぐのである。氣を付けて見ると流石に村落や家々が點々と見えるが、大部分は猶ほそのまゝ、遺棄されて居るのである。

三十 誰 着 鞭 同日

樹海蒼蒼遠接天、透迤江水幾旋旋、
蘇南蘇北飛千里、無盡寶藏誰着鞭、
樹海蒼蒼として遠く天に接し、透迤たる江水幾旋旋す。
蘇の南蘇の北飛ぶ千里、無盡の寶藏誰か鞭を着く。

十一時バレンバンに着いて補油した。バレンバンはムーシー河畔の油田所在地として普ねく世に知られて居る。それはスマトラ南部に於ける最大の都會で、わが日本人の在住者も少くない。

二 スマトラの油田

此の場合、時節柄、此の地方の油田に就て一言してみよう。
此の地方の油田は蘭印の産油地帯中最も將來を期待されて居る所で、高地帯と低地帯の兩鑛區に分れ。高地帯にはコロニヤル石油會社のタラン・アカル及びベントボ、ブラカトの三油田とバタフィツ

セ石油會社に屬するムアラ・エニム及びスバン・ヂリヂの二油田があり、低地帯にはムーシー河の主流にバタフィツセ會社のババト油田がある。特にベンドボ、スバン・ヂリヂの兩油田は、一九三四年以來當州の産油量がボルネオを凌駕した原因となつた程豊富なもので、殆んど無盡藏とさへ誇稱されて居る。以上の鑛區外にも州内至る處未開の油田がある。是等の地方にも最近コロニヤル、バタフィツセ兩社が廣大な面積の試掘許可を得て居るのである。更に近くのジヤンビー油田は合計四十四鑛區に分れて居るが、大部分はバタン・ハリ河の南岸にある。バレンバン州と同様州内至る處鑛區であるといはれてゐる此の地方に、現在はジャビーの西、バジヨバン、タンビの二區が開けて南へ發展して居るやうである。

前回、私は普ねく視察したことがあるので、アチエ州にも一言を及ぼすが、同州に亦油田が甚だ多い。中にもブルラクは東海岸のテラガサイド（一名ランカト）とアルー灣油田に分たれ、前二者はバタフィツシェ會社、後者は蘭印石油會社の經營に係るもので、此の方面の産油量も年年増加し、就中ブルラク油田の飛躍的發展は目覺ましい。

スマトラの此の方面で第一に採掘されたのはテラガサイド、即ちランカト油田で、之は一八八一年に掘當てたもので、産額も今日では大きい。此の成功に刺戟されて石油熱が一段と勃興したのである。續いて一九〇一年にはバレンバンはムーシー河の上流ババト油田の開発となり、後れてアチエ州のビ

ユーリユーラ、即ちブルラック油田の開発となつたが、之は永年最多産のものであつたが、近年に至つてバレンバンにその位置を譲つた。その後新設の會社もあるが、是等はケーニツグリック會社が漸次に積極的に乗出し、その他のものも買収又は一定の賠償で鑛區を手に入れ、一九二四年にはスマトラの石油を完全に牛耳るに至つた。

米系スタンダート會社は、バレンバン油田開發の爲め、一九一二年にニーデルランデ・コロニヤル會社を設立し、前記のケーニツグリックのミセツタ鑛區を買収して採掘に努力した結果豊富なる油田を掘當て、現在ではバレンバン州に關する限り、産額に於てバタフィツセ會社を凌駕し約二倍となつた。而して保有の鑛區面積は百六十萬バウ（一バウは約七反）に上つて居る。又ジヤンビーの油田は政府とバタフィツセ會社の共同出資になる蘭印石油會社の事業地となつて居り、採掘はバタフィツセがその任に當つて居る。此の油田は百七十四萬六千バウで、他に東海岸州北部の油田やタラカン島の北部にあるブンジュの油田も會社によつて經營されて居る。

わが日本は近年、ボルネオ東海岸のサンクリラン附近に鑛區を得、漸く産油を見たといふ。即ち一九二九年日本石油、三井物産、東ボルネオ石油會社三社、共同出資になるボルネオ石油會社の經營で、事業は日本が當つて居るのである。

尙ほ最近、ニューギネアに着目、一九三五年ヘーグに蘭領ニューギネア會社なるものが設立せられ

て、試掘の準備中である。之はバタフツシエ、コロニアル、ニーデルランデ。バシクキツク三社の出資から成つて、試掘面積は約一千万バウで、ホーヘクコツプ半島の南半及びチャールス・ルイツ山脈附近に至る山岳地帯から、マノクワリ北のワポー川からマモベナノ川の沿岸地帯等である。

産出量を系統的に見ると、英資本系五百萬トン、米資本系二百三十萬トンで、會社別にするとケーンツグ會社系が三百七八十萬トンから四百萬トン内外、コロニアル會社系百七八十萬トンから二百萬トン、蘭印石油會社系が七八十萬トンといふところである。一九三六年度生産の比較はバタフツセ五割六分、コロニアル三割二分、蘭印石油一割二分となつて居る。

飛行場に休憩中、何心なく手帳を出して、詩句を鉛筆で書かうとして居ると、平服の馬來人がつかつかと歩み寄つて、名刺を示して曰く、

『私は巡查です。その手帳を見せて下さい。』

そこで、私は、

『これは何でも無い。詩を書きつけたものに過ぎない。』

と答へたが、無理に取らうとしたので、一喝して折から出發の時分となり飛行機に近づた。彼は執拗にも私を追ひかけて来て、蘭人の操縦士に何か訴えるやうであつたから、私は

『何でも無い。之は問題になるやうなものではない。』

と一蹴して機に乗り込んだわけであつた。

こゝにかういふ些事を挿入する所以は、緊迫した空氣の馬鹿々々しさを示したかつたからである。何處へ行つても飛行場の警戒は非常なもので、機から休憩室に往復出来るだけで、飛行場に出てみることは勿論、休憩所以外に出ることは一步も許されない。附け劍の銃を握つた物々しい兵士が、嚴重な警戒をして居るのである。プラスチックの飛行場などは、敵に備へる爲めか、着陸出来ないやうに滅茶々に壊して終つてゐた。然し、トバの南部ブラバトには、新に水上用飛行場を設けて、ジャバ、スマトラ間の用に供して居る様である。

十一時バレンバンを出發、バカン・バルトに着陸した。バカン・バルト附近には、わが資本による農場が一、二ある。昇降の客も各々數名あつたことを見ると、此の方面も今後發達の見込みはあると思つた。

再び機上の人となると、舊知の山河は眼下に在る。ゴム林に續く煙草林、右には洋々たる大海、左には巍々たる連山、タンジョン・パレーからアサハンへ、アサハンからメダンへと愉快な飛翔を續けて、二時半メダンへ着いた。東海岸州は大正五年以來數回來たことがあり、就中大正六年冬より七年春へかけて約三ヶ月間滞在して、詳細な調査を遂げたところで、蘭印に於て最も魅惑を感ずる第一州である。前遊着陸第一に詠んだのは、

小少漫期宣遠猷、雄心又作閩南游、
車程六日馳千里、踏盡島中第一州、
であつたが、今次も亦之に次して、

三十一 スマトラ第一州

菲才叨欲補宏猷、卅歲廿回斯地游、
路入蘇門風物秀、冒炎第一閩南州、

菲才叨りに宏猷を補はんと欲し、卅歲廿回斯地に遊ぶ。

路は蘇門に入つて風物秀で、炎を冒す第一閩南の州。

と歌つたのであつた。

三 メダンの第一日とキャプテン、チナ

出迎の原田領事、澤村三井、宮地三菱、早川南洋、小坂昭和、藤沼領事館員、濱口野村其他に一禮して、舊知のホテル・デ・ブール第百十四號室に入つた。デ・ブールといふのは栽培業者のことで、此のホテルはプランタースが出資してゐる最大のホテルである。私によつて此のホテルは、バタビヤのホテル・デス・インデスと共に最も親しみ深い宿で、プランタースのホテルにプランターが宿る心地は自ら他の人と異なるところがなければならぬ。

小坂君が作成してくれた旅程を検討、大體之に據ること、し、宮地三菱君に托してバンコック—東京間の飛行座席の保留方を依頼し、又ウキツヘルス總裁へ謝電を出した後、小坂、宮地の兩君を伴ひ、舊知の大宮商店に野村君を訪ねて市況を聞き、又動物園にオラン・ウータンを見、サルタンの宮殿を訪問等して、夜七時から領事の招宴に臨んだ。相會する者十餘名、東海岸州の主なる在留同胞であつたから談も自然こまやかに、メダン第一の夜は更けて十一時頃ホテルに歸つて尊に就いた。

メダンは人口八萬、スマトラ第一州たる東海岸州の都としてスマトラ知事の駐在する所であることはいふ迄もないが、内三萬は支那人だといはれてゐる。然かも、支那事變以來支那人の流入する者甚だ多く、今では相當増加して居るものと見なければならぬ。大正五、六年の頃、私が東海岸に足を印して居た時代、支那人の長をメージョル・チナと呼んでゐたが、そのキャプテン・チナたるチヨン・ア・フィは六、七千萬の富を擁し、ゴム會社に投資すること十八社、その中十社迄は個人經營に等しいもので、後に昭和ゴムの前身たるスマトラ興業の所有に歸したシラウ・トゥア園や南洋ゴムのタナ・ヒタム園も彼はその大株主であつた。彼の支配人にオネスといふ蘭人がゐるが、オネスは體重三十貫の肥大漢で、私を案内して各地を視察させてくれたことがある。オネスは六個の農園に各住宅を設け、一ヶ月一、二回立寄り又は一、二泊するのであるが、例へばソカ・ラヂヤの邸には日本人夫妻

が、月給五十ギルダを受けて留守番をして居た。此處には事務室もあり、電話もあるので、一ヶ月の経費は百二十ギルダかゝること、六個處では七、八百ギルダを要するわけである。オネスは此の他に十七農園を監督し、株を所有する會社四十餘に上り、中十七會社は個人經營である。オネスの指揮下にある農園の總面積は十萬英町歩、植付面積三萬英町歩、苦力一萬人で、近く擴張するといふことであつた。然し、その後の不況は流石のチョン・ア・フィも所有の大半を失ひ、その子供が後を繼いでゐるといふことであるが、之は大した活躍を見せてゐない。オネスの後は尙ほ各所に勢力を持つて居るさうである。

四 メダンからプロマンデイへ

十二日早起、小坂君の東道で九時ホテルを立ち、自動車を駛せて坦々たる大道を南に下り、沿道の煙草園、ゴム林の間を突破する八十キロ。テレビン、チンギの町に三十餘年安住の舊知竹下日本人會長、山下前會長を訪ねてその地方の情況を聴き、彼等が永年に亘つて平和な根底ある生活を續け、現に今日の緊迫した時代に於ても、その地を墳墓とする氣持ちで晏居されつゝ、あるのを見てうれしく思つた。正午スマトラ拓植のヅスン・ウルー園に入つて、早川支配人以下社員一同と午餐の饗を受けて悪筆を揮ひ、二時、園を出てキサランを経てプロマンデイ園の支配人社宅に入つたのは三時であつた。メダ

ンから百八十キロである。

プロマンデー園は、シラウトア園と共に昭和ゴムの經營にかゝり、總面積一萬五千十四英町、ゴム植付面積六千二百二十七英町歩、カ、オ植付面積三百七英町歩。尙ほ未墾地八千四百八十英町歩を殘して居るので、前途洋々たるものがある。バタビヤで芳澤使節と相語つた時、

『スマトラへは是非行つてごらんさい。そしてその時は私共の農園にも御光來下さい。未墾地にはまだ猪が巢くつて居て、相當面白いところですよ。』

といふと、傍に居た三井の伊藤君は、

『それは素晴らしい。昭和ゴムの膽入りで一つ猪狩りをするんだね。』

と言はれ、一同哄笑したのであつたが、未墾地の傍を通ると果して十數頭の野猪が、自動車の爆音に驚いて、ゴム林の中からジャングルへ逃げて行つた。

シラウトア園は大正六年に東海岸州滞在中、親しく視察したのであつたが、それから間もなく昭和ゴムの前身スマトラ興業の手に歸し、間もなく私はその社の重役として参加するに至つたのである。今、舊記を見ると、ランカットのサルタンやチョン・ア・フィも株主であつたことが出て居る。當時のシラウトア園は未だ小規模で、日に約三百ポンドの製産しかしなかつたが、現在では殆んど開墾し盡され、更新も進み立派なエステートとなつてゐる。プロ・マンデイ園の方は未だ未墾地が多く、カ

カオの栽培にも適して居るので、此の方面へも擴張の手を伸べる事が難くない。今度来てみると支配人社宅を始め事務所、工場が新に中央に設けられて、管理上頗る便利となつたのみならず、シート製造方法も乾燥方法も最近の知識を取入れて、プロ・マンデイの特徴を示して居る。常務の岩田君も取締役小坂君も入社以来の舊知で、前遊の時は孔明の出帥表の名文句「謹慎」の二字を岩田君の希望によつて私の大書した扁額が掲げられて居たが、今次新しい支配人社宅にはその時私の即吟した二絶が兩聯となつて壁間に懸つてゐるのを見た。その一つは「少少漫期宣遠猷」の句で、他は、

長征又上極炎郷、雨後高原如_レ水涼。

檢討曾遊廿歲跡、依然兩鬢未_レ加霜。

であつた。そこで後者に次して、

三十二 鬢 無 霜 一月十二日

趁_レ程又到閩南郷、百里高原一掬涼、

已入_三無生無死境、青春六十鬢無_レ霜、

程を趁ふて又到る閩南の郷、百里の高原一掬の涼。

已に無生無死の境に入れば、青春六十鬢に霜なし。

已に生なく死なきの境に入れば、六十も青春で鬢にまだ霜が無い。前年は「未だ霜を加へず」とい

つたが、今次は「霜無し」と若返つたのである。唯だ小坂君は年齢僅かに四十九歳、然も鬢は半白となつてゐるので、こゝでも哄笑したのであつた。

従業員一同に迎へられ小憩の後、更に自動車を驅つてシラウトア、プロ・マンデイ兩園を一巡、曾遊四年後の推移を見、新植付地やカオ栽培地を検して夕刻、歸來後七時から一同と會食、終つてその要求に依り、約一時間餘に亘つて所感を述べ、一同の奮闘を感謝し、一層の努力を望んだのであつた。私のシラウトア視察後間もなく菊地君が同園を買収してから二十一年、トロスンガイ園の三十年に比してはや、短いが、猶ほ亭々たる巨木が社宅の周圍に聳え、前庭には新しく植付けられた扇子椰子とかクロトンとか熱帯の鑑賞樹が生え繁つて居るのみならず、客室は別棟になつて居て朝夕の靜寂を味ふに十分であつた。

五 バネー河畔の舊夢、新夢

十三日朝六時起床してみると、事務所は早くも開いて居る。彼等は五時半から作業に出るからである。七時朝食して工場や、馬來人、支那人の採取作業を見た後、更に自動車を遠くに驅つて、新築瓦葺の苦力小屋、建築中の社員社宅等をも調べた。八時プロマンデイ發、小坂君と共にキサランを経て一路南行百七十五キロ、十一時半、グッドイヤー・タイヤ會社經營のウキラード園俱樂部に小憩、午

餐をした、めた。日中の戸外は暑いが、倶楽部に入つてみると涼風が面を吹いて頗る心地がよい。そこで次の一首を得た。

三十三 バネー行途上

一月十三日

護謨林又護謨林、百里山河積翠深、

晝日停車坐公舎、涼風陣陣拂塵襟、

護謨林、又た護謨林、百里の山河積翠深し。

晝日車を停めて公舎に坐し、涼風陣陣塵襟を拂ふ、

申し忘れたが、此の間沿道には蘭系はもとより米系、獨系、佛系、白系のゴム林、油椰子園等が送迎して旅魂を慰むるのであつて、此の句は實感の直寫である。

倶楽部を出、更に道を東南に叢林の中をも馳する六十八キロ、バネー河畔ラプアン・ビリー対岸へ出る。プロマンデイから約二百四十三キロ、バネー河は濁流滔々兩岸を壓し、幾彎曲して海に注いでゐる。此處で自動車を捨て、出迎への東山農事ランチで河を溯る約五キロ、後三時アヂヤムの東山油椰子園棧橋に到着、宮地支配人等に出迎へられて先づその社宅に入った。宮地君は嘗てサンパウロのカンピナス農園に勤務されたことがあり、それ以来の舊知である。支配人その他の社員と挨拶を交換した後、經營の情況を聞き、宮地君の案内でトラックに乗じて園内を巡つた。物見臺に上つて大觀

すると、油椰子林は緑一色、枝葉密接して鬱々蒼々と繁り、廣袤一萬英町に亘る大農園を形成する様は、一種の壯觀である。聞けば海拔僅かに數尺で満潮時には濁水が園内に流込むのを防ぐ爲めに閘門を築いて居るといふことであるが、一望平垣で縦横に切り開かれた排水溝の延長は五百キロに上つて居る。濁水の爲めかアノフェレスの發生少なく、従つてマラリヤの脅威から逃れて居ることは大幸福と云はねばならない、其の上にジヤングル地帯から清水が噴出して居るのは飲料並に製造の爲どんなに力強いかも知れない。工場はゴム園のやうな簡單なものと違つて、百萬圓を下らぬ設備と見られ、現在は輸出の道が閉ざされて製油は倉庫に滿ち滿ちて居るのであつた。

夕刻引返し、工場を視察して支配人宅に投じ、主な社員と會食して即吟したものを揮毫などしてバネー河畔の夜を更かした。

思ひ起すのは此の方面に於ける私の足跡である。大正五、六、七年に亘る兩回の視察、滞在前後四ヶ月、州知事の斡旋で北はアチエーより南はタンジョン・バレーに及び或はシアターの茶園にキサランの護謨園に二泊、三泊し隨處の候補地を検したが、買収の契約成らんとして容易に決しない。然かも當初の志は大規模の經營にあつたので、既墾地の買収可能なものは規模小さくて意に滿たず、最後に州知事の紹介によつて發見したのが、此の油椰子園の上流四、五十キロの地點、英系のパンカタン園に接續するバネー河畔一帯に擴がる約二萬英町歩の土地であつた。私自分の實地踏査後、二人の同僚

を新に呼び寄せ、三人改めて親しく之を検討したのであつたが、當時はもとより陸路に依ることを得ず、メダンから水路ラブアン・ピリーに出てランチで五、六十キロを溯つてパンカタンに着き、更にジャグルを踏んで候補地帯に入るのであるが、一夜土人の家に泊つた。土人の家は虎豹のやうな猛獸の襲來を防ぐ爲め、床を高さ二間以上に造り、梯子を以て屋内に入つて、後はその梯子をとりはづして眠るのである。私共の泊つた晩も夜更け猛虎のもの凄いならぬ咆吼が聞こえたが、その場處は今私の立つてゐる直ぐ間近である。こんなことを回想してゐると、私の胸には又新しい詩が湧いて來た。同韻二首、同巧異調といふところである。

三十四 バネー河畔に泊す 其の一 同日

創業建邦碎鐵肝、當時辛苦夢猶殘、

回頭廿五年前夕、猛虎一聲心膽寒、

創業建邦に鐵肝を碎き、當時の辛苦夢猶ほ殘る、

頭を回らせば廿五年前の夕、猛虎一聲心膽寒し、

三十五 同其の二 同日

炎南建國幾辛酸、看到巴寧天地寬、

眠穩舊時河畔宿、不聞虎吼迫人寒、

炎南建國幾辛酸、見て巴寧に到つて天地寬なり、

眠りは穩かなり舊時河畔の宿、聞かず虎吼の人に迫つて寒きを、

かくて興は愈々湧き、若人達と共に時を忘れたのであつた。

私が試みんとしたバネー河畔の開拓は、故あつて取止めとなり、轉じて英領馬來の新擴張となつたが、幸に有力な岩崎家がかゝる大農園を茲に建設せられた。思ふに岩崎男が此の開拓に手を染められたのは、區々たる眼前の小利を求められるが爲めではなからう。恐らく此の地を起點として大和魂を天南に培はんとする爲めであらう。否な、少くともアヂヤムの従業員には此の氣魄があるであらう之を村度して、

三十六 同其の三 同日

來泊巴寧河畔村、鬱葱椰子萬柯園、

弧南興利待諸彦、叨擬炎州植國魂

來り泊すバネー河畔の村、鬱葱たる椰子萬柯の園、

弧南利を興すは諸彦に待つ、叨りに擬す炎州に國魂を植へんと、

と歌つたが、更に今後十年の歳月を経ば、此の方面に立派な日本村を現出して皇化も此の方面に及ぶであらうと言つて、一同を激勵した。

それが即ち次の詩である。

三十七 同其の四 同日

巴寧河遶日本村、鬱鬱蒼蒼林又園、

應識苦心猶十載、奚疑皇化遍南蕃、

パネー河は遶る日本村、鬱々蒼々たり林又園、

應に識るべし苦心猶ほ十載、奚ぞ疑はん皇化の炎蕃に遍きを、

六 復たプロマンデンの一日と南方開拓の信念

十四日の未明起床。折から休暇を得てプラスチックに暑を避くる宮地君一族と共に園を出で、もと来た道によつてラシチでラプアン・ピリ港の對岸に上陸し、昨日來待機の自動車に投じて一行と別れ、小坂君と共に又二百四十三キロを駛せてプロマンデーへ歸つたのは午後一時頃であつた。此の日の午後は清閑の半日であつたが、折柄の雨後で爽涼の氣天地に滿ち實に爽快の極みであつた。

三十八 農園 雨 後 一月十四日

建國炎南誓所期、星霜三十等閒移、

不磨雄志猶仍舊、起惰農園雨霽時、

國を炎南に建るは誓て期する所、星霜三十等閒に移る

不磨の雄志猶ほ舊に仍り、起惰す農園雨霽るるの時

ジョホール農園は私の創めたところ、此の農園は他人の創めたものに参加したわけであるが、私としてはスマトラに魅惑を感じること實に久しい。もとより南洋開拓に指を染むるに當つて、第一にジョホールを選んだのは、それが歐亞の要衝シンガポールの對岸にあつて産物の輸送に便利であること、ゴムの栽培地として氣候風土に恵まれて居ること、土地が比較的易く手に入る事等、南方に關する知識と關心の猶ほ淺かつたわが國の資本を放出させるには適當な條件を具備してゐると思つたからである。然し、私の南洋開拓は決して單なる營利追求ではない。私の眞精神は神武以前に復古して、その傳統の宏圖を天南に樹立するに在つて、正に皇謨翼贊の聖業と考へた故に當時同種の企業會社が何ゴム會社等と名づけたのとは趣を異にし、南亞細亞會社即ち南亞公司と命名したのである。ゴムの二字を掲げなかつたのは、志が單なるゴムに無く、進んであらゆる栽培企業に及ぶのみならず、英領馬來を起點として廣く南方に伸びんが爲めであつた。そこで、まづ着目したのが北ボルネオであつた。北ボルネオはいふ迄もなく英領に屬し、一八八一年にアルフレッド・デントとバロン・オーベルベックの二青年がスローのサルタンから土地を得て、之を基礎として英本國に歸り、まづ北ボルネオ調査會を設け、續いて資本金二千萬圓の北ボルネオ特許會社を創立してこゝに新に國を創めたので

ある。先の世界大戦に於て、日英同盟の誼によつて、わが海軍が印度洋の守に任ずるの前一年、即ち大正二年、私は軍艦淀に便乗して約二ヶ月間に亘つて、蘭印の各港を巡航して北ボルネオに出で、サダカンで軍艦を捨て、獨り留つて同方面の調査をしたことがある。當時知事始め官民は喜んで私を迎へ、調査土種々の便宜を圖つてくれたが、翌大正三年歐洲大戦となるや私は日本へ歸つて時の大隈内閣に對して、北ボルネオの買収案を提議したことがある。この提議は不幸にして同内閣の採用するところとならず、間もなくグラシー・コンパニーの香港支店長が現在日産農林の經營せるタワオに在つた官立試験農園を買収せんとする氣配にあつた。適々時のシンガポール商品陳列館長三穂君を團長とし、今は南洋栽培界の權威である堺君、當時臺灣總督府附武官であつた折田少佐等が北ボルネオの調査に當ることとなつた。後、之が動機となつて私は久原鑛業の南方代表者、同郷の先輩林君に諮り、山縣元帥を小田原に訪ひ、又大隈首相を訪ねて之が出資を久原翁に求めたのが、現在の雄大な日産農林となる礎石となつたのである。即ち私としては始め自ら北ボルネオに手をつけんとしたが、資本勞力の點で自己の實力の不足を知つて、之を久原鑛業の奮發に委したのである。北ボルネオを他に委するとすれば、次に眼をつけるのはスマトラである。

當時、シンガポール同業の先輩中には、誰一人スマトラを踏査した人はなかつた。然るに嘗てアンボンで相識となり、後にジョホールで私の許に働いた池田君が東海岸州に渡つて熱心に私の渡來をす

すめてくれるので、大正五年始めてこの地に赴いて、その雄大な風光に接し、その國際的空氣に浸り、こゝに大正六年から七年に亘る本格的調査となつたのであつた。今次の旅行でも、この方面の魅力は益々増加するばかりである。雨後農園の清涼の氣にうたれながら、私の雄志は青春の血と燃えてスマトラ開拓の夢はいつ覺めるとも覺えない。私はこゝに此の身の將來の一部を托して惜しまないと思つたのであつた。

七 トバ湖畔の一日

十五日同じく早起。再び工場を視察し、農園の一樹一草に深い關心を拂ひ、獨り室に入つて靜思の半日を費やし、正午、午餐を取つた後、〇時四十分、社員と農園とに別れを告げて小坂君と同乗、自動車を駛せて農園を左に廻り、山を越へ谷を渡つて高原に出で、獨逸系のチガ・ドロク園に獨逸人の現狀を視察し、ジャバからの移民がジャバ同様の水田開拓にいそしむ様子などを眺めつゝ、二十七キロの手の所でシアンターからの舊大通りに出で更に坦々たる大道を走り、農事試験場、獨人別莊を経、スマトラ松が僅か四年間に驚くばかりの大木となつて兩側に密生して居る邊を過ぎ、海拔三千六百尺の地點まで登つたがそれからは下り坂となり、間もなく澗激たるトバ湖を俯瞰しながら、百折の山路を過ぎて蜿蜒九十九キロを走せ、十一時湖畔のプラバト村なるホテルプラバト第十號室に入つた。

前遊にはシャランターを経て此のホテルで小憩、午餐をとつて直ちにブラスタギに向つたのであつたが、今回は特に一泊して旅魂を慰めること、したのである。ブラバトは前遊の通り新に水上機の發着場となり、最近にも總督が水上機で視察に來られたといふことであつた。此處は海拔二千四百尺の高臺、眼前に一千尺に餘る中の島を望み、南方は遠く西海岸バダンに至る自動車道路が拓け、又湖水の面積はわが琵琶湖よりも大きく、風光絶佳、村には蘭人の別荘が五六十戸もあり、ホテルも二三ある。わが同胞としては、最近メダンから轉居して來た寫眞店が一軒あるのみである。主人曰く、
 『店に陳列してあるブラバト附近の風景寫眞は賣れますが、今後は戶外撮影は一切禁止、室内の人物寫眞撮影許可願を届出てるますが、未だに何等の指令もありません。水上飛行要地となつてからは、警戒が嚴重でお話になりません。この儘では營業不可能ですから、近くメダンへ引上げようかと思つてゐます。』

とのこと、此の絶好の風景も、かうなつては餘りに殺伐である。そこで、偶成したのが次の句である。

三十九 トバ湖畔にて、其の一 一月十五日

吐巴湖畔水雲屯、嶽色波光照面門、
 只有人間爭不已、仙郷天地偵官存、

トバ湖畔水雲屯し、嶽色波光照面門を照らす。

只だ人間の争ひ已まざるあり、仙郷の天地に偵官存す。

トバ湖畔の嶽色波光が旅魂を慰めてくれるのに、人間の淺はかな争は益々激しく、此の仙郷にも猶ほ警吏が到る處に出没して、外來人を監視して居るのである。笑ふ可きの至である。

正午ホテルに午食し、小坂君と共に出で、水上機發着の豫定地を見、湖畔の風光を愛で、入つて庭前庭後に咲き亂るる香草芳花の間を逍遙し、倦いては室内に靜聞の一と時を過したことであつた。夜に入つて蟲聲は唧々として軒をめぐり、夜の色は沈々として折からの月影も清らかであつた。かういふ時には自然遙かに帝京を拜して、愛國心を呼び起すのであつた。

四十 同其の二 同日

蟲聲唧唧逼檐鳴、月色沈沈壓屋傾、
 依水湖樓涼似水、迢迢夢繞大皇京、
 蟲聲唧唧檐に逼つて鳴き、月色は沈沈として屋を壓して傾き
 依水の湖樓涼水に似たり、迢迢たる夢は繞る大皇京。

十六日曉起してベランダに出で、コーヒの一杯を傾けると、眼前の風光の如何にもわが心を清らかにするものがある。そこで思へらくかくの如き江山は天の恵むところで、之は萬人に與ふべきもの、

世界を見渡しつ、

決して一部に独占すべきではない。須く門戸を解放して萬邦に惠を頒つべきではないか、といふやうな氣持も湧いて更に一句出來た。

四十一 敢 勿 猜 一月十六日

曉把醒心珈琲杯、風光水色畫圖開、

江山如此天攸惠、附與萬人敢勿猜、

曉に把る醒心珈琲の杯、風光水色畫圖開く、

江山此の如き天の惠むところ、萬人に附與して敢て猜する勿れ。

八 プラバトからプラスタギへ

十七日は七時朝食、七時半ホテルを出た、時に細雨は絲絲としてトバ湖は烟霧の中に隱見し、遠く連山の黛色に神を恰ましめ、昨日の途を引返して最高の地點を越ゆれば雨霽れてシヤンターの平野は眼底に在り、そこで出來たのが次の一絶である。

四十二 雨中トバ湖畔に出づ 一月十七日

琦花瓊草繞山軒、視野皆妍絕語言、

況是今朝爽於水、絲絲細雨出湖村、

琦花瓊草山軒を繞り、視野皆妍語言を絶す、

況んや是れ今朝水よりも爽かに、絲絲たる細雨湖村を出づ、

八時四十分、シヤンターに小憩し齒科醫の加藤君に就て地方の現況を聞取し、わが同胞に對する嚴戒ぶりとか、獨逸人の拘留後の財産管理とか其の他の債權債務の處理等話は可なり緊張したものであった。

シヤンターに着いて思ひ出すのは、スロートメーカー君のことである。彼はナガ、ウタを本據とするラバー・インベストメント・トラステッド總支配人で、私が大正七年の春スマトラ滞在の中約三日間その社宅に泊めて貰つて、彼の經營ぶりを見學、又共に遠くトバ湖畔に車を飛ばしたこともあつた。後、彼は引退してオランダ本國へ歸つたので、私は昭和十二年オランダ訪問の際、彼との再會を欲したが不幸にも機會を逸して終つた。その昔、彼の管理下に在る栽培地の面積は七萬英町歩、茶の植附が九千英町歩、ゴム植附三千英町歩、油椰子植附九千英町歩、合計二萬一千英町歩、猶ほ年々栽培面積を増加してやがて全部開墾するといふ意氣込みであつた。茶の年産はその時に六百五十萬ポンド、ゴムは同じく五十萬ポンドで、白人従業員五十名、労働者は一萬人、茶の工場だけでも四ヶ處にあつて、一ヶ所の最大能力は一年に二百五十萬ポンドといふことであつた。彼の夫人は日本人であるが、私の滞在中は顔を見せず、後シヤンターで始めてそのことを知つたのであつた。彼の兄弟は九人あつ

て、その兄はシャンターの病院長であつたが、今回来てみると早や八十近ひ老齡で、プラスチックに隠棲して居るといふので、プラスチック滞在中訪問したが、折悪しく不在であつた。同族の一人のスロートメーカーは曾ての文部大臣で、私はオランダ訪問の際面識を得て居る。

九時半シャンターを出て、スロートメーカーの苦心になる茶園を経て、一路海拔三千尺乃至四千尺の高原を驅ること約百キロ、其處、彼處に展開する新しい水田や畑地やバタツクの村落を左右にしつ、ピソピソ山麓はトバ湖に面する所に懸れる大瀑に立寄つた。高さは五六百尺を越ゆべく、險崖を直下して湖面に注ぐる處、絶景の一つであらう。

そこで一句を吐いた。

四十三 飛

瀑 一月十六日

渺渺平湖接太空、巍巍危嶽刺蒼穹、

屏崖峙處瀑千尺、落作急湍碎作虹、

渺渺たる平湖大空に接し、巍巍たる危嶽蒼穹を刺す、

屏崖峙つ處瀑千尺、落ちて急湍を作し碎けて虹となる、

其れから更にバタツク族の點々たる村を過ぎて、左右に高山を眺めつ、正午ブラバトから百五十六キロを駛せて、久戀の地プラスチックのグランド、ホテル第六十七號室に入つた。室は最上の段に在り、

眼前に青草と紅花を眺め、遙かに雲に連る大高原を望む絶好の所であつた。

九 プラスタギ高原の冷味

プラスチックは大正五年にも數日滞在、レストハウスで旅の疲れを休めたことがあり、先年は新設の規模雄大にして設備の完全せる此のホテルに一泊して高原の風色を賞したが、今次は特に旅程を鹽梅して十六、七の兩日を過すこととしたのであつた。初遊の際、涼をこの高原に追ふた時の一絶が思ひ出される。

千峯雨霽暮雲收、天地無聲意自幽、

回首半生付羈旅、星繁一穗冷於秋、

今回はこれに次して、

四十四 プラスタギ即成 其の一 次舊韻 一月十六日

險夷強弱兩眸收、世路經來意亦幽、

回首半生羈旅老、山樓僅愛冷於秋、

險夷強弱兩眸に收め、世路經來つて意も亦幽なり、

首を回らせば半生羈旅に老ひ、山樓僅に愛す秋よりも冷かなるを、

世界を見渡しつ、

折よくアチエ州軍司令官が投宿したが、彼の顔面には刀痕があつて當年の面影を残して居る。いふ迄もなくアチエ族は勇敢で、オランダの統治に服せず、過去數十年に互る葛藤を續けて來たのであるが、司令官の刀痕を見ると當年の戦鬪が偲ばれる。

二十五年前と今日では、私の心境に深淺の別は自づとあるが、此の山樓の秋のやうな涼氣、死のやうな靜寂、それは昔のままである。而して、今、眼前に展開する茫々たる大高原を望むと、曾てわが櫻花三十萬を植ゑてみたいと歌つた私は、もう少し飛躍して三百萬を植ゑてみたいといふやうな境地になるのである。即ち前回に、

炎南園裡有別寰、地饒人稀百里間、

好植櫻花三十萬、東方大局聽緜蠻、

と歌つたのを、今次は、

四十五 同其の二

茫茫千里高原連、氣順地豐成別天、

好植櫻花三百萬、日蘭握手賞芳妍、

茫茫千里曠原連り、氣順地豐別天を成す、

好し櫻花三百萬を植ゑて、日蘭手を握つて芳妍を賞せん、

いふ迄もなく廣袤十六萬餘方マイル、スマトラの天地に、現在のジャバと同率の程度迄民口を入れるとせば約一億三千萬の大衆を包容出来る。其の半分としても六千五百萬を容るるに足るのである。而して現在は僅か八百萬である、故に蘭印政府は近年中部ジャバから民口をスマトラへ移住させ到る處にジャバ人の水田などが見られるが、惜しむべし好指導者がなく、移住の方法にも猶ほ考慮すべき點が多い。若し兩國が之に關する協定を結び此處へ優秀なわが農民や技術者や工人を送れば、彼我共存共榮の實を擧げ南洋の一角に理想郷を建設し得るのである。私が三百萬の櫻花を移したいといふことは、決して無稽の言ではなく直に現實化し得る。然かも兩國眞の提携を招來する問題である。

ホテルに小憩の後、下つて街頭に舊知の日本人會長佐藤君と語り、又郊外に養鶏や花園を經營せる之も舊知の磯村君を訪ふて舊を談じ新を話したのであつた。午後佐藤日本人會長來訪、其の造詣を興り聞き、五時三人で高原の別莊地帯を巡り、更に街上に記念の品を求め、スロートメーカーの實住宅を過ぎり、六時ホテルに引返してメダンの宮地三菱君に電話してバンコックから東京への發着豫定に依る座席の保留を依頼したのであつた。

ホテルの客は數名に過ぎない閑散振りであるが、一人の肥大漢、名はイスラエルと呼ぶロシアのブレスト、リトルクス附近生れで十六の秋、叔父を便つてシンガポールに來たり爾來三十年を南洋に生活してゐる男と語つた。妻君はシンガポール生れでラツフルス學校を終へ瑞西、ロザリーヌの學校にも

學んだよし。曾てシンガポールの日本ホテル主人林君と知り且つ私をも見たことがあると云ふ恐ろしい記憶力の強い國際人である。彼とコクテールの一杯を傾けて語るに得る所ないでもない。彼れ夫妻は年に二回約一ヶ月をプラスチックに静養することのこと。

九時晚餐を終へ、久振りに温浴を試み、十時早く寝に就いた。惟へば私の第一回訪問の時は小さなレスト・ハウスに泊つた。次は昭和十一年の秋で、今度は三回目である。在留同胞三十名、磯村君の如き成功者の一人であらう。夜に入つて寒さを覚え、電気ストーブに点火し爐邊に憩つて神を天地有形の外に馳せたのであつた。

十 タバヌリ州境の殖民村

十七日はスピット副總督との話もあり、遠く自動車をタバヌリ州に駛つて殖民村の状況を視察する日である。早朝曉起、七時朝食、七時四十分ホテルを出で磯村農園主人を途に拉し、小阪君と三人でメリク村から右折、ビソビソの山麓を迂回してトバ湖畔に至り、其れから海拔六千六百尺の分水嶺頭に小憩した。後には鬱々たる翠微の山を控え、眼前には渺々たる蒼水の灣を望み、適々野猿が奇聲を發するのを聞いて、遙か南方千里の外にある自分を感じた。

四十六 分水嶺頭 一月十七日

驅車霧鬱翠微山、放眼森茫蒼水灣、

樹上猿聲啼不止、始知身在極南竇、

車を驅る霧鬱たる翠微の山、眼を放つ森茫たる蒼水の灣。

樹上の猿聲啼いて止まず、始めて知る身の極南竇に在るを。

この邊は熱帶竇とは云へ、沿道の樹枝は冬期には凍結して、内地に見るつららが下り、實に絶景であるのである。

長驅、州境を越えるとタバヌリ州で、間もなく白人殖民地へ着いた。プラスチックから約八十キロ。ハベヤの舊租借地の一部を爲すダイリ・ランド殖民村である。此の村は前遊の際は創設早々であつたが、僅か四年後の今日では悉く失敗して唯だ二三戸を餘すのみである。彼等は開墾後先づ馬鈴薯を植ゑ、續いてコーヒの栽培に手を着いたのであるが、移住者は農事に經驗なく、趣味なき商人上りの失業者を收容した爲め離群索居の生活に堪へず、一戸去り二戸散じて寥々人影を見なくなつて終つたのであらう。偶々踏み止つてゐる一蘭人の妻は日本人で、彼等夫妻は六年前に入植して開墾面積三十五町歩、最初から馬鈴薯を植ゑて成功してゐるらしい。彼は兵士上りでプランターとしての經驗もあることが他に異つて踏み留つて成績を挙げ得た理由であらう。六人の子女を持ち、内二人は長じてメダンの學校に入學せしめてゐること、彼等夫妻は交々その苦心談を語るのであつた。更に進んでメ

イヤなるものの經營に係るシボラス耕地に小憩した。此處は邦人の伊藤某君が耕地を管理し、コーヒの栽培に着手してゐた。此處でもわが日本人ならばといふ感を新にした。其處から引返してトバ湖畔一千尺の頭にあるバツサングラハン（公設宿泊所）に小憩した。折から白雲が簇々として消えては又生れ、間もなく湖水は一面の白雲に掩はれて視野を鎖したが、附近の密林には相變らず野猿が啼いて居り渺々たる湖面の無限に擴がつて居る處、如何にも熱帯特有の天然で雄大且つ怪奇の光景であつた。

四十七 バツサングラハン眺望 同日

白雲簇簇滅餘生 又有野猿柯上鳴

蟲蟲懸崖千尺底 一湖漱澗鏡匱橫

白雲は簇々として滅餘生れ、又野猿の柯上に鳴くあり。

蟲々たる懸崖千尺の底、一湖漱澗たる鏡匱横ふ。

晝過引返して途中、ルーターなる人の未亡人高橋女史宅を過ぎり磯村君に別れてホテルに歸れば、メダンからの電話でバンコック、東京間の飛行座席は確實に保留したとのこと、午餐の後小憩、更に小阪君と街頭を見物、再びスロートメーカー老、佐藤農園主等を訪ねた。佐藤君は大正五年共に遠く車を驅つて、西海岸のパダン迄往復したことがあるとかで、ブラバトで撮つた寫眞を示された。かく

てブラスタギの第二夜も亦極めて旅情をゆるくするものがあつた。

十一 プラスタギ高原の朝夕

前遊、飛行機でバンコックからメダンに着いた時、會ての日本人會長蒔田君が多數の出迎人に混つて來られたが、同君は當時六十五六歳、白髪が多いといふので染めて居たので、

「井上さんも白からうと思つてゐたら、飛行機から下りたところを見ると一向に白くない。矢張り私と同じ様に染めてござる」

と言つたさうで、そのことがその晝、領事の午餐會で話題になり、お互に爆笑したのであつた。私はこれを早速詩にして、

依_レ舊_レ崢嶸意氣豪、 圖南幾度度雲濤、

廿年鴻爪未_レ知_レ老、 憐笑征人多_ニ二毛、

と歌つたが、雨が蕭々として降る客舎の夕、私は依然二毛を歎じない自分を發見した。

四十八 二毛を歎せしめず 一月十七日

一片雄心依_レ舊豪、 又乘_ニ飛_レ舸_ニ勞_ニ層濤、

高原一館賞心雨、 不_レ使_ニ征_レ人數_ニ二毛、

世界を見渡しつ、

一片の雄心舊に依つて豪に、又輕舸に乗じて層濤を劈く。

高原一館賞心の雨、征人をして二毛を歎せしめず。

ブラスタギの朝夕は又安息の一時である。夜來の雨が止んで、曉の風が微かに、前庭には花が咲き亂れて居る。二日間を此地で靜かに過ごしたが、未だ興は半にもならぬのに、明日は早や花に背いて出發せねばならぬ。

四十九 プラタギ即興 同日

山樓雨霽曉微、琪樹瑤花競百菲、

兩日幽棲興未半、明朝銀翼底邊飛、

山樓雨霽れて曉微かに、琪樹瑤花百菲を競ふ。

兩日の幽棲、興未だ半ならず、明朝銀翼底の邊にか飛ぶ。

更に思ふ、暮年に至つて壯心未だ休まない。身は千嶽萬峯の頭を馳せて來たが、心懷は淡々として水の如きものがある。私にとつては既に漢の班定遠も、秦の始皇帝も殆んど魅力がない。乾坤に獨りの我れあり、所謂乾坤一布衣、それで澤山であり愉々快々である。

五十 同其の二 同日

壯志暮年何日休、千峯萬嶽送迎悠、

胸襟幸有淡如水、芥視劉家定遠侯、

壯志暮年何の日か休まん、千峯萬嶽送迎して悠なり。

胸襟幸に淡として水の如きあり、芥視す劉家の定遠候。

十二 待機の一日半

十八日はメダンへ下る日であり、シンガポールへ飛ぶ前日である。夜來の雨霽れて乾坤清淨、早起してシバヤツクの火山を仰ぎ、東南に展開する十里の沃野を臨んで、高原の涼氣を滿喫した後、朝食を取り、同宿の蘭人とも語り合ひ、室に入つて「フレンド・オブ・ユーロップ」叢書を散讀して、靜居の半日を過ごし、原田、小坂二君と午餐を共にして小坂君と共に後二時十五分原田領事と別れてホテルを出た。折柄又雨となり、烟霧四塞展望の快を奪はれ、九折の坦道を一氣に下ること、六十七キロ、一時間と廿五分を費やしてメダンに着き、もとのホテル・デプールの第百十四號室に入つて一浴小憩した。

次で在留同胞の來訪を受け領事館に赴いて出發の準備を整え、夜は約を履んで日本人會館に於ける合同歡迎會に列した。集る者五十餘名、澤村日本人會長の挨拶に對し、食後約一時間に亘つて所感を披瀝した。遠くドスン・ウルーの早川君、テピンチングの竹下君、ブラスタギの磯村君等の顔も見へ

在留三十餘年の蒔田老もゐるかと思へば、第二世の若き元氣な姿もあり、頗る愉快的な會合であつた。かくて一同歡を盡して十時散會した。

十九日、早起して爲す所なく、八時朝食し、獨り新着の英字紙を讀むに、全面に掲出せるはリビヤに於けるイタリーの敗退、ギリシヤのアルバニヤ進出の情報であつた。又シンガポール英國兵士の速成語學教授の狀況を撮影するものを見るに、『(一)勝利は我等の手に在り、(二)アドルフ、我等は汝を好まぬ、(三)我等はドイツに進撃しつゝあり、(四)英國は常に儼として存在す』等の語にして、不愉快極まる宣傳記事に満ちてゐた。之は獨逸語の練習時間の題目である。午後三時に飛行機の出る豫定が、濠洲との連絡遅延して、明朝に延期したといふので、午食後、來訪の客と語つた後、宮地三菱君と共に遠く自動車を北に馳せタンジョン・ブーラに至つた。メダンを去る六十キロ、在留の日本人に聽いて見ると、この方面には豊富な油田があつて、附近の在住者に立退きを命じ、非常時の要に備へて居るとかいふことであつた。

私は大正七年の正月、親しく此の地を訪れサルタンと會見して、土地讓渡に就て相談したことがあつた。サルタンは六十餘の氣品ある老人で、先住民保護の爲め土地の讓渡は一切斷つてゐるが、私は總督の紹介もあり、日蘭國交の點から特に一萬英町歩を讓渡するといふ約束をして呉れた。當時の交渉は私のスマトラ日記に詳しく書き残してある。

其處から引返して同夜は小坂、宮地君等と澤村三井支配人の宅に招かれ日本料理の饗を享け歡を盡してホテルに歸つたが、折柄の日曜日とて白人の來り集まるもの數十名、夜半迄亂舞した様である。彼等の唯一の慰安の時でがなあらう。斯くてメダンの第二夜は更けたのであつた。

翌くれば二十日、早朝出發の豫定のところ又々延期して、午前七時出發が午後三時となり、一轉して更に二十一日早朝となつた。飛行機程あてにならぬものはない。

此の日、長男カルカッタを出て歸途に就く筈、無聊のまゝ、一句を吟じた。

五十一 偶 成 其の一 一月二十一日

一貫至誠無不通、踏殘天末地垠風、

吾家宿命事千里、父向暹羅兒日東、

一貫至誠通ぜざるなく、踏み殘す天末地垠の風。

吾が家の宿命千里を事とし、父は暹羅に向ひ兒は日東に。

至誠の一貫するところ通ぜざるはない。天北地南を踏み破つて來た私には家傳があつて、父はメダンから泰に渡らんとし兒は印度から祖國へ歸らうとして居る。先には歸航舟中の嫁へ打電してやつたが、悴とも旅中に相會ふ機會を失つて終つた。然し、世界を家とするわが一家にとつて、こんなことは日常茶飯事である。大して苦にはならない。九時、領事館に往き、資料に目を曝らし、十時か

ら日本人學校に赴いて、約一時間に亘り、生徒一同に講話して次代國民を激動などして時を消した。斯く豫定に狂ひを生じて、之は靜かに思を天地有形の外に馳せ、神を六合の中に逍遙せしめるの好機會である。人間は旅行に依つて見聞を廣め、智識を深め、身心を養ひ、信念を長ずるの外に、車の上、ホテルの朝夕、隨時隨處に湧き出づる感想を集約し、淨化し、確乎不動の自己を鍊成することも亦た行事の一でなければならぬ。斯くて待機の日有半は詩囚となつて過ぎたことであつた。

五十二 同其の二

待機兩日意千秋、前路頭頭一望悠、
不若隨時隨處轉、天涯拈句作詩囚、

待機兩日意千秋、前路頭頭一望悠かあり。

若かず隨時隨處に轉じ、天涯句を拈つて詩囚を作る。

(三月九日認之)

(四) 國防一色の英領馬來 九首

一 シンガポールの第一日

故障で一日半を延期したK、L、M機は、二十日午後三時半メダンに着いたが、シンガポールへは、時已に遅いので、二十一日朝四時半出發とのことに、二十日夕刻野村、時田諸老と語り、食後、澤村、小坂、宮地等諸君と團樂、ホテルの中庭に涼を追ひながら、メダン最後の夜を過し、十時早寝したが翌朝のことが氣にか、り夢圓ならず、廿一日前二時半早くも起き出て仕度をする中、三時十分には小坂君が戸を叩いた。朝飯後、四時宮地君と三人ホテルを出て、飛行場に着いた。此地でも總督の通達があつたものか、荷物の検査もなく簡易な手續を終へて二君に別れ、四時半機上の人となつた。丁度残月が斜に懸つて、氣は爽快である。之から五百三十餘哩を飛ばせば第二の故郷ともいふべきシンガポールに着いて、懐しい舊友達にも會ふことであらう。そこで、忽ち一句浮んだ。

五十三 舊盟を敲かん 一月二十一日

殘月斜懸天未晴、乾坤峭爽客襟清、

世界を見渡しつ、

南飛五百卅餘里、直到星坡シンガポール敵舊盟、

殘月斜に懸つて天未だ晴れず、乾坤峭爽客襟清し。

南に飛ぶ五百卅餘里、直に星坡に到つて舊盟を敵かん。

間もなく機はマラッカ海峡を南下し、遙かに朝暾が東から出るのを見て、覺えず之を拜した。今やわが皇威は南方に伸び、曾て推古天皇の御代、隋の煬帝に贈られた書に『日出づる處の天子、日没する處の皇帝に寄す』と記されたが、今、私は雲の上で日出づる國に向つて、日出の壯麗な景色を眺めて感慨無量である。

五十四 スマトラよりシンガポールに至る機上 其の一 同日

爲客炎南已四旬、老來意氣尙嶙峋、

天明機上心神暢、遙拜朝暾照九旻、

炎南に客たる已に四旬、老來意氣尙は嶙峋たり。

天明けて機上心神暢かに、遙かに拜す朝暾の九旻を照すを。

更に馬來半島とマラッカ海峡の上を進むと、陽光が下界一體を照らし、飛行機の中は涼しくて秋の氣持である。暫らくして白雲が出て視界を遮つたが、遙か彼方に中央山脉の最高峰のみが一つ雲の表に抜き出でて浮び上つてゐるのを見た。

五十五 同其の二 同日

朝陽照盡馬來洲、機翼曉排霄漢秋、

忽有白雲橫眼底、地球只看一峯浮、

朝陽照し盡くす馬來洲、機翼曉に霄漢を排するの秋。

忽ち白雲の眼底を横ざるあり、地球只だ看る一峯の浮ぶを。

午前七時四十五分シンガポール着陸、三井、三菱、商船、郵船、正金、臺銀、昭和ゴム其の他の舊知多數に迎へられ、一々挨拶を交した後、三菱の徳田支店長、昭和の松本専務等と共に豫定のシー・ビュー・ホテル第八十八號室に入つて、滞在中の日程を案じ、九時移民局に赴きジョホール河畔の創業地であるトロンガイ行の査證を受け、三菱、正金、臺銀、總領事館、三井、郵船、商船等を歴訪して答禮を爲し、正午ホテルに歸つて一時から同ホテルに於ける産業館長松川君の午餐會に臨んだ。産業館は大正五年農商務省の委託を受けて南洋協會が作つた商品陳列館を繼承したもので、私は謂はば生みの親と申してもよい關係である。當時、私は農商務省囑託の關係で南洋に關する調査をして居たが、仲小路農務大臣時代、唯の調査ではもの足りない、英國のインフオーメーション・ビューローの例に倣つて南方との通商貿易の助長、企業を推進を期する爲め、何等かの常設的機關を南方に設けることを計劃し、大臣の賛成、議會の協賛を得て出來たのがシンガポールの商品陳列館であつた。

ハイ・ストリートの角にあつた三階の建物を約二十萬圓で買収して、之を本據としたが爾來二十數年、今は名を産業館と改め益々活潑な働きを爲しつゝあることは愉快である。

鶴見總領事、山村日本人會長始め百姓會各商社銀行の代表者、主なる個人商店々主約二十餘名が參會せられ、午餐後館長の挨拶に對し、約三十分に亘り所感を述べ二時半散會した。それから武藤正金支配人と同乗して總督官邸に赴いて署名、爲替管理局に用を辨じ、一旦舊知の碩田館に立寄つた。碩田館はいふ迄もなく邦人最古の旅館、現にわが昭和ゴムの常宿でもあるので、吉原取締役と堺君とを拉して、館を出てケリー・アンド・ウォルシュ書店に舊新刊を漁り、四時ホテルに歸つて長尾シンガポール日報社長の來訪を受けて四人鼎座して語つた。堺君は現在拓務省囑託として、南洋栽培界のオーソリテイであるが、私は開拓の當初、彼をネトビー・ホテルの一室に見出し、迎へてわが社の栽培顧問としたのであつた。後、日本人栽培協會を創設するや、副委員長の私は再び彼を幹事に推し、彼は三井、南洋等の農園の栽培顧問ともなつてゐた。大正三年私が北ボルネオ調査團を組織した時にも、彼をその一行中に迎へ、その報告等が縁となつて後、彼は久原鑛業經營のダバオ園支配人となつたが、後任を得てシンガポールに歸還し、爾來引續き此の地に在住して在留邦人の農業經營者の智囊と仰がれて居るのである。

今夜は三十年來の舊友だけで、一夕の歡を盡したいといふので、七時半からタンジョン・カトンの

玉川に櫻尾、永福、照屋、高橋、松本等の諸君が集つてくれた。櫻尾君は自動車業に、書店に、その他各方面に縦横の手腕を振ひつゝある人、永福君は十數隻の漁船、數百名の漁夫を率いて遠くシヤム灣から蘭領インドの公海まで乗出して漁業を営みつゝある漢、照屋君は初め農園に入つたが、今は拓務省囑託として堺君と共に熱帯栽培のエキスパートである仁。最も若い高橋君は日本藥房主であるが、やはり五十歳は越へてゐるであらう。松本君はわが社の人となり、忽ち儕輩を抜いて支配人となり、常務となり最近専務に任じて現業地を擔當して居る。吉原取締役もわが社へ入つてから既に二十五年にもならうが、五十の坂を越へて孫があるといふことであつた。彼等はいづれも二十年から三十年の永きに亘る友人で彼等と相語る喜びは又一入でなければならぬ。十時散會、十一時ホテルに歸つて昨朝來の寢不足を補つた。

二 臨海樓の三夜

シービュー・ホテルは昭和十一年にも四日を過したところで、朝夕の氣象は萬變する。怒れば波濤は岸を噛み、静かなれば死の如く些かの音も無い。庭には亭々たる椰子の樹が空に聳えるところ、天の星も間近な氣さへする。夜に入れば漁火點々として眼前に散らつき、遙か彼方、蘭領リオ群島には白塗りの油槽がほのかに白く高く浮んで見える。

此の夜は特に静かな晩で、萬象死するが如く、折から食堂で奏するバンドが私の冥想を亂すのみであつた。前年來遊した時は、泰國を巡つて最後の四日間であつた爲め、一層詩魂が躍つたのであらうが、當時の二絶を借りて今の心地を示す一助としたい。

潮勢齧涯如有聲、碎爲銀浪浪頭明、

雲蹤水宿六旬後、海月海樓詩夢情、

群嶼星羅一望連、海風徐度舞漪漣、

海樓四泊心逾爽、管領天涯風月樓、

前年は四泊したが、今回は三泊であるので、次の一首を得た。

五十六 シービユー・ホテル

四載重來臨海樓、朝吟夕嘯客情幽、

二千里外東歸客、爲愛江山三日留、

四載重て來る臨海の樓、朝吟夕嘯客情幽なり。

二千里外東歸の客、江山を愛するが爲めに三日留まる。

故人の句に『江山を愛するが爲め幾日留る』とあることを思ひ出し、借りて自己の心境を直叙することを允されたい。

三 海峽植民地總督の招待午餐會

二十二日早起すれば、一天晴れて漣波なく陽光海を照らすところ、リオ群島は眼前に在る。座してコーヒの一杯を傾けると、小禽が囀々として飛んで部屋へ入つて來る。朝の一刻は高原ホテルでも、海樓でも同じく爽快で、熱帯生活の中で最も心地のよいもの、一つであらう。朝食後松川君に迎へられ、武藤君と共に九時日本人小學校を參觀し、約一時間に亘つて二百五十餘名の小學生に、在外者の心掛けから信念長養の要を述べて次代國民の啓發に資した。

『私は皆さんよりもつと小さい頃から太閤さんが好きでたまらず、羽織の背中に豊太閤と縫つて貰つて喜んだものです。その頃から不言實行といふことが好きで、喧嘩をしても口論より拳骨が先で、随分亂暴もしましたが、學業の方も一生懸命やつたので成績がよく、小學以來大抵二番と下らず、中學では一度に二年進級したこともあります。これからの日本はどうしても世界に伸びねばならぬといふので、十六歳の時海軍兵學校に入りましたが、間もなく起つた日清戦争に出して貰へないので海軍を罷め、臺灣へ渡りました。その前に荒尾精といふ偉らい先生から、亞細亞を興すといふことの大切なことを教はりましたが、それから、支那大陸を巡り、歸つて復た學窓の人となり、早稻田を卒業して支那と色々の關係を持つようになりました。朝鮮が日本と合併することに就いても働きましたが、そ

れから又世界を廻つて南洋へ乗り出したのは三十年の昔であります。南洋から南米へ、世界へと私の仕事は伸び、南米へ十六萬、フオリピンやペルーへ各一萬の同胞を送り出しましたが、海外發展にはまづ人を植ゑねばなりません。二三日前、メダンで三菱の油椰子農園八千英町歩を一望の中に眺めて來ましたが、彼處で皆さんの足さん位の方が元氣に働いて居られるのを見て涙が出て來ました。不言實行、而して感激を以て働くことです。どうか皆さんもシツカリして下さい。私はもう六十五歳を越えてゐますが、まだ元氣で日本の爲めにかうして南洋までやつて參りました。これからも日本の爲め、世界の爲めに働くつもりですが、皆さんもどうか本當にシツカリ勉強して立派な開拓者となつて下さい。』

(邦字新聞初抜きによる)

十一時ホテルに歸り小憩の後、十二時總領事館から迎への自動車で鶴見總領事と共に十二時五十分總督官邸に於けるサー・トーマス總督夫妻の招待午餐會に赴いた。總督は舊知のこと、て温顔を以て夫人と共に迎へられ、應接間に入つて、まづコクテールの一杯を傾けて歡談した。總督に四年前お眼にかゝつた時、夫人は本國に在つて不在であつたが、

『私は千九百十年かに貴國に遊び、その美しい風光に接して如何にも愉快だつたので、近く妻や子供等にも一度參らせたいと思つてゐます。』

との話であつたが、去年の秋賜暇休暇で本國に歸られ、その歸途我國に立寄られたのであつた。

愈々卓に就いたが、陸海兩武官の他には相客もなく、全く私に對する心づくしと解つたので、私も胸襟を開いて誠意を吐露した。私は言つた。

『私は三十年前にジョホールに開拓事業を起し、日本人栽培協會を設けて貴國人の馬來栽培聯合會に參加し、常に主な貴國人と交つて、事業上の便利や提撕を受けたことも少くありませんでした。私がプランターとして、日本人として英國政府に感謝して居ることは當時も今も變りありません。日本の友情といふものは、根本的には何等の變化がないことは私が明言致します。然し、最近國際情勢の變化は、貴國に於ても或は戒嚴令を布かれ、或は新法令を發布されて第三國人の居住、出入、營業等に幾多の制限を加へられて居ることは止むを得ないと致しましたが、わが邦人が相當の不快不便を感じるところがあるやうです。今日は折角の御招待に預かり感謝に堪へませんが、何卒總督の御意志がよく部下に徹底して、少しでもわが同胞が居心地よい様に御心使ひが願ひたいのであります。』

と卒直に純民間人としての希望を述べて置いたのであつた。總督はこれに對して、『意のあるところはよく解つた。英國としては決して日本人だからといつて特別扱はしたくはない、兩國の關係が昔の様に還元することを望むものです。』

と答へられた。又、總督が曾てアフリカや、インドにも在任されたことから話の花が咲いたの

で、私は、

『思ひ出すと三十年の昔になります。一九一一年の冬、紅海のポート・スーダンに上陸し、ヌビヤの砂漠を越へた私はクリスマスの日カルツームに入りました。當時の總督はウキンゲート中將で、折よくもキツチナー元帥も来て居られました。元帥は陸軍大臣時代、わが國に來朝されたことがありますが、當時私は韓國京城に居たので伊藤總監の命を承け、元帥の接伴委員として數日お伴をしたことがあるのです。キツチナー元帥は一八八一年に於けるゴールドン救援軍の參謀長で（司令官は前世界大戰に於ける總司令官ロバート元帥）、ウキンゲート中將はその部下の參謀でした。元帥はその功によつてロード・オブ・カルツームの稱號を與へられたやうな次第で、元帥とスーダン、カルツームとは深い因縁があるので多分來られたのでせう。私はウキンゲート中將の招待で、白宮、ゴールドン將軍が、マージの叛亂に際して身を殞された處を見、又白宮の庭にゴールドン將軍手植の薔薇が芳香を放つて居る下で、お茶の會に招かれました。又一日はキツチナー元帥とウキンゲート總督に伴はれ、舟をナイル河に浮べて壯烈な河馬狩も致しました。』

こゝまで述べると、夫人は驚きの表情で、

『それは惜しいことをしました。實はそのウキンゲート中將の令嬢がベラ州理事官夫人となつて、餘り遠くないところに居られるのです。そんなことを存じてゐたらお引會せするところでしたのに。』

と言はれたので、私も残念に思つた。私は更にインドに就いて言つた。

『スーダンに参りました同年、道をインドに取り、ボンベイから一路西北境のベシヤワルに行きました。友人のアイランド士官とそのメツス・ルームに一夜を過し、翌朝、彼の案内で馬車をカイバル峠に驅つてアフガンの一端を視察しましたが、ボンベイでは室内九十度の暑さも、西北境では寒さ厳しく、冬外套に手袋をはめて漸く寒さをしのいだといふ始末でした。貴國は流石に世界的帝國です。アフリカの中原でも印度の邊境でも、老若男女幾多の貴國人が危険を冒して夫々の任務に従つて居り、實に美しい限りでありました。』

私は持參の拙著に挿入したゴールドン將軍の寫眞を示したりして、話は世界の各方面に飛び、愉快な日英交驩であつた。

その日は海峡植民地參議會のあつた日で、總督も多忙の様に見受けたので、宴終つて小憩の後辭し、二時半碩田館に立寄り、山行の旅装に代へた後、記者團と會見し、三時松本、吉原兩君に伴はれてジヨホール河畔の農園に向け、自動車を駛せたのであつた。

四 創業の地トロスンガイ

シンガポールの町を出て、國防一色の島を南北に貫くこと十六哩、嘗ての會社所有地ブキテイマ園

世界を見渡しつゝ、

が今は立派な住宅地となつて居るのに懐舊の思を致しつゝ、海峡を渡つてジョホールの都ジョホールバルに渡り、コタテンギ街道を経て、アングロ・ジャバ會社經營のコン・コン園を横切る更に十一哩、シンガポールから約五十哩を駛せてジョホール河畔に車を下つた。遙かに見える對岸の村落はわがトロスンガイ園の入口である。會社のランチに投じマングローブの繁る邊り、小波の漂ふところ、河心を航して久懸の地へ着いたのは五時半であつた。

柔佛 河邊泊 又 征 護謨樹樹舊訂盟

不知埋骨何所處 煙水茫茫極目平

これは昭和十一年にもした一首で、今も同じ感である。

社員一同並びにボンゴロ即ち村長等に迎へられ、新に出來た商店の櫛比せる海岸の風景に目を眩つた。といふのは、ジョホール河一帯にはバンチョール其他二、三の船着場があるが、トロスンガイには二千人近くの従業者があり、之に衣食せるものも尠なからず、農園が盛大に赴く爲め店舗も自然に多く、支那人の店だけでも十軒、馬來人の店も多く、飲食店、理髮店、旅館等もあり、支那人學校、馬來人學校も新に椰子林の間に聳えて居て、四年前とは面目を全く一新してジョホール河畔第一の集散地となつたからである。會社の自動車で約一哩奥の俱樂部に入り、松本君と共に一部新植付地を廻つて、最近の優良種による製産量の夥しい増加の模様等を聞取して、農園經營の進歩に教へられると

ころ少くなかつた。

俱樂部は大正の初に建築した古色蒼然たるものだが、それだけ却つて思ひ出も深いのであつた。明治四十五年の三月に私の自書した箴言は尙ほ壁間に掲げられて居り、創業以來の重役の寫眞もそのままであつた。そこで、

五十七 トロスンガイ農園 其の一 一月二十六日

又尋柔佛水邊村 村老迎吾情轉溫

回首卅年辛苦跡 箴言句句儼猶存

又尋ぬジョホール水邊の村、村老吾を迎へて情轉た温なり。

首を回らせば三十年辛苦の跡、箴言句句儼として猶ほ存す。

一浴後、七時半から社員一同(十五人)とすきやきをつゝき、松本君の歡迎の辭に對し、約一時間に亘り挨拶に代へて所信を披瀝して一同の努力を望み、十時暮に就いたが、思ひは種々の空に走せて眠りに落ちること遅く、窓外の蟲聲が旅魂に伴ふのであつた。

五十八 同 其の二 同日

柔佛河頭舊雨親 竭來創業閱辛酸

山廬話舊村爺健 蟲語呼嚶不讓人

世界を見渡しつゝ、

柔佛河頭舊雨親しみ、竭來創業酸辛を悶す。

山廬舊を話し村爺健に、蟲語呼響人に譲らず。

これは老ブランターの實感である。

五 農園の第二日

二十三日朝五時半起床して農園の爽涼なる一時を味ひ、七時松本吉原二君と朝食を共にし、八時から俱樂部を出てまづ工場作業を見、轉じて新舊兩植林地に入り、昔の分遣所建物の下に立つて創業當時を偲んだ。更に舊事務所、俱樂部の邊まで自動車を進め、新植附地帯を馳驅し、社宅街から病院を見舞ひ、招魂碑に謁して正午俱樂部へ歸つた。

トロスンガイ入口からグンドン入口迄、自動車道路七マイル半、園内縦横の自動車路を通算すれば四十哩にも及ぶ可く、植附面積は八千三百英町歩、年産三百萬ポンド、從業の邦人二十四名、支那人八百九十二名、印度人二百八名、馬來人五百三十三名合計千六百五十七名。更に海岸のトロスンガイで生活する者も相當數に上つて居るので、本園によつて衣食する者は二千數百名といふも決して誇張ではない。然も英領馬來には他にスンガラン、リオの兩園を有して居るので、ゴム植附總面積は一萬七百三十九英町歩、正に一個のゴム王國を形成して居るのである。前遊の際歌つた詩に、

竭來創業閱辛酸、想到拮据難又難

馳驅園林三十里、一芒一木細心看

といふのがあるが、今回は四十里と歌はねばならぬ。而して「一芒一木細心に看る」といふ氣持は變らぬのみか、益々深くなつたやうな氣がするのである。聞けば墓地整理の必要上、會社の墓地をシソングポールに選定したので、追つては園内の墓も、招魂碑と共にそこに移したいとのことであつた。

招魂碑は森村翁の執筆にかゝり、南洋では花崗岩が無いので、東京からわざわざ運搬した。日本字の上には英字で、イン・メモリー・オブ・ノーブル・カムラードと記してあるが、之は英領に建てたものだからこんなことをしたので、海外で仕事をする者の細かい用意の存するところである。こゝで附記して置くが、わが社は海峽植民地の戦時施設に對して、一萬ドルを寄贈したが、之も同様の氣持ちからで、總督との會見の際も談この事に及んで感謝の目ざしをされたのであつた。

招魂碑に詣で、は自ら創業の古を偲んで一句なかるべからずである。會ての句に、

招魂碑に謁す

熱園建邦曾自期、雄心落落不知危

招魂碑下魂何在、步步徘徊杖履遲

「熱園建邦」といふのは、創業の際、伊勢大廟に謁して誓をたて、事務所の自室には神武天皇御像の

世界を見渡しつ、

掛軸をかけ、之に「創業建國」と題し、その下に天地正大の氣といふ位牌をたて、朝夕静座して熟禱を捧げて信念を養つたことを述べたのであつて、招魂碑を仰ぐとその當時を回想し、今は亡きパイオニア諸兄のことを偲び、低徊自然と歩みも鈍くなるといふのである。

前遊の時、倶楽部前に聳えて居る大ゴム樹の下で撮影したが、今次も亦記念の寫眞をとり、周圍を計つてみると、目通り三尺の高さで八尺七寸、下の方は十尺六寸もあつた。四年餘の間に一尺以上も伸びた心地がする。炎南、天恵の渥きにもよるのであらうが、驚く可き生長力である。三十年の歳月を経て人も亦伸びた。創業當時から居る人々は早や五十五六歳で六十の坂に近く、最も若かつた者も五十歳前後になつて、到るところに主動的立場にたつて働いて居るが、人を植ゑることの楽しみは人生最大の楽しみである。

五十九 巨木周圍十尺六寸

羅馬誰言一日成 三十星霜夢裡迎

偏喜炎南天惠渥 老幹百尺翠崢嶸

羅馬誰か言ふ一日に成ると、三十の星霜夢裡に迎ふ。

偏に喜ぶ炎南天惠渥し、老幹百尺翠り崢嶸。

此の場合、私關係の昭和ゴム會社農園を改めて一瞥すれば、ゴム植林地一萬七百三十九英町歩に椰

子樹の植附地、建物敷地、未墾地を併せて英領馬來では一萬三千三百八十一英町歩、これにスマトラ農場のゴムの六千二百二十七英町歩、カカオの三百七英町歩、未墾地八千四百八十英町歩、合計一萬五千十四英町歩を總計すれば二萬八千三百九十五英町歩に上り、ゴムの年産兩農場を合せて現に六百萬ポンド以上たる可く更新植附地が全部採集期に入れば、一英町當り一千ポンド以上を出すといふことで、創業時代平均三、四百ポンドであつたことを思へば、文字通り隔世の感がある。然し、需要が増加しなければ、供給過多となつて、現在のやうな一ポンド（シンガポールに於て）三十五、六仙といふ高値を維持することは難しい。故に經營者は生産費を引下げ、一ポンド當り八仙位ですます必要があつて、これにも相當の努力が要るとのこと、此の解決は優良種の植附を全面積に及ぼすのが早道とのことであつた。

六 農園の雨後

午食後、一と時の午睡に心機爽快、覺めてコーヒー一杯を傾けて、社員の希望に應じて悪筆を揮ひ、四時、一同と倶楽部前で記念の撮影をしたが、間もなく驟雨沛然として來つて、天地亦晦く、晴れて後の涼味は又一入である。之は熱帯農園の持つ特權ともいふ可く、木も人も蘇生するのである。

一浴して雨後の爽涼をベランダに味ひフット仰ぐと森村翁書くところの「確信」の二字が眼に入つた。

翁は確信の二字を標語として事業に邁進され、確信の下に創造あり、進歩あり、革新ありといふことを常に自得し自奮して居られた。實行の妙味を體得した人の考へ方である。更に眼を轉ずると南亞公使時代の重役の寫眞、招魂碑前に立つ私の寫眞があり、私の齎し來つた聯句「忠心尊漢聚兄弟、義氣參天威龍虎」もある。之は關羽の廟前にあつたもので、「忠心、義氣」がわが黨の標語であることも思ひ出し、最後に大廣間に掲げてある前記自書の箴言を改め讀んで、萬感胸に迫る懐しさを覺えた。一詩あり、以て心胸の一端を述べた。

六十 雨後農園偶拈 一月二十三日

雨後農園樹色青 一群蝙蝠掠前庭、

日斜山館涼殊峭 天語蟲聲靜裡聽

雨後の農園樹色青し、一群の蝙蝠前庭を掠む。

日は斜に山館涼殊に峭、天語蟲聲を靜裡に聽く。

雨後の農園は木の色も一層青々として居る。日暮れんとして一群の蝙蝠が飛んで來たが、この蝙蝠は翼を擴げると五、六尺にも達するものがある。これがゴム園に來て、新芽や樹の葉を喰ふので、然も彼等の喰ふゴム樹は一種に決つてゐるとかで、私もその被害を見せられたのであつた。農園、日も暮れて靜かにして居ると、天の聲が聽こえて來るが、フト氣がつくと又俗に歸つて蟲の聲も聽こえる。

晚餐後、復た社員一同と語り、十時退いて部屋に入つてトロスンガイの靜かな第二夜を過ごした。

七 又シンガポールへ

二十四日未明、五時半起床、農園朝の爽氣を味ひ、六時朝食、六時半出發、埠頭で一同と惜しき別れを告げ、松本、吉原二君と會社のランチに投じた。丁度朝日が東から出て、鏡のやうな河心を照し、刻々に距り行くトロスンガイの樹海を心ゆく迄凝視しつゝ、最後の別れを告げた私は、何れの日か再び此の創業の地を訪れることであらうか。

六十一 桑佛農園を去る 一月二十四日

星坡嶋北碧波灣 樹海洋洋十里間、

早曉又浮輕舸去 何時重看井州山、

星坡嶋の北、碧波の灣、樹海は洋洋たり十里の間。

早曉に又た輕舸に浮んで去れば、何時か重て井州の山を看ん。

この時の實感でなければならぬ。

七時半コン・コン上陸、疾驅五十哩、九時五分碩田館に着き、中澤君を案内として吉原君とまつ警察に査證を得、K、L、M社に切符の切替へをし、蘭印移民局の査證をも終へて出發の準備成り、更

に總領事館島貫領事に托して携帶冊子の檢閲を受けた。昨今シンガポールの出入は、手續煩瑣を極め、往返共に一々警察の査證を経ねばならず、足、一步シンガポールを出づれば、自己の農園に行くにも査證が要り、携帶の冊子等も總て檢閲を受けねばならぬのである。此の檢閲には相當の時間を要するので、往々にして時期を失して、旅行者の豫定を狂はすこともあるさうだ。

一旦ホテルに引返して後、十二時半、松本君と共に總領事官邸の招待午餐會に赴き、二時辭去、堺、吉原二君と共に買物をし、植物園を経て遠く自動車を持の家を驅つて、遙かにリオ群島を眺め、又眼下に展開するシンガポール島の國防色を望み、それから五時半ホテルに歸り、七時半同じく玉川に於ける松本専務の晚餐會に列した。集る者總領事、日本人會長、水曜會員等十數名、一同歡を盡して一時散會、シンガポールの第二夜を終つた。

八 シンガポールの第三日

二十五日朝七時起床、八時福田老の來訪を受けて三十年の夢を聞き、八時半三菱商事の徳田支店長夫妻に迎へられ、朝飯を共にして故郷の話をした。彼は私と姻戚に當り、夫人も亦同郷の友人の令嬢であるから、謂はゞ丹波出の三人が此處シンガポールで相會したわけである。正午碩田館を経てラッフルス・ホテルに於ける三菱、正金兩社の招待午餐會に列し、松本、松川兩君を始め兩社の社員參集、

同文書院出身の橋瓜副領事も加つた。二時散會。此のホテルも私は屢々投宿したことがある。

二時十分、本間齒科醫院を經、堺君と共にセラングトン墓地に眠る古藤、曾木、中野、高杉等故友の靈を弔つた。

曾木君は韓國時代、私の部下であつたのみならず、永く私の家に同居し、後官を辭して渡米、ロスアンゼルス大學に學んだが、私が南洋に赴くや突然シンガポールに現はれて私を驚かした。私は彼を新に出來た日本人栽培協會の幹事に推薦したが、彼は後、日刊新聞を起して堂々の筆陣を張り、古藤君と共に活躍したが、不幸病を得て中途に仆れた。古藤君は曾木君の後を享け、社長として新聞を主宰して居たが、遂に天南に骨を埋むるの一パイオニアとなつた。中野君は私の創業時代に於けるシンガポールの代表的人物で、病院長として、日本人會長としてその功績は大きかつた。

三時半ホテルに歸り、今度は海に面した第八十七號室に轉じて、好風景を恣にした。

シンガポールへ來ればラッフルスのことが胸に浮ぶ。彼は元東印度會社の書記であつたが、ミントー卿の推薦によつて僅か三十歳でバタビヤ知事となり、後には東印度副總督として不朽の名を残し、更にシンガポールの建設者として、東洋に於ける大英帝國の基礎を築いたが、四十四歳の時、即ち西曆一八二六年に早くも鬼藉に入つたのは惜しみても餘りがある感がする。彼の一生はパイオニアにふさはしい悲哀の連続で、最愛の夫人を異境に失ひ、畢生の努力を傾けて蒐集した歴史、動物、植物等の

標本は本國に送る途中船の難破の爲め痕を留めず、本國に歸つては同僚先輩から嫉視され、誤解され、バタビヤに於ても亦蘭人から排斥された。私は彼の生涯を思ふ毎にバイオニアたるの如何に難いこと、世に認めらるゝことの如何に遅く、酬はるゝことの如何に少ないことを感じるのである。然し、實行者は最後の勝利者である。時は恭々しくバイオニアに榮冠を捧げる。見よ、百餘年の後、ラフルスの名は赫々として世界に輝き、英國國民の前に萬丈の氣を吐いてゐるではないか。

九 第四日と水曜會主催招待會

一浴の後、タイムスを読み、彼等の宣傳の巧妙なるに苦笑しつゝ、七時半松本君に伴はれ、玉川に於ける水曜會員を中心とする日本人會長、記者團等十數名合同の招待宴に列し、お互に隔意なく語り合つた。水曜會の畫帳を示されたので、何に氣なく開いてみると昭和十二年十月として、

老來豈復夢封侯、榮辱得喪輕似漚、

回首鵬程三萬里 秋風此夕滿歸舟、

と自書して居る。之は夫妻第七回世界周游の歸途、シンガポールに立寄つた際、同じ水曜會に招かれて書いたものと思ふ。『秋風此夕歸舟に滿つ』と歌つてゐるが、今次の旅行は範圍が餘りに狭くそんな感はしない。

宴終つて十時半ホテルへ歸つたが、土曜日のこと、て、夜半まで舞踏の聲がうるさく午前一時頃に至つて漸く静まつた。

十 又待機の一日本

二十六日は愈々バンコックへ出發の日である。七時起床。シンガポールと最後の別れを惜しむ間もなく、朝來、竹内、梅森、橋爪の諸君來訪、十二時過には徳田、牧野、松川、山村の諸君を加へて午餐を共にし、二時五十分ホテルを出て、二時半發のK、L、M機に投ぜんとしたが、飛行場の係員曰く、

『唯今無電あり、バタビヤの出發遅れて今日は出ません。』

メダンからシンガポールへ來る時も一日半延期したが、又一日延期して明朝七時半發となつた。見送りの人々に謝して小憩の後、松本、竹内二君と再び峠の家の上つて、島勢を大觀し、四時から映畫見物、六時半東京亭に日本そばを味つてホテルへ歸り、靜かに尊に入つた。

二十七日午前五時半起床、松本、竹内二君に迎へられ、六時半飛行場に着いたが、又々午後三時半に延期したとのことで、ホテルを引上げて碩田館に落着くこととし、ラフルス博物館、植物園等を見物、碩田館に長尾、古口兩君の來訪を受けて語り、午餐の後、二時五十分飛行場に入つたが、何事ぞ

又又飛行は延期して明朝出發とのことである。

三時過碩田館に歸つて、その夕はソファに倚つて海風に吹かれつゝ、蘇峯先生の交友録なる書を卒讀した。中に桂公と川上將軍の比較論がある。私は此の兩先輩には知遇を受けた一人であるが、川上將軍は僅かに五十三歳、桂公ですら六十七歳で亡くなつて居る。あの偉大な足跡を思ふと、私は耻づかしさを覚えるのである。明治三十年川上將軍に隨伴してシベリヤ遠征を試みたこと、在韓時代桂公の知遇を受け、南洋開拓に當つても特に賛同して激勵されたこと、思ひ出すと懐しいことばかりで、自分も相當遙かな人生の道を歩いて來たといふ感が深い。

五時飛行場から通知があつて、飛行機は先刻到着、出發は明朝六時十五分だから、五時四十五分迄に來いとのことである。飛行機が着いたとあればもう間違はあるまい。愈々本當に第二の故郷にお別れである。

夜は竹内、柴田二君と舊正月の光景を街頭に探り、又映畫場を覗いた。(三月九日認之)

(五) 起ち上りつゝある青年泰國 五首

一 シンガポールを立つ

二十八日早曉四時半起床、五時半ホテルを出で、六時十五分發のK、L、M機に投じてバンコックに向つた。松本、竹内、中澤諸君の外に堺君の見送りを受けた。忽ち上空に上れば、シンガポールの島は早くも後に在り、マラッカ海峡を越へて九時メダンに着陸した。領事館の藤沼、三井の澤村、スマ拓の早川、三菱の宮地の諸君に混つて、わが小坂君の顔が見へる。然し、通過の客は休憩所以外には出さないといふので、藤沼君のみ入所を許され、他の人々とは折角の好意を謝しつゝ、扉を距て、語るの外、仕方がない。蘭印に於ても、英領馬來に於ても、飛行場内外の警戒はもの／＼しく、見送りの客は固より旅客も休憩所外一步を出でしめず、劍つき鐵砲の兵士や警察官が嚴戒し居る。先にバンバンで休憩中、何の氣なしに手帳を取出したところ、之を見た馬來の巡査は自ら警官であると名がつて、早速手帳を取上げんとした。

『之はこの通り何も書いてゐない。ポエムが書いてあるだけだ。』

と言つたが、彼はなかく頑迷で、私が機上の人となる際、傍まで跟いて来て、オランダ人の操縦士に訴へるので、私も遂に

『何でもないよ！』

と叱りつけた。此際も休憩所の入口に鍵をかけて、誰も入ることを許さなかつたのである。

十時發復たマラッカの上空を東北に航し、十一時ピナンへ着陸、此處でも郵便物を待つこと一時間、その間に會遊のピナンの風光に浸り十二時發、忽ちにして英領よりタイ領に入った。

タイ領に入れば眼底の風光や、落寞たるものがあるが、今やわが國の斡旋により起ち上りつゝある青年泰國の將來を思ふて、自ら意氣の快然たるものがあつた。日泰兩國の提携は必至の運命であるとして、嘗てかういふ句を爲したことがある。

北去三星坡二千里程、風光寥廓意縱橫、

何時使握日運手、東半球天娛太平、

即ち日泰手を握つて東亞細亞の平和を樂しまんといふのであるが、又かうも考へてみた。

東方久委哲人騙、西力東漸勢未消、

隻手欲回天一面、回頭志業路程遼、

現在でも白人勢力の侵略は根強く、隻手を以て天の一面に回さんとすることは容易ではなく、なか

なかの大業である。然し、泰國が青年の意氣を以て起ち上らんとしつゝあることも事實である。

午後二時半バンコック着、四年半ぶりに白象王國の首都に入る。機上世界戦を思つて左の一絶が浮んだ。

六十二 泰 に向ふ 其の一 一月廿八日

怒濤澎湃世迷津、誰挺一身救此民、

欲討秦邦千里北、曉爲銀翼斬雲人、

怒濤澎湃として世は津に迷ひ、誰か一身を挺して此の民を救はん、

秦邦を千里の北に討ねんと欲し、曉に爲る銀翼雲を斬るの人、

今や世界の現状は怒濤澎湃として向ふ處を知らず、誰もかも道に迷つては何處へ舟を着くべきか不明である。此の際、一身を挺して全人類を救ふ者は誰であるか。私は秦邦を千里の北に討ねんとし、早曉に雲を斬るの人となつたが感無量である。

泰國に入るに従つて雨期から乾期に變つたものか、空には雲もなく青一色、水も亦碧洋々、遙か眼下に二羽の鳥が竝んで飛ぶのが見られた。そこで、

六十三 同 其の二 同日

北去三蘇東向秦邦、飛行機上氣逾颯、

世界を見渡しつゝ、

瞰過眼底三千尺、碧水漫漫鳥影雙、

の句が出来た。スマトラの東を去つて、北、秦國に入れば、機上の氣持は實に豪壯である。忽ち眼底三千尺の下を見れば、碧水の上に鳥の影が雙んで居るのがほの見へるといふのである。

ピナンから秦領に入れば、何となく心も廣く體胖かである。バンコックに着いて或る政治家に會つた時、話が馬來の現状に及んだが、その人の曰く、

『英領馬來に入ると、御國の人もわが秦人も不愉快な待遇を受けるが、華僑はそんな感じを持たないらしい。』

と。秦人が日本人に對し何となく親密の感じを持つて居ることは事實である。況んや泰佛印の國境紛争は、わが國の仲介によつて協調成らんとして居る。宜しく誠意あるわが解決に協力せしめねばならぬ。そこで、

六十四 同其の三 同日

檳城纜去入暹羅、迎我山河形勝多、

誰以旋乾轉坤手、好教兩國息兵戈、

檳城纜かに去つて暹羅に入り、我を迎ふるの山河形勝多し、

誰か旋乾轉坤の手を以て、好し兩國をして兵戈を息めしめん、

ピナンを去つて秦に入れば、我を迎へる山河は如何にも形勝である。わが國こそは東亞の盟主として兩國の兵火を息めさすべき使命を荷つてゐるといふのである。

折から白雲が簇々として生れ、機は高く一萬三千尺の上を飛んで居る。而して熱帶圈を脱したものが、清涼の氣が機中に満ちて居る。

六十五 同其の四 同日

高超炎界氣如霜、這裏乾坤轉爽涼、

一萬三千尺餘上、飄飄只見一機翔

高く炎界を超へて氣霜の如し、這裏の乾坤轉た爽涼たり、

一萬三千尺餘の上、飄飄として只だ見る一機の翔るを、

炎寰を脱してみると、氣は霜の如く、乾坤は極めて爽涼である。誰か知る、一萬三千尺の上をわが飛機の翔けるのをといふ氣持を直寫したのである。

先年バンコックからメダンへ飛んだ時も雲あり、風あり、一旦引返してから復た飛んだのであつた。

申雲飛艇斬天風、瞰視乾坤彷彿中、

爽快如斯未曾有、萬三千尺客如鴻、

といふのがその時の即吟であるが、今度はタイ灣の上で次のやうな句を吐いた。

六十六 同其の五日

菲才漫欲救時艱、萬里長征熱帶寰、
自喜冰心清瑩徹、水晶空路入暹灣、

菲才漫りに時艱を救はんと欲し、萬里長征す熱帶の寰、

自ら喜ぶ氷心清瑩徹、水晶の空路暹灣に入る、

私は不才ながら猶ほ時艱を救はんとして、甘んじて熱帯圈に落ちたが、泰國まで来てみると襟懷はその境と共に涼しくして、何のわだかまりもない。そこで、悠々として水晶の様な空路をシヤム灣に入つたといふのである。

二 バンコックの初日

飛行場には三井、三菱、正金等各方面の出迎を受けて、タイランド・ホテルに旅券の査證を托し、諸君に別れてから一路オリエンタル・ホテルに入り第三十九號の客となつた。此のホテルはメナン河に面し、女主人は瑞西人、私には舊知である。歴代の駐シヤム公使は單身赴任の人が多く、政尾君の如き酒豪もあつて痛快な書生々活をして居られたが、私が大正十一年バンコックへ來た時の公使矢田君は、夫人令嬢同伴で、公使館を尋ねてみると如何にも和かではあるが、家庭生活をするにしては設

備萬端不十分であるやうな氣がした。私は帝國公使館の威嚴を保つ爲めにも、これではいかんと思つたので、歸來これも舊友の埴原次官に面會して、修繕費を電送せしめた思ひ出もある。埴原君は夙に世を去り、日泰協會常務理事であつた矢田君も昨秋七十餘歳で急逝された。而して今や公使館も堂々たる設備となり、わが二見公使は此處に頑張つて、重要な時局に對處して居られるのは喜びに堪へない。ホテルに小憩の後公使館を訪ひ、二見公使を始め天田書記官や折から來館中の朝日青木君始め記者諸君とも會して、最近の事情を聴取した。それから正金、三菱を経て三井支店長宅に小憩し、これ亦新しく來着せられた多數の人々と語り、七時半二見公使に招かれて官邸で會食した。飯野武官、小谷三井君も列席された。二見公使とは二十年來の舊知のこと、て見ひ出話もはづんだが、有益な現況談に得るところ少くなかつた。かくてホテルへ歸つたのは十時近くであつた。

此の日、佛印、泰兩國はわが仲裁を容れ、午前十時を期して停戦となつたので、駐在武官田村大佐は私と入違ひにサイゴンへ飛び、海軍の中堂大佐も調停委員として現地へ出張の爲め、久しぶりの快談を聴くことの出來なかつたのは残念であつた。

三 バンコックの第二日と舊知との交驩

二十九日は快晴。六時起床。七時半三井中山君の東導で、國會議長ピヤ・マヌー君を訪ねた。彼も

舊知のこと、突然の來訪を喜んで迎へてくれた。それから大藏省にルアン・ブラジツト藏相、ドル顧問の兩君を訪問した。ブラジツト君は先年外務大臣の時に交を結んだが、その後大藏大臣に轉任、生憎く閣議中で席に居られなかつたが、ドル君は在廳中で微笑して迎へてくれた。彼は泰國財界に抜くべからざる勢力を持つて居る人だそうだが、話は卒直で四年前私が、

『御國は財政が堅實な黒字を示しつゝ、あることは喜びに堪へないが、國防費増加の懸念はありませんか。』

と訊ねたのに對して、

『國防費は歳出の二割五分を出ませんから心配はない、貨幣價值も安定して居ります。』

と答へたことを思ひ出して、

『現在はどうですか。』

と聞いてみると、

『私は自分の立場から申せば相當難局であるが、佛印との問題も早く解決を望んでゐます。』

と答へた。又、翌日外務省顧問で現在全權として來朝中のプリンス・バンバイと午食して三人大に語りたことであつたが、私の飛行機が定期に出たのでその機會は失はれた。

それから首相官邸にビブン首相兼外相を訪ふたが未だ閣議中とのことに、秘書官を通じて再會を約

し、續いて外相官邸にバイバイ顧問を訪問したがこれも不在、最後に前首相ビヤ・バボン君を訪れて一應の挨拶を終つた。

先年訪問の際にはビヤ・バホン首相、ブラジツト外相、ピア・マヌー國會議長、ビブン國防相、チヤオピア・シー經濟相等の諸君を始めプリンス・バンバイ、大藏顧問ドル、華僑總會頭蟻君等と會見して新興に燃んとするシャムを検討したが、當時の首相ピア・バホン君は退き、ブラジツト君は外相より藏相に移り、相當變化があつたが、支那人側に至つては時局の關係上近づくべくもない。

正午、三井に立寄つて高橋支配人等と支那料亭に午餐を共にしたが、此の間にハノイ行の査證も出來、飛行機もバンコックへ到着、三十日朝には定期出發とのことに萬事OKである。四時半トロカドロ・ホテルの一室に正金支配人の配慮で同社員、同文書院出身者等と午後のお茶を飲み、七時半ホテルに歸つて三井の村上君等と晚餐を共にし、公使館の天田領事の來訪を受け、メナン河に臨む芝生の上で夜は涼味を喫し、更に九時半から町に出て風光を探り、十一時一浴して尊に就いた。

四 泰國見たり聞いたり

泰國は經濟上から見れば米の國といふことが出來よう。即ち米作依存の經濟である。我々の食料として居る米に泰米や西貢米の多いことはよく人の知るところであつて、泰國が米の供給國としての位

置は重要なものである。國民の八割は豊業に従事し、時に豊凶の差はあるが、大體年産額は四百五六十萬噸に上つて居る。メナン河の定期氾濫によつて耕作の容易なこと、貿易風帯に屬して氣温高く雨量も多いこと、米に愛着心のあること、米が經濟力の源泉として重要視されて居ること等々、泰國の米作の盛んな理由は種々あるが、その耕作法を研究してみると未だ幼稚で、遙かにわが内地の生産率には及ばない。今後改良を加へるならば、更に相當の増産を見るべきことは明白である。

米に次で名高いのはチーク林である。チークは艦船材として好適なのみならず、列車の車輛、家具にも廣く用ひられ、日本始め各方面に輸出されて居る。平均年産額百四十萬本で、世界産額の六割五分を占むといはれ、この中八割は輸出される。綿花は夙にわが技師によつて指導され、現在も經營されつゝあるが、今日までのところ未だ十分な成績は上つてゐない。然し、之も土地の選定と經營の改善と相待つて將來有望なことは明瞭である。半島に屬するところにはゴムも作つて居る。わが栽培業者も共同で一農園を買収して之が經營に當り、私の知友が之に任じてゐる。現に年産四、五萬噸に及び近く六萬噸になるといふことで、當國のゴムの將來も亦相當有望と申さねばならない。現に輸出も米、チークに次いで第三位を占めて居るさうである。更に錫も亦重要産物の一であるが、鑛業に於ては英國系統が斷然優勢である。探掘會社六十の中、英國系三十八社、米國系十四社、泰國自身の資本によるものは僅か七社に過ぎない。鑛山の所有者を調べてみると歐米人が五割五分、泰人と華僑が四

割五分といふことになつて居るが、販賣は殆んど華僑の手にあつて、泰人はその利用に生きて居るといへる。即ち泰國の經濟的外國依存は英、米、華僑に在ることは嚴然たる事實であつて、此處に政治的の禍根も存するのである。泰國に於ける日本人の犠背と準備の不足とを、我々は反省せねばならぬ。我々はもつと泰國の爲めに貢献せねば、日本の優秀な位置を確實に把握することは難しい。東亞共榮圈の確立は犠背を離れてはあり得ない。我々は種子を蒔く人でありたい。努力の人でありたい。眞に東亞の盟主たるには實力を養ひ實行によるの外はない。

(二月二十八日認之)

(六) 黎明の國佛印の空を飛んで 六首

一 バンコックからハノイへ

三十日朝五時起床、六時三井三菱兩社員と自動車を連ねて出でて飛行場に着き、七時十分出發した。三井の高橋、村上、三菱の森、河合、正金の森、又一の松本、大朝の青木其の他諸君の見送りを感謝する。此處からは大日本航空の航路で、同乗の七人悉く同胞である。聞けば大朝の藤田君は飛行機の都合でバンコックに滞留十日、漸く此の機に乗ることが出来たとのこと、航空路は早いが時にはこんなこともあるのである。

機は悉ちにして上空に上り、壯快いふべからず、兩國兵を交へて居るメコン河の如もラオス、カンボチアの空もアンコール・ワットの舊蹟も總て雲の下で何も見へない。十一時西貢に着陸して休憩の間、所有金の申告や検査を受け、折から迎へられた三井の支店長や西貢から乗込まれた佐々本海軍中佐等と語る中に、十一時半再び機上の人となつた。北に進むに従つて次第に冷氣が加はる。思ふに私の佛印視察は大正十一年歐米からの歸途、バンコックから海路西貢を経てハイホンへ上陸し、ハノイに滞在したのが最初で早や二十年の昔となつたが、想ひ起すのは高月一郎君のことである。彼は明治

三十四年に東京帝大を卒業、東亞會以來の同志であつた。彼は志を支那に抱いてまづ南支に赴き、續いて佛印に目をつけハノイに居ること十數年、佛人と共同して漆の栽培を計劃し、歸つて私に相談された。當時佛印は門戸閉鎖の國として外資の入ることを好まず、邦人も手のつけやうがなかつたのであるが、私は之に賛意を表して同地に立寄り、ハノイを距る數十キロの山間に於ける候補地を視察し、歸つて牧野農商務大臣、石塚東拓總裁に進言して、略々その財源を得たから、彼は喜び勇んで現地に赴かんとしたのに不幸病に冒され、志を抱いたまゝ、空しく幽鬼と化したのである。爾來再び此の地を訪ふの機會を得なかつたが、今や時到着つて援蔣ルート遮斷の爲め皇軍の北部進駐となつたことは、定めし地下の彼も喜んで居ることであらう。

機上、當年の曾遊を思ふて幸に身猶ほ健、未だ遊に倦むことのない自己を見出して舊韻に次した。

六十七 バンコックを立つ 一月三十日

六句 加_レ五意氣振、 甘作天涯地角身、

鴻爪回頭經_レ廿載、 壯心愧作倦游人、

六句 五を加へて意氣振ひ、 甘じて作る天涯地角の身、

鴻爪頭を回らせば廿載を経て、 壯心倦遊の人たるを愧づ。

舊韻は「安南の月」と題して

世界を見渡しつ、

三踏萬邦氣愈振、天邊何處托斯身、
安南海外焚々月、曾照當年多恨人、

多恨の人とは申す迄もなく阿部仲磨卿を指したもので、彼は今から千二百二十餘年前、元正天皇の御代、留學生として唐に入り玄宗皇帝に仕ふること三十六年の後、歸朝せんとしたが途中颶風に遭ひ安南に漂着、有名な歌『天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』と詠じて郷愁を残り、再び唐に返つて累進、安南の都護使となつたのは皇紀千四百三十六年のことであつた。當時の安南は今日の安南ではなく、廣く廣東、廣西までをも含んで居たといふことである。

其の後平安朝時代、平城天皇の第三皇子高岳親王が法を求めて、古稀の御老齡を以て天竺へ赴かれる途中、今のラオスで虎害に遭つて薨去されたことも史實に残されてゐる。そこで次の詩が出来た。

六十八 安南の空を飛び 其の一 同

求法天孫虎害遭、安南更憶仲磨豪、
一千餘載雄蹤歷、寥廓無人踵兩髦、
法を求むるの天孫虎害に遭ふ、安南更に憶ふ仲磨の豪。
一千餘載雄蹤を歴、寥廓として人の兩髦を踵ぐなし。

二 日本町の懐古

西貢を出た飛行機は、間もなくツーランに着陸してガソリンの補給をした。

ツーラン灣の西南岸には日本町の遺跡があり、更にその南方三十キロのファイフォーには、今も日本橋通りがあつて、その通りの兩端には日本橋が残つてゐて來遠橋とも呼ばれて居る。申す迄もなくわが民族の南方發展は戰國時代の末から開け、沿海の諸侯や富豪等は盛んに貿易に従事し、特に秀吉は海外貿易を奨励したので、安南は勿論、カンボチャ、ルソンから遠くシヤム、蘭印に迄發展した。後、家康に至り一層之を盛んにし、所謂御朱印船を派遣する爲め、その保護と便利を彼國に依頼し、公然交通を開いたから同方面に於ける邦人の渡航は目覺ましいものがあつた。就中佛印が南洋貿易の中心となり、ツーランとファイフォーが御朱印船出入の要港となつた。名古屋の清妙寺には、茶屋の一族がツーランに入港して、船長が税關長に贈物をして挨拶してゐる圖が残つて居る。角屋七郎兵衛が故郷に送つた手紙の中にも、色々の日本町の名が記されてゐるが、寛永の鎖國以來漸く衰退して、西暦一六七六年頃には平野屋四郎兵衛が、

『當地の日本人は皆々相果て、唯二人のみになつて居る。』
と寂しい便りを祖國へ送つて居る。

以上は安南日本町の回顧であるが、邦人は深くカンボチャの奥へも進入して、今の首府ブノンベン沿岸と、舊都ウドンの外港ボネアルー邊りに及び、オランダ人の舊紀にも、此處に日本人、支那人、ポルトガル人等の家が軒を並べ、日本人町には約七八十戸もあつたといふ記事が残つて居る。かの有名なアンコール・ワットの大伽藍は、その周囲が三キロにも達して、日本人はこれを印度の祇園精舎の跡と誤り傳へて、遙々参詣したのもあつた。寺の中央の石柱には加藤清正の臣、森本一房が、寛永九年の正月、親の菩提を弔ふ爲め参詣して佛像を奉納した事を記した文字が残つて居る。かくの如く安南、カンボチャに於ける日本人の痕跡は多々あるが、安南政府と徳川幕府、續いて明治に入つての交渉も見逃してはならぬ。

現安南王朝は徳川家齊の時、西曆十九世紀の始め種々の便宜を圖つてくれた。後フランスがキリスト教徒迫害を名とし、安政五年即ち一八五八年にツーランを攻撃、西貢を占領し更にコチン・チャイナ及びトンキンを併せ、遂に明治十七年即ち一八八四年の條約で安南を完全に保護國として終つた。その後叛亂の絶間なかつたが、その鎮定したのは明治二十七八年の頃で、然もフランス人は安南人の心を捉へることが出来ず、屢々獨立運動が起り彼の潘佩珠がその中心となつた。潘は日本がロシアに勝つたといふ事實に目覺め、わが國の援助を求めて横濱へ來たのは明治三十八年彼が三十九歳の壯年時であつた。然し、わが國はフランスと協調するの方針であつたから、彼の求援に應ぜず、此の熱血

漢も空しく涙を吞んで去つたのである。その後彼は廣東に入つて劃策するところあつたが、遂に捕へられてハノイの牢獄にその生を終つた。然し、『安南人の安南』を標語とする運動は、依然繼續してゐるので、今次の皇軍佛印進駐後、經濟協定や泰、佛印協定その他わが威武の進展に伴つて、彼等も亦一轉機すべき時機に際會して居るのである。そこで仲鷹卿が安南都護として彼の國に莅まれたことから一言を加へたのである。悠久一千年の回想に一絶を吐いた。

六十九 同 其の二

會安郭外草含煙、順化城頭野布氈、

來遠橋、今何處在、思馳悠久一千年、

會安郭外草煙を含み、順化城頭野氈を布く。

來遠橋は今何の處にか在る、思は馳す悠久一千年。

今朝の新聞を見ると、泰、佛印協定は佛印側の逡巡によつて危機を孕んでゐることであるが、私はその内容には立入りたくない。唯だわが仲介が不調に終ることは斷じて許されぬことで、佛印は何處までもわが東亞共榮圈に含ませべきことを敢て主張し置く、又そうせねばならぬ。そこで、

七十 同 其の三

神力誰能劍一揮、斬蕪寰宇使無非、

世界を見渡しつ、

越南蘇北五旬日、抱持雄圖祖國歸、

神力誰か能く劍一揮せん、寰宇を斬蕪して非なからしめん。

越の南蘇の北五旬の日、雄圖を抱持して祖國に歸る。

この意味は読んで字の如く、今や世界は紛々として相争ひ止るところを知らない。誰が神力を奮つて之を戡定する者ぞ。越の南、蘇の北即ちスマトラから安南へと五旬の旅をして来たが、聊か雄圖を抱き持つて祖國に歸らんとするといふのであつて、安南の空を飛行した時の氣持ちを端的に露呈したものである。

此の詩は舊作

鼎力何人試一揮、風雲戰後世情非、

携將滿腹經綸志、客夢悠悠萬里歸、

に次したものである。

思へば此の詩を吐いてから二十年世界は益々混沌として歸結するところを知らない。憐むべきは人間の墮落である。何としてもわが皇國は、之が匡救に任せねばならぬ。然し、人がない。人を造ることが第一義である。私が此の小篇を公にするのも、人を造るべく、次代國民の奮起を促すの微志に他ならない。

三 仲麿卿の舊都ハノイへ

二時ツورانを出て、東京の平野を北に飛び、四時二十分ハノイ飛行場に下り立ち、直ちにエア・フランスの事務所で税關の検査を終へ、三井の増田、正金の濱中、臺拓の近江谷その他の諸君に迎へられ、直ちにホテル・メトロポール第百十五號室に入った後、近江谷君の東導で正金、三井等に挨拶を爲し、夜は銀座街の第一樓にコクテールの一杯を傾けつゝある際、臺灣南方協會の青年諸君來り會するあり、更にビールの満をひいて健康を祝し合つた。八時漸くホテルに歸つて近江谷君と共に晚餐、思ひ出の話が又はづんだ。彼は私の舊友の令息で、私が明治四十三年パリに滞在中、その父に伴はれて来たのが最初で、たしか十五、六歳の少年であつた。彼は歸國後シャルル・フキリツプを始め近代フランス文學の紹介をしたが、トルコ大使館囑託となり、後、私の關係して居る日土協會にも席を置いた。彼はフランス語に熟達して居るので、現在は臺拓の分身たる東印度産業會社の重役として、ハノイで活躍して居るのである。

ハノイはいふ迄もなく佛印の首府で、紅河の右岸に位し、唐には安南都護府が置かれ、阿部仲麿卿の駐在した處、第十六世紀の李王朝以來漸く盛んとなり陳王朝、黎王朝、相繼いで此處に都し、東京城と稱された歴史的都會である。ハノイと呼ぶやうになつたのは、その後のことで、フランスの保護

領化して、一九〇二年から總督の駐在するところとなつた。人口は十五、六萬といふところであらう。適々此の方面が援蔣ルートとなるに及び、わが南支派遣軍は昨年六月、フランス政府に對してルート遮断の申入れを爲し、フランスもこれに讓歩して、日本側から現地検査員を派遣してその實行を見届けることとなつたが、歐洲の大勢はフランスに非であつて、その本國の大半はドイツ軍の占領するところとなつたのに加へて、わが國は東亞新秩序の建設から東亞共榮圈の確立宣言となり、佛印も當然その中に含まれることとなつた。その結果、佛印は舊體制に依存するか、わが共榮圈に走せざるか、何れかに態度を決せねばならぬ次第となつたが、九月二十二日、日佛印交渉の結果、わが國は佛印に安全保證を與へると共に、皇軍の平和的進駐を見るに至つたのである。

四 ハノイの展望

ハノイの氣候は熱帯から來た者にとつては特に冷氣を覺へ、三十一日朝起き出て冬服に着替へ外套を纏つて漸く暖をとつた。八時臺拓足利君の東導で正金、三菱、大日本航空に夫々所用を辨じ、總領事館の渡邊副領事を訪ふて佛印政府官人への紹介を依頼し、十時臺拓に立寄り、今度は近江谷君の案内で西村部隊に長參謀長を訪ふて久瀧を叙して再會を約し、轉じて澄田機關を訪ふて同じく挨拶を爲し、十一時ホテルに歸つた。正午は同宿の伊藤忠、岩井、日本線花、江商、又一等大阪巨大商社の代

表諸君と午餐を共にして語つたが、之も亦得るところが少くなかつた。

午後三時澄田機關に重ねて小池大佐と語りつゝあつた際、日航から電話があつて、間もなく川原主任來訪、

『唯今來電あり、大本營の命により、來る五日發の飛行機が徵用さるることとなり、出發不能となりました。』

とのことに直ちに三菱に赴き、ハイフオンの大阪商船に電話して二月二日未明出帆のラブラタ丸船室を申込み、正金で必要の佛印貨を引出し、四時半ホテルに歸り、六時南拓の三上君、七時正金の濱中君等の來訪を受けて佛印の現情を聴取した。一方長參謀長、三井、臺拓に電話して明朝九時ハノイ發三菱自動車でハイフオンに向ふ旨報じ、八時同宿の岩井大島、日綿松本、江南村田の諸君等と晚餐を共にし、後相携へて街頭に映畫を鑑賞して、十時ホテルに歸り、一浴して十一時暮に就いてハノイの第二夜を終へた。

丁度西貢で泰佛印兩國の停戰協定が成立した前後のことであり、舊知の陸海軍武官はもとより總領事其の他も現地へ出掛けて居たので會へなかつた。佛印側も同様で、此の夏交換教授として來朝される筈の考古學者等と相語るを得たのみであつた。

佛印の印象を卒直に申せば、舊態依然たることである。例へばホテルへ泊つても、過去二十年間に

蘭印のそれは全く面目を一新して居るが、佛印では殆んど昔と變らない。之は客室、浴場、食堂、其の他室内の調度のみでなく帳場やボーイに就ても同様である。之は佛印の性格によるのもあらうが、甚だ遺憾である。佛印はフランスの君臨後既に六十年の歳月を経てゐるが、外資の侵入を防ぎ、外國人の企業を極端に阻止して居る。更にフランスがその開拓に當つても、佛印自體のことは考へず本國に必要な物資をのみに重點を置いた。かくて佛印は眠れる國、未開發の土地として今日に至つたのであるから、舊態依然たるは寧ろフランスの國策かも知れない。然し、佛印が東亞共榮圈の中に入る以上、今後は是非共活躍をして貰はねばならぬ。面目を一新していた、かねばならぬ。佛印が將來非常な發展性持つことは、天の配材ともいふべく、我々がその全面的開發に向つて努力を捧げねばならぬことをつく／＼考へさゝれたのである。

五 ハイフオンの半日

ラブラタ丸の出帆は二日未明とのことであるが、ハイフオンも亦一瞥の必要があり、一日午前五時起床、七時岩井大島君の來訪を受けて語り、八時半三菱の西方、牧山兩君の見送りを謝しつつ臺拓足利君の案内で、紅河^{カンホ}を渡り、平疇の間を過ぎると、水田が遠く相連り、村は村と接して、農民が村外づれの市場に群るのも見へる。途中にはわが軍の駐屯するところもあり、軍用自動車に會ふことも度

度で、皇軍の物資輸送と覺しき列車ともすれ違つた。葦ぶきの小さな家々の間に、堂々たる瓦ぶきの建築が見へるが、之は華僑の住宅であつて、彼等は市街地に於て商業的に優位を占めて居るのみならず、村落に於てもかくの如く、地主として、物資取扱者として有力なのである。然かも農民は嬉々として農耕にいそしんで居る。ホンホーの流は濁水滔々として幾回轉して居るので、兩三回、橋を渡つたのであつたが、南洋同様此の地でも青い稻田があるかと思ふと、黄色の刈取が迫つた所も見へる。途中一絶あり。

七十一 ハノイよりハイホンへ 二月一日

百里平疇一望平、庶民相促力^ニ勸耕、

紅河沓渺割^ニ天末、青稻黃禾忙^ニ送迎、

百里の平疇一望平かに、庶民相促して勸耕に力む。

紅河沓渺として天末を割し、青稻黃禾送迎忙がはし。

この實況を歌つたものである。

六 ハイフオンの夕

かくて大道を駛過する百キロ、十一時ハイフオンに着き、直ちに大阪商船事務所に若西主任を訪ふ

世界を見渡しつ、

て基隆迄の切符を求め、その案内で横山正修翁を訪ふて午餐を共にして語つた。翁は本年七十四歳、頗る元氣で自ら安南の主を以て任じ、鐵鑛業の經營と同胞の發展に献身されつゝある。翁と私とは多年の舊知で大正十一年にも親しく相語つた思ひ出があるが、佛印問題がやかましい今日、滯佛印四十年といふ經歷を持つ翁の如き人が頑張つて居ることは力強い。

それから三井物産出張所長を訪ね、二時半に再び商船事務所まで悪筆を揮ひ、四時、若西、足利その他の諸君に送られて、ホンホーの河心に碇泊して居るラブラタ丸に投じ、第十九號室に入つた。

ハイフオンもハノイと同様、餘り進歩は認められないが、物資の出入は援蔣ルートとなつてから頗る盛んとなつた。特にその北に在るホンゲイの無煙炭を始め、その他の鐵鑛、硅砂等も漸次わが邦人の手により開發せられて來たので、今後の發展が期待せられる。

ラブラタ丸はその名の示す通り、永く南米航路に就航して居た船で、近海航路には珍らしく大きく設備も良い。南米に永く關係を持つてゐる私としては、格段の心安さを感じるので、同船に上つてみると早や安息と靜思の好機が待つてゐるといふ感じが、しみじみ胸をうつて來るのである。税關の検査も、刑事の尾行もなく、全く日本の領海に入つたやうな氣持がする、特に佛語も安南語も解せない私には、日本船なる哉としみじみ思つたのであつた。

七十二 ラブラタ丸に搭す 二月二日

機艇三千里路馳、如今歸舵一心夷、

斯行不識胤何物、囊底纜存八十詩、

機艇三千里路を馳せ、如今歸舵一心夷かなり。

斯の行識らす何物か贏たる、囊底纜に存す八十詩。

詩の意味は忙しい飛行旅行をしたが、歸りの船に乗つてゐると、わが心地は極めて平和である。思ふに此の行、何ものを贏得たか、唯八十餘首が囊底に存して居るだけだといふのである。之は昭和九年第三回目の南米旅行を終へた時に歌つた。

雙鞅征南國、一貫布至誠、

歸來存底物、只曰詩囊輕、

と異句同調である。たゞその時の南米行は海興の主腦として、ブラジルが突如憲法を改正して外國人の入國を制限したので、急遽彼の國に赴いて之が是正緩和を圖らんとし、

丹心期報國、又上大荒舟、

天遠飛星燭、光芒萬里流、

と壁に題して祖國を立ち、直ちにブラジルに渡つて大統領その他と會し、又サンパウロの南北を視察して猶ほ爲すべきの餘地あるを感じ、心廣く體胖かに歸つて來た。即ち至誠を布くところ事遂に成

るといふ信念を以て歸つたのである。今次はその當時とは趣きを異にするが、蘭印の交渉に就ても、對佛印の協定に就ても、至誠の一貫するところ必ずや通するといふ眞理に變りはない。此の信念に立つ私は、やはり心廣く體胖かな感を抱いて歸舟に上つたのであつた。

同船には鹽水港の岡田社長、日本窒素の野口第二世等あり、何かと歡談を試みたのも船中消閑の一時の喜びであつた。

(三月一日認之)

(七) 日本色濃き海南島を掠めて臺灣へ

一 海口を掠む

二日の夕景色は、何ともいへぬものであつた。夕陽が西に没するところ、海面一帯に紅色を呈し、飛ぶ鳥が遠き彼方に没し去るところ獨り舷頭に立つて長嘯してみると、六十日間に五州の空を踏み破つて、今夕は歸東の船に上つて意氣特に雄なるものがある。

七十三 舷頭の感 二月二日

六旬踏破五州中、今夕歸帆意氣雄、

昂首舷頭試長嘯、飛鴻滅没夕陽紅、

六旬踏み破る五州の中、今夕歸帆意氣雄なり。

首を昂げて舷頭長嘯を試みば、飛鴻滅没して夕陽紅なり。

三日未明、二百二十哩を航海して、海口沖合に投錨した。朝食後、岡田君一行は上陸し、代つて海軍慰問團の一行並びに三等船客百二十餘名が乗船したので大いに賑つた。慰問團長古田中大佐の説明によれば、長谷川時雨女史は病氣の爲め一行と別れて臺北に飛行したが、一行中三名の女性は作家と

歌手であつて、上田萬年博士の令嬢も居られるとのことであつた。船は之から一層楽しくなることであらう。

栗本領事は同文書院出身者であるから、無遠慮に電報して置いたところ、あの乗降が難しく、或る場合は危険でさへある荒波を渡つて、わざ／＼船まで來られたので、約一時間に亘つて最近の事情を聞いた。總領事館囑託の市原君も亦來訪されたので、農業經營の實際に就ても聞き囁ることが出來た。海南島が我々の注目の的となつたのは、決して新しいことではない。明石大將の臺灣總督時代から田總督時代に及んで、私は之が調査に就ては進言するところがあつた。土地は痩せてゐるといふが改良の餘地は十分あり、努力さへすれば適當な農産物を生育することは決して難事ではない。私の關係方面でも、既に土地を租借して經營に手を着けんとして居る。各會社の計劃も多々あり、地下の埋藏資源も少なくはない。現に野口第二世の話によれば、南部では既に鐵礦の採掘にかゝつて居るといふことである。海南島の經營が、臺灣のそれと密接な關係あることは申す迄もない。人も資も臺灣を據點として送られつゝあるので、今後の開發は漸次その緒に就くであらう。

栗本領事から近く大角大將が廣東から飛來されると聞いたので、名刺を托して同大將の健康を祈つたのであるが、此の日を去る僅かに三日、六日臺北に入つてみるとその訃報が傳へられてゐる。即ち大將を乗せた飛行機は五日廣東を去つて間もなく、黃楊山に於て遭難、續いて七日には一行悉く殉職

せられたことが明白になつた。大將と私とは攻玉社時代、山本英輔大將と共に同級であつたが、私が明治廿六年二月海軍兵學校機關生徒を命ぜられた爲め半年先んじて入學、間もなく私は横須賀に新設された海軍機關學校へ收容された爲め江田島に別れを告げたけれども、後フランスにても相會し、明治四十三年ドイツ滯在中には野村大將と共に屢々相飲み、相語つて爾我の交をなし來つたものである。私が今次旅行に出發する前にも、同大將と會して對米、對南問題に就て意見を交換したのであつた。同大將は近く滿六十五歳を迎へて停年となり、五十年に近い海軍生活から功成り名遂げて引退される筈であつたが、その直前薨去されたのは、國家の爲めにも惜しんで餘りがある。

七十四 大角大將を悼む

丹心 心誓 壯皇猷、飛翼 瘴煙 疊霧 陬、

恨殺 將星 天外 墜、黃楊 山上 鬼 啾 啾、

丹心 心に誓つて皇猷を壯にせんことを、翼を飛ばす瘴煙疊霧の陬。

恨殺す將星天外に墜ち、黃楊山上鬼啾啾たり。

正午出帆して直ちに東に向ふ。船中ヒットラーの語録、大谷師の蘭印地誌等を読み、倦み來れば則ち舷頭に嘯くのであつた。

七十五 臺灣に入る 二月五日夜

世界を見渡しつゝ、

蘭佛印連從泰邦、一翔銀翼度天虹、
六旬水宿雲程遠、歸泊臺灣帶月艘、

蘭佛印は泰邦より連り、一翔銀翼天虹を渡る。

六旬の水宿雲程遠く、歸泊す臺灣帶月の艘。

丁度此の夕、波は靜かに、船は陸を往くが如く、況んや蘭印、馬來、泰、佛印諸國を歴遊して支那海に浮べば、わが領海の心地がして、悠々たる客夢の中に早や、臺灣も眞近いのである。

二 南支那海上の生活

四日正午で海口から二百七十六哩、モンsoonの風が吹きすさんだ後で、東航するに従つて波は益益靜かとなり、五日正午には澎湖島沖を北に越へ、厦門の沖を東し、一路東北を指して居たが、夕刻には臺灣の燈臺を遙か右に、十時淡水沖を経て夜半基隆に入港したのであつた。

海口からは乗客が多かつたが、却つて談客乏しく、多くは獨り船室に在つて讀書に時を過し、思は遠く天地有形の外に馳せたのであつた。適々舊知、林安繁君の隨筆を手にして、その襟懷を偲び、彼が臺電社長なので若し臺北に在るならばと思つて、一電を寄せたところ、間もなく大阪出張中との返電があつた。夕食後事務長の希望に應じて惡筆を揮つた後、村田讀賣君の新著『宋美齡』を面白く讀

みつ、夜を更した。尊に入つてから長男が印度洋上から、

『インドヨウキカウチユウ、ゴケンコウライノル』

といふ電報が來た。彼は來る二十日過神戸へ着くのであらう。

三 基隆へ、臺北へ、草山へ

六日午前〇時基隆港外に投錨したわがラブラタ丸は、天明を待つて入港するのである。

早曉起床して七時半朝食、八時半検査並びに旅券検査型の如く、十時内港に入り三菱、臺銀、明葉等の出迎を受け、三菱のランチで他に先だつて上陸、南協支部の伊藤君等を加へて十一時十五分發の列車に投じた。大阪商船、臺銀等主腦部の見送りを謝す。車中の會話も楽しく十二時十分臺北着、臺銀有本君等の出迎を受け、まづ鐵道ホテルに寄つて訪問の順序を案じた後、明治、西君の東導で大日本航空に車を馳せ、來る十日の東京行切符を求め、更に念の爲め商船支店長を訪ふて、十一日出帆の高千穂丸の部屋をブツクして萬一を備へた後、ホテルに歸つて三菱の招待で南協、臺銀の外、舊友池田君等を加へて會食し、二時長谷川總督を訪ねた。總督は私のラブラタ丸乗船のことを知り、午餐の用意がしてあつたが、

『着北は四時頃と聞いてゐるが、早かつたですな。』

世界を見渡しつ、

と言はれた。此の日は丁度李健公殿下御一行並びに小林前總督一行が、大和丸で基隆着の豫定である。總督は御出迎申上げる爲め基隆へ行かれるといふので、三時辭去し、之も舊知の軍司令官本間中將を訪ふて、卒直に對南方針を語り、續いて臺灣日々に河村社長、臺電に田端副社長、臺拓に加藤、久宗正副社長、三井に山田支店長、臺銀に和田副頭取、成田理事を歴訪して明治商店に立寄り支店長等と語り、臺灣南方協會の今川君、臺灣新聞等に電話して所用を辨じ、南菜園に兒玉將軍の舊跡を偲んで一路草山温泉の臺銀俱樂部へ入つたのは午後六時頃であつた。

臺銀俱樂部は草山の中腹に位し、地形幽邃眼前は鬱々たる密林に覆はれて居る紗帽山を仰ぎ、遙かに淡水の流を雲霧の底に望み、又庭前には今や盛りの桃の花や阜月の花を眺め、絶好の風光であるのみならず、建物は新しく且つ純日本式で、木の香も猶ほ馨しく、温泉は晝夜を分たず浴槽に注がれて居て俗塵到らず、全くの仙境である。是より先基隆で臺銀の支店長から、臺北では草山の俱樂部を利用してはとのこと、打悪しく鐵道ホテルも満員であつたので、その好意に甘へること、したのである。此日は大角大將の計を聞いたのみならず、池田君によつて是れ亦多年の然も同郷の友である田邊輝雄君の急逝を聞いたのも、旅の惱みの一つであつた。田邊君は明治三十六年帝大卒業後、間もなく上海に渡り、後、日華紡績を主宰し、或は會議所の會頭として、或は日本人會長として、上海に於ける幾萬同胞の代表的人物の一人であつた。大將は私とは同年、田邊君は三四歳の弟分であつたと思ふが、

本當に惜しいことである。

四 草山の朝夕

國際情勢の緊迫をよそに、のどかな草山の自然境に入つてみると、之は又何といふ平和さがあるのであらうか。淡水の流には夕陽が落ち、草山の峯上には新月が懸つて居る。千里炎園から來た私が、此の夕・山莊に入れば全く意の自如たるものがある。

七十六 草山の亦樂山莊 其の一 二月六日

淡水河心落照餘、草山峯角月月初、

有人遠到從炎園、一浴温泉意綽如、

淡水の河心落照の餘、草山の峯角月明の初。

人あり遠く炎園より到り、温泉に一浴して意綽如たり。

又翠の光り、花の影が窓前に落ちるのを眺めつ、朝に誦し暮に吟じてみると、詩味鮮かなるものがある。然も温泉に浴して心は水の如く清く、如何にも爽涼たる天地で、仙人のやうな心地があるのである。そこで、

七十七 同 其の二 同日

世界を見渡しつ、

翠光紅影入窓連、朝誦暮吟詩幾篇、
一浴溫泉心地爽、征人回首骨頭仙、

翠光紅影窓に入つて連り、朝誦暮吟詩幾篇。

溫泉に一浴して心地爽かに、征人首を回らせば骨頭仙なり。

フト床の間を見ると大西郷先生の有名な絶句、

幾歴辛酸志初堅、丈夫玉碎愧輒全、

一家遺事人知否、不爲兒孫買美田、

の一軸が懸けられて居る。男子の襟懷はその通りでなければならぬ。然も私は西郷先生の長逝を越へること十五歳の世の所謂老境に入つて、何等爲すなきを耻ぢ入る次第である。たゞ喜ぶところは先生の驥尾に附して、利も名も軽きこと沫の如く、先生の遺志を繼いだ荒尾先生の遺業を紹がんとして居ることは自ら省みてありがたい、私の素志は亞細亞を興すに在る。私が最近三年間に三回支那に遊び、二回朝鮮に遊び又第二十何回目の南方旅行をして來たのも、此の境地に安住して此の志を遂げんが爲めである。そこで先生の玉韻に攀ぢて、

七十八 南洲翁玉韻に次す 二月七日

盤錯經來百鍊堅、六旬一笑旅程全、

朝名市利營營外、志在興東不在田、

盤錯經ち來つて百鍊堅く、六旬一笑旅程全たし。

朝名市利營營の外、志は興東に在つて田に在らず。

と嘯いたのであつた。

五 臺北の第二日

七日朝七時起床、一浴して八時朝食、揮毫をした後、出迎の西君と十時俱樂部を出で、まづ臺灣神社に詣で、祖國の安泰を祈り、明石大將の墓を経て、復た南菜園に兒玉將軍を偲んだ。明石大將とは韓國時代の舊知で、彼は參謀長私は宮内府書記官お互に相許すところあつた仲であり、彼を禪に導いたのも私である。彼が僅かに五十六歳の若さで身を南方に捧げたのは、多年殉國の犠牲となつもので、その志は壯烈であつた。彼の肉體は福岡の病院で歸らぬ旅路に就いたが、その遺骨を臺北に納めて永く南方の鎮としたのは、その本懐とする所であらう。昨年六月北支から歸朝の船中彼の傳記を讀んで一詩を賦した。それは、

天涯浪跡幾經秋、男子豈爲名利求、

世界を見渡しつ、

志業未酬身漸老、濤聲夜半使人愁、

といふのであつた。人間は常に自ら省み、自ら戒め自ら勵ますことによつて永遠の生命を獲得し、名利以外の天地に逍遙し得るのではないか。明治四十三年遠くスコツランドのエヂンバラのホテルで彼を思ひ、次の詩を贈つて日韓併合の交渉は談笑の間に行へ、兵を動かしてはならぬと言つたこともあつた。

客窓今夜眠難成、杯酒傾來感更生、

聞説鷄林當有事、勸君容易勿行兵、

といふのがその時の詩であるが、之は併合前々日とかに彼の許へ着いたさうである。彼は私が南方開拓の意志あることを喜び、愈々南洋企業決行といふ時には第一に賛成して呉れたのも思ひ出の種である。その彼が大正に入つて臺灣總督となつて、大に經綸を行はんとしたのであるが、不幸中道に夭折したのである。

兒玉將軍との縁は薄いが、これもないとは言へない。明治三十六年秋歐洲から歸つた私は、間もなく犬養先生からシヤムの顧問となることを勧められ、その事が當時の兒玉總督の耳にも入り、臺灣總督府の關係を以てシヤムに赴任する筈であつた。然し、之には一つの條件があつて、日露開戦となればシヤム行はお断りする、東亞同文會設立の第二目標にある通り、私は韓半島に渡らねばならんと申

して置いたのであつた。ところが、日露の風雲は愈々急となり、同年冬私が京城滞在中、兒玉將軍も總督から參謀次長となつて東京に歸還されたのであつた。日露戦後も將軍を時々お訪ねしたが、或る日朝鮮から持歸つた鶴一羽を將軍邸に齎したことを覚えて居る。その時、將軍は病臥中で吸入をされつゝ、あつたが、親しく私をその寢室に呼入れて種々韓國に就ての話があつた。それから幾干もなくて、これも五十六歳の若さで薨去されたのであつて。英雄を思ひ、故人を偲んでその墓を弔ふことは、常に私の旅行中の行事の一であるが、今亦南菜園を訪ねて將軍を想ふたのである。園は極めて瀟洒たる茸ぶきの日本式建物で、將軍手植の木もあり、將軍の寫眞や筆蹟があつた部屋、この廊下にかゝつて居る。

それから建功神社に故忠士を弔ひ、轉じて總督に部局長を訪ね、正午ホテルに入つて折から來臺中の小林前總督に挨拶し、南協支部長の松岡殖産局長等と會食、二時南方協會を経て府博物館に堀川君の案内で、特に古文書に目を曝し、オランダの臺灣占領時代のゼイランジャ城の古趾から支那の經略、鄭成功の獨立に及び、明治に入つては七年の西郷從道將軍の征伐から、明治二十八年の領臺前後の事蹟に眼と心を傾けた。

思へば私は領臺當時に臺灣へ渡つた一人で、二十八年の十月、荒尾先生の紹介により時の參謀次長川上將軍の好意で陸軍通譯として埔里社に入つて蠻民撫育に従ひ、約半年を蠻界に過したのであつた。

當時の人々は次第に贅を易へるが、残つて居る者も猶ほ十數名はあらう。此等の人々が舊雨會なるものを作り、領臺紀念日に毎年一回づゝ會合して舊雨を談するのである。適々明治四十年渡臺の伊藤公が臺北雜詠の一として咏まれた七律が壁間に掲げられ、その石刷を堀川君から貰つた。

際會風雲從六龍、宣敷皇化納南賓、

百年草木霑新澤、千里江山脫舊封、

淡水西流入蓬嶋、玉峯北向拜芙蓉、

鄭家遺跡今何在、只見孤墳沒野榕、

といふのである。伊藤の統監時代、私はその幕下にあつて宮中改革の任に當つたのみならず、明治四十二年秋公がハルピンに遭難せらるゝや、その國葬日に當り皇帝が國民を戒める大詔を發せられたが、その下書は實は私の筆に成つたのであつた。そこで、未熟ながら公の韻に次して一律をものした。

七十九 春畝公つ七律瑤韻に次す 二月八日

機熟風雲起臥龍、挺身誰揮活人鋒、

南隣早晚霑皇化、禹域應披舊霧封、

駿太海連東海水、須羅摩拜玉芙蓉、

如斯時運是天意、喜看旭旗飄太榕、

機熟して風雲臥龍を起し、挺身誰か活人の鋒を揮はん。

南隣早晚皇化に霑ひ、禹域應さに舊霧の封を披くべし。

駿太の海は東海の水に連り、須羅摩は玉芙蓉を拜す。

斯の如きの時運は是れ天意、喜び看る旭旗の太榕に飄るを。

公は領臺後、皇太子殿下のお供をして渡臺されたので、かやうな句が出来たのであらうが、爾來三十幾春秋、わが皇威は遠く南方に及び、又支那事變により汪政權の成立となつて禹域も舊態を脱せんとして居る。公は淡水西に流れて蓬嶋に入り、玉峯北に向つて芙蓉を拜すと申されたが、ジャバとスマトラの海峡たるスングの水は直ちに東海に連り、ジャバ第一のスラマの山は遙かに富士山を拜して居る。皇風は臺灣から遠く蘭印に及ばんとして居るのである。時至つて誰が草蘆を出で、國家を荷ふものぞ、今や風雲臥龍を起すの時、宜しく身を挺して活人の鋒を揮ふべきではないか。そこで公は鄭家の遺跡今何在や、只見孤墳の野榕に没して居るのを見ると言はれたが、私は思ふ、かやうにわが國威が發揚し東西に光輝を放つのは天意である。旭旗は現に佛印の大きな榕樹の上にも翻つてゐるのだと歌つたのである。

即興の句、もとより體を成さないが、自然に流露する氣持を察して貰ひたいのである。

四時臺灣新聞社長松岡君と會し、新に商工頭取になつた荒木君に、西君を加へて四人同乗北投の大

世界を見渡しつゝ、

和に入つて、大いに喰ひ且つ語つた。松岡君は七十餘の老齡ながら、夙に圖南の志を抱き、曾てフキリツピンに企業を起し、又南洋に船を浮べて國民の耳目を南方に向け、孜孜として倦まざる臺灣の持つ最長老であり、私の最も親しき舊友の一人である。昨年八月私がラヂオの放送を試みた晩、時間外の電報を以て感激の言葉を送つてくれた第一番は彼であつた。今次も彼はわざわざ臺中より來られたので、適々來合せた荒木君と共に一夜の交驛をしたのであつた。

此の樓は四年前にも同君と一夜の歡を共にしたのであるが、思ひ出すのは先輩田健治郎男のことである。男は明石大將の後を享け、初代の文官總督として赴任せられ、地震内閣の農商務大臣に任ぜられる迄、四年間總督の印綬を帯びて居られた。大正八年南洋からの歸途廣東滯在中、總督の勸誘によつて二十年振りに高砂の土を踏んで官邸の客となつた。總督は官邸の後庭に新に建てられた。閑雅なる日本間に夫人と共に起居されてゐたので、私は廣い二階の間に一人起臥したことは今も忘れないところである。當時臺灣銀行の頭取は中川翁であり、總督秘書官松本君、吾妻屋の女將、梅屋敷の女將も共に丹波の出身なので、梅屋敷に一同相會して丹波の思ひ出を語つたことも忘れない。北投溫泉に投じて、

結髮當年意氣雄、一天邊何處樹殊功、
七星山下暫留轡、一浴神飛六合中、

と詠じたのもその時であり、田男には次の詩を寄せたのであつた。

蔚然靈氣我公鐘、風格英豪不可蹤、
會座廟堂更舊政、又依欽命治新封、
黑潮萬里連南海、白岳千秋向玉蓉、
何日功成名遂後、一竿風月赤松從、

大和での會合は楽しく、別れが惜しかつたが、明日のこともあり九時去つて山莊に入り、十時半尊に就いて臺北の第二日を平穩裡に終つた。

六 總督官邸の小集と晚餐

八日は天曇れるも未だ雨ならず、七時半起床、例によつて一浴朝食して草山の風光を味ひ、十時西君の迎を受けて十一時第二高等女學校に至り、生徒約七百餘名に對し一時間餘に亙る講話を試みて、次代の母たる若き娘を勵まし、十二時半三井の山田支店長に招かれて新喜樂に午餐を共にして相語り、二時半約を踏んで總督官邸に赴き、まづ長谷川總督と語り、同四十分より五時に至る約二時間餘に亙つて參集の局課長二十餘名に對し、南洋の現情勢に就て講話を試みた。是は總督の希望に依るもので、南方の開拓に最も縁故の深い殖産局が折悪しく部長會議中で參會せられなかつたのが遺憾であつた、

然し總督始め一同熱心に傾聴せられ、講演終つて質問應答をしたのであつた。

局課長散じた後、總督と復た對座、内外の事情に就て意見を交換し、六時から晚餐に移つた。丁度此の日内地から新着の荒木海軍中將（石川島造船所長に就任豫定の人）加藤臺拓、河村臺灣日々兩社長、田端臺電副社長、和田臺銀副頭取、今川南方協會理事長、石井内務局長並びに總督秘書官等の少數であつたが、席上話題は盡きず、七時宴を閉ぢて再び應接室で歡談、八時漸く別れて草山へ歸つた。

昭和十一年には臺北着の即夜、小林總督の晩餐會あり、之には軍司令官始め各局長が參列され、終つて約一時間に互つて講話を試みたのであつたが、今次は時勢の要求もあると見へ、特に官邸に於て課長以上多數の幹部を集合せしめ、講話を要求されたのであつて、臺灣が南方の據點として更に一進展してゐることの一反映とも見られないこともない。特に南方協會が成立し、數百萬圓の資金を醸め得て南方拓土の養成その他に力強い歩みを踏み出したことは、三十年前に總督府と協議の下にその後援によつて成立した南洋協會創立者の一人として極めて愉快なことである。臺拓は創立四年にして、或は海南島に、或は佛印に、或は馬來に進出して活潑なる運動を開始しつゝあることも、之れ亦創立委員の一人として私の喜びとするところでなければならぬ。河村君が十數年に互つて、臺灣言論界の主腦として活躍されて居ること、久しく殖産局長として南洋協會理事長として貢獻された田端君が、舊友林君の下に臺電副社長として臺灣産業の基礎工事に盡力されつゝあること、知事として專賣局長

官として南方に永い經驗のある今川君が南方協會を運営し、南洋各地に於ける出張員と相待つてその目的達成に努めつゝあること等總て私の心から祝福して止まないところである。臺銀は柳生君を初代頭取として南方發展の任務を以て生れたのであるが、財界の不況に依る苦闘時代を経、今日では漸くその本來の使命に強き歩みを踏み出しつゝあることも之れ亦私の喜びとするところである。臺電社長林君、臺銀頭取の水津君が東上中で姿を見せられなかつたのは残念であつたが、私は諸君が總督府の方針の下に今後夫々の任務に於て南方經營に歩武を進められることを期待した次第であつた。かくて一浴、十時就寢臺北の第三日を送つた。

七 第四日の三小集

九日午前中は入浴と靜思と讀書に珍しく靜かな半日を消し、午食後別れを草山に告げ、兩君の東導で今度は臺北南門の臺銀俱樂部へ入つた。明朝の出發が早い爲めである。折から待機中の女子大出身櫻楓會員二十餘名の小集に招かれ、席定つて私から約一時間に互る講話を爲し、茶菓を喫して名残り惜しみながら四時散會した。昭和十一年の時には山縣内務局長の官舎で、櫻楓會員數十名の參集があつたが、今次は急のことでもあり、又私の希望もあつて此の少數に止めたのである。

それから鐵道ホテルの郷友會に列した。長老堀内博士は在臺北四十餘年に互り、恐らく在臺同胞中

最長老の一人であらう。その他、郷を丹波とする者十餘名、官吏あり、教育家あり、事業家あり、新知あり、舊識あり、私が一場の拶揆を述べてから、隔意なく語り會つて時の移るを覺えず、六時半漸く散會した。

郷友會を終へると匂々次の梅屋敷の集りへ向つた。之は河村社長の招待晚餐會である。集る者臺拓の加藤、久宗正副社長、田端臺電副社長、和田臺銀副頭取、今川南方理事長、有田華南副總理等で特に來臺中の後宮老も參會せられて主客十名、いづれも數十年來の知人のこと、て興湧くが如く、例によつて揮毫を試み、一同歡を盡して九時半散會、歸つて臺北最後の夜を南門臺銀俱樂部に過したわけである。

草山の三夜は近頃快適のものであつた。何といつても臺灣は親しみ深い。前に申した通り日清戰役中、臺灣に渡つた連中が舊雨會といふものを東京で組織し、毎年一回領臺紀念日に集つてゐるが、會員は年々減つてもう十數名になつて終つた。私は當年の最年少者として、幸に健康に恵まれ、かうして屢々南方の土を踏むことが出来るが、思ひ出はしみくくと盡きぬものがある。臺灣よ、わが南方の據點として健在なれといふやうな念願が、心の底から湧くのである。

(八) 祖國へ歸る

一 臺北から福岡へ

十日朝四時半起床、五時西君來訪、コーヒの一杯を傾け、六時臺銀俱樂部を出で、七時十五分發の飛行機で那覇へ向つた。折からの細雨に霧も加つたが、斷雲の間から下界を覗くことが出来た。臺北那覇間僅かに七百キロ、九時半着の豫定が十時になつても、十時半になつても琉球の鳥影すら見え、却つて機の方角轉換をして居る模様がある。適々坐席にあつた二人の關係者らしい人が運轉室に入つたが、その儘出て來ない、乗客一向不安に襲はれたが、十一時頃やつと鳥影を發見して安心する中に、十一時二十分定期の倍の時間を費して漸く那覇に着陸した。聞けば方向を違へて遠く東南に向ひ、迂回して那覇に着いたとのことで、我々乗客よりも飛行場の人々が大變心配したとのことであつた、さもあらう。無電の連絡が一時絶へたといふことである。數日前大角大將一行が遭難されたことを思へば、遅刻だけですんだのは、まづ幸運と申さねばなるまい。

飛行機は小さい上に寒くて、窓に當る雨水が氷結して展望するすべもない有様、讀書にも倦んで珍らしく外套に顔を埋めて眠つたので、こんな詩が出来た。

世界を見渡しつ、

八十 臺北より東京へ 二月十日

萬三千尺關蒼穹、飛艇飄隼人似鴻、
窓外無端天降雪、姑成溫袍晏眠翁、

これは實感である。

那覇から福岡へは九百十キロ、今度は順調な飛行を續けて、午後三時過ぎ雁ノ巢に着陸した。勿論、機が遅れたので連絡はなかつたが、關東方面も珍らしい降雪で、二時の定期は缺航となつたとのこと、何れにしても十日中の着京は不可能である。そこで、四時十五分の準急行で門司へ直行した。七時下關着、山陽ホテルのグリルで夕飯をすまし、八時半の富士に乗ることが出来、間もなく寢臺の一空席を得たので安臥、九日以來の睡眠不足を補つた。

二 東京へ

十一日は紀元の佳節である。神戸で天全く明け、近江路に入ると白雪が山々を埋めて居るのみならず、沿道も到る處に残雪を認め、折からの朝日に映じて如何にも爽々しい朝であつた。適々關ヶ原を過ぎて一句を吐いた。

八十一 古關を照らす 二月十一日

志在濟民豈問艱、訪將災帶各邦還、
膽吹嶺雪車窓外、一白玲瓏照古關、

東海道を通つて關ヶ原を過ぐる時には、いつも當年の戦跡を偲ぶのが例で、大正六年三月南洋へ向はんとして、やはり残雪の關ヶ原附近を通過、斑々たる残雪を踏んで心ない少女が酒を提げて家路に着くのを認めたので、

龍拏虎擲亂雲間、時逝興亡跡自閑、
殘雪斑斑古驛夕、無心少女買醇還、

と歌つたことがあるが、之と同韻を踏んでみたわけである。

詩の意味は私の志は濟民に在つて艱きを知らない、南洋各地を歴遊して歸つて來てみると噫々たる白雪が窓に映じて來る。而して其處は關ヶ原であつたといふのである。

間もなく午前九時とあつて、車中一同起立して東方を拜し、聖壽の萬歳と皇國の隆昌を祈つたが、沿道の村村は戸毎に日章旗が翻つて残雪を照らし、その好風景も亦私の心を怡ばしめるもの一つであつた。

八十二 車中帝京を拜す 同日

天霽連山皓雪明、東風驛路旭旗輕、

世界を見渡しつ、

心祈皇統無窮祚、齊立全車拜帝京、

參遠も瞬時に越へ、駿に入つて左に富岳を仰ぎ、右に興津の灣を眺めつ、一路東京に着いたのは午後三時三十五分の定刻で、家族や舊知に迎へられ、直ちに目白の五禱莊に入つたが、出迎人の中には長孫も在つた。

此の行十二月十一日家を出でて、二月十一日に歸蔵。此の間僅か二ヶ月の飛脚旅行に過ぎないが、猶ほ西太平洋を渡りジャバ、スマトラ、馬來、泰、佛印、海南島、臺灣等の所謂わが南方圏を一巡し得たのは、一に文明利器の賜物である。飛行旅行第一、汽船第二、自動車第三、汽車第四といふ順序で利用した今次の旅行は、全く文字通りの飛脚旅行であつたが、飛行機のお影で此の短日月に此の範圍を踏破することが出来たのであつた。以上八十二詩を繞る環境と襟懷とを據べて本編を終へることとした。

(三月一日記之)

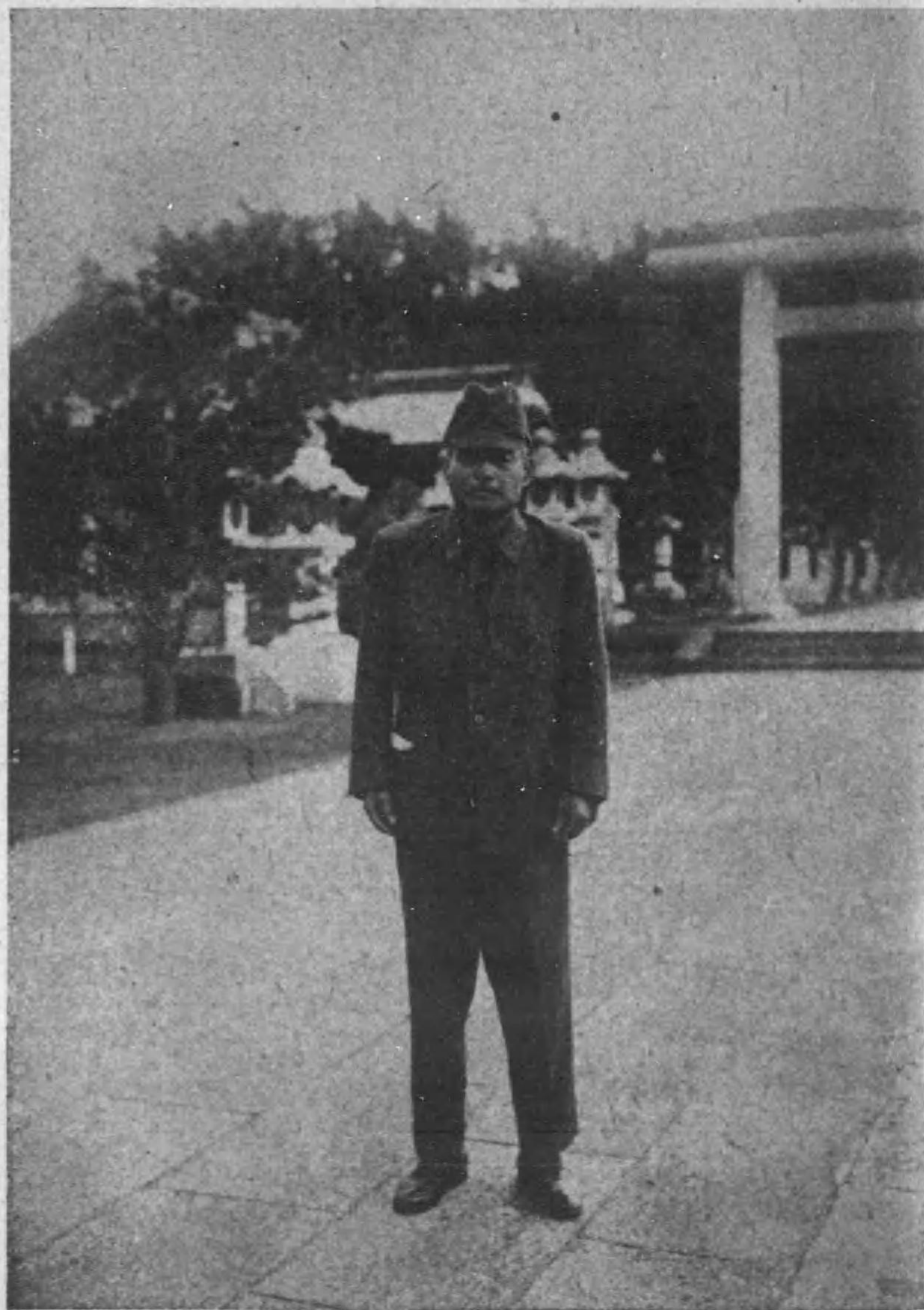
(九) 結び

舊臘十二月十一日に帝都を出で、西太平洋を渡り、ジャバ、スマトラ、英領馬來、泰、佛印、海南島、臺灣を経て紀元の佳節に復た目白五禱莊の人となつて茲に三週間、政府の要路と語り、又各方面の要請によつて所信の一端を披瀝すること二十數回に及んだのであるが、多くは私の信するところに共鳴されるやうである。

皇國の將來は固より洋々としてその使命の達成は疑はない。然し、之が爲めには冒頭に申述べた通り、深く自らを養ひ、自力のみが克く萬難を打開するものたることを念とせねばならぬ。泰、佛印停戦協定成るの日、バンコックを立つてハノイに出たのであるが、ハノイは汪精衛君が重慶を脱出して、和平親日の旗を翻し、四億の支那民衆に向つて呼びかけたところ、わが皇軍の進駐となつて援蔣ルートに完全に遮斷し、次でわが政府と汪政権との協定成り、互に使節を交換して東亞新秩序建設に邁進しつゝあるのである。大東亞共榮圏の確立も歩、一步と進捗して泰、佛印の協定新に成つて、泰國は申す迄もなく、佛印も亦わが指導下にその開發を進めなければならぬ情勢に立至つて居る。眼を更に南に轉すれば、日蘭の交渉は幾多の難關を豫想されつゝも、わが國の平和的意圖は彼の心底をうたねばならぬ。即ちその交渉の前途には、相互の理解と友情とによつて必ず解決の途がなければならぬ

世界を見渡しつゝ、

（昭和六十一年秋）臺神社參拜の上井氏



のである。歸朝以來、私の感得したところは、彼地に在つて感得した如く必ず打開の道を索めねばならぬと云ふことである。

此の片々たる小著は言簡にして意盡さず、何等世間を啓發する底のものではないが、一億一心此の難局を打開する爲めには、各々その職域に應じ、自己の體得するところを以て之を世に訴え、以て天下國家に酬ひるところがなければならぬと考へ、途中得るところの絶句八十二首を題目として、これに隨時隨處の感想を附け加へて本篇とした次第である。言ふて盡さざるところあり、意に満たざるところは、後の機會にこれが完璧を期さう。讀者幸に之を諄とせられたい。

（三月十一日記之）

氏上井と員委會議審濟經の中察視灣臺

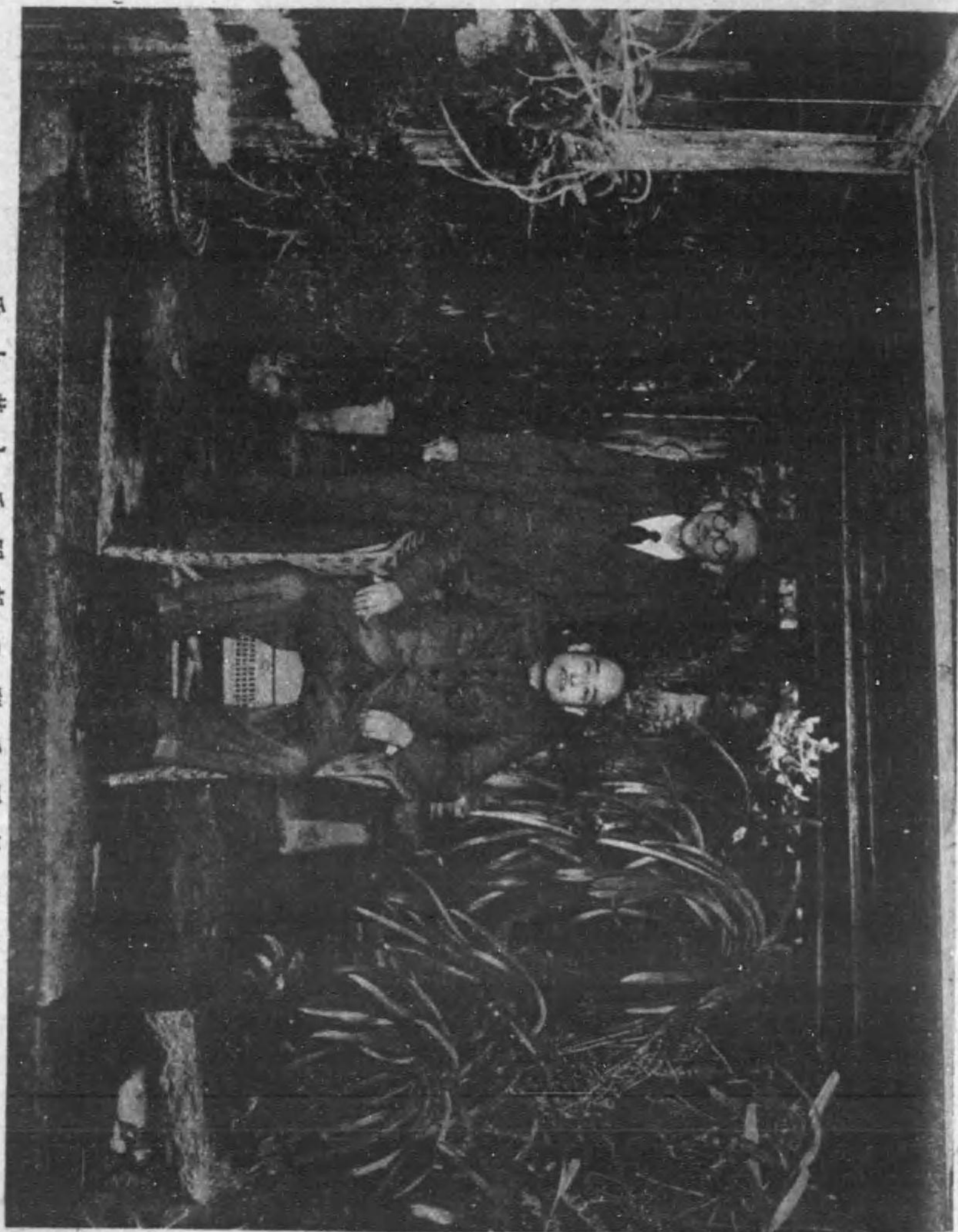


• 務常田莊船郵本日・問顧野岡會協道鐵・務常探大產物井三りと右でつ向
長社古郷工重菱三・氏上井・問顧成吉屬金友住



氏上井の笑哄中車

氏上井と氏岡松の邸氏岡松中臺



第四 新臺灣游踪

二十四首

昭和十六年十月より十一月、六十五歳の秋

(一)

昭和十六年十月十五日、臨時臺灣經濟審議會官制發布され、其の委員として十月二十七日より卅一日迄で臺北に開かるる會議に出席の爲め廿一日夜行にて東京を立ち、廿二日朝十時神戸下車直に埠頭碇泊中の日本郵船富士丸の第百十三號室の人となつて渡臺の第一歩を踏み出したのである。

昭和十年の同じ十月に熱帯産業調査會委員として臺灣に出遊してより正に六ヶ年を経過して居り、委員の顔觸れも前回は各方面の代表を網羅して、其の數も五十名に近かつたが、今度は事業各界就中工業、交通等の第一線に活躍せる人々を撰んだらしく其の數も三十名に満たない。従つて前回と同じ顔觸れは見渡した所、六、七名と云ふ所で、大谷光瑞、後宮信太郎、赤司初太郎等の諸氏が目に着く位であり、其の他は初顔と云へる。

廿一日の夜は恰かも三日月で一天快晴で、寢臺はまだ暖房を使つてなし、秋涼の氣身に浸みるものがあつた。仍つて

一 西行車中

關千星斗爛天關 爽氣清涼溢海寰
六十五年南進好 舵樓載夢指臺灣

關千たる星斗天關に爛き、爽氣清涼海寰に溢る。
六十五年南進好く、舵樓等を載せて臺灣を指す。
と吟じた。

正午出帆、風なく波靜かな絶好の秋日和、九千余噸、新裝の富士丸は鏡の如き海面を蹴つて内海を西航し、淡の山、播の水も一瞬に過ぎ薄暮、群嶋羅列の間を縫つて冥濛に没し去つた。委員として同じく渡臺の途に在る人々には大谷、後宮、赤司等の前記顔觸れの外に三菱重工の郷古社長、日航の齋藤副總裁、日石の小倉副社長、郵船の莊田常務、鐵道協會の岡野理事長等何れも舊識で、其の外に住友金屬、日窒等の代表者も同船である。斯くて誰れ彼れと語り合ふ中に更は深けて往く。明くれば廿六日朝八時船は已に海峡を越へて門司港外に假泊した。偶々郷古君關係の彦嶋造船所長岩崎君等の小蒸汽を以て迎へらるゝあり、仍つて之に便乗して關門の風光を賞し、國道や鐵道の墜道開鑿の状況を聞取しつゝ、下關に上陸、「山口」樓に上つて、三菱重工の心づくしの河豚料理に舌打し又三層樓頭より眼前去來の潮を眺め、大小船舶の往復を見て忙がしい關門の殷賑振りに接したのである。一詩あり、

二 門司にて

文字關頭硯海悠 親朋相拉上危樓
潮流如矢征帆急 水影山光縹緲秋

文字關頭硯海悠に、親朋相拉して危樓に上る。
潮流は矢の如く征帆急に、水影山光縹緲の秋。

席上、拙詩を揮毫杯して十一時半送られて船に歸つた。郷古君の外、同船の齋藤、莊田、小倉の諸君も同席された。

斯くて正午出帆、忽ち玄海に出でて同じく風波を絶し、依然船は陸を往くが如くである。間もなく五嶋の列嶋を左舷に望みつゝ、迂回して南下した。

昭和十年の際の

殘秋雲物憶會游 又載雄心上客舟
南指玄洋連水處 青山一髮是何州

に次韻

三 玄海洋西航中

杳渺圖南萬里舟 滿天瀛氣入高秋

世界を見渡しつゝ、

玄洋西去風濤熨 蘸鏡青螺何處州

杳渺たる圖南萬里の舟、滿天の瀾氣高秋に入る。

玄洋西に去つて風濤熨く、鏡を蘸すの青螺何處の州ぞ。

船長の食卓は大谷、藤山、郷古、小倉、齋藤と自分の六人で、大谷師は例に依つて談論風發、坐客を壓してゐらる。思へば師と自分との交はりも長いものである。師との初會合は明治卅五年夏のこと、處は中央亞細亞ハラ驛頭で、自分は埃國參謀士官ホフリヒター中尉と深く中亞の奧地を探り、ハラにて彼は自分に別れて歸途に就き、自分は残つて數日を同市に過ごし、西向アファンの境を窮めんとして單身ハラ驛に上りの列車（一日一回のみ）を待つ間に、下り列車が到着し、停車二十分間に師の一行と相遇し、「ビール」の杯を舉げてお互の健康を祈つたことであつた。爾來四十年に近く、或は本願寺の黒書院に、或は六甲の二樂莊に語り、大正、昭和に入つても南洋往復の間に船を同ふして意見を交換したことは一再でなく、昭和十年の渡臺の際も同船したのであつたが、今又茲に同乗の客となり、其の風貌に接するのは一段の喜びでなければならぬ。

門司より日本窒素の久保田常務が同室となつて膝を接して語り、又總督府高原課長等と打合せて二十三日の夜は更け、明ければ廿四日も亦快晴、細波滄澗として遠く天に連なり、至極の好航海である。船長も斯る平和の航海は少ないとのことである。天は吾等の一行に幸するものか、早起して旭日を

東に仰ぎ、朝食後亦誰れ彼と語り、久振りにデッキ・ゴルフに興じて刻を消した。午食後室に入つて此の記を綴る時に廿四日午後五時、ボーイの入浴を促すあり筆を投ぜなければならぬ。

(二)

夕食後、林房雄著の「壯年」を讀んで明治初年に於ける朝野の死闘を偲び、又「小林躋造傳」に前總督の施設を回想しつ、いつしか華胥の境に入り、廿五日天明くれば一天快晴、間もなく左に諸嶋を眺めつ、十一時を過ぐる十余分、基隆港埠頭に横付となり出迎の總督府關係官を始め明葉の西君等に迎へられて直に上陸、十一時五十分發列車に投じて十二時半臺北にて下車、官憲竝に舊知に迎へられ先づ「ホテル」に入り、西君の東導にて總督府差廻はしの經審第十三號車にて總督府、同總督及長官官邸歴訪敬意を表し、轉じて軍司令部に本間司令官を訪ふ。出張中にて不在、和知參謀長と暫らく快談、別後の久瀧を叙し、明葉喫茶店に於てランチを濟ませ、二時半ホテルを経て三時十分北投溫泉の「佳山」に投じ、一浴、深慮に臨める室に入つて、折柄の陽光が前山の翠黛に映せる亞熱帶の風物を満喫したのである。

聞けば此の日は、臺北としても殊の外に暑く夏の候を思はしめるものがあると。盛秋の内地より此の郷に下つて綠一色の天地を眺め、又庭前のクロトンや芭蕉樹に南方を偲んだのである。

大正八年即ち二十三年前の秋、南洋よりの歸途、臺北に田總督を訪ひ一日共に北投温泉に遊んで南方對策を論じたことを想起して、

四 北投温泉に浴し故田總督を憶ふ

出浴長欄對翠櫺 英雄窮達哲人觀

追懷二十三年上 南進籌謀夢裡殘

浴を出でて長欄翠櫺に對し、英雄の窮達哲人の觀。

追懷す二十三年の上、南進の籌謀夢裡に残る。

又、樓上殘霞に對して、

五 同上 殘霞に對す

天涯地再總吾家 六十青春鬢未華

南下一千三百哩 佳山樓上對殘霞

天涯地角總て吾が家、六十の青春鬢未だ華からず。

南下する一千三百哩、佳山樓上殘霞に對す。

日漸く西に沈まんとして虫聲多く、四十七年前即明治廿八年領臺當時に弱冠を以て此嶋に航し深く蕃界に入つたことに思ひ及んだ

六 樓上素居の時

日沈西嶺虫聲滋 鬢上二毛我獨知

四十七年今入夢 想遼樓上素居時

日は西嶺に沈んでも虫聲滋、鬢上の二毛我れ獨り知る。

四十七年今夢に入り、想は遼なり樓上素居の時。

同伴の西君と一杯を傾け晚餐を喫し、興茲に盡きて後九時佳山を出で「ホテル」に入つて渡臺の第一夜を送つた。

(三) 市内見學

二十六日は天曇つて時に細雨あり前日の炎暑に似ず朝夕の涼風體に良し。七時起床、幸ひの日曜を利用して、總督府の東導にて一行十數名、自動車を聯ねて九時半「ホテル」を出で、先づ臺灣神社に詣で、皇運の隆昌と武運の長久を祈り、背後に新設せる國民精神研修所に其の訓練の狀況を視、獨り迂回して明石大將の墓に展した。大將が大正七年の本月本日福岡病院で五十六の壯齡にて長逝してから滿二十三周忌であり、總督司令官等の墓參終つた後に墓前に跪いて古魂と語つたのである。

其より日東拓殖の製茶仕上工場を見學して午前中の日程を終り「ホテル」に一同と會食して坐談に

世界を見渡しつ、

南方論を述べ、一時より再び一同と共に博物館より工業研究所、熱帯病研究所、農業試験所等を歴訪して、臺灣の工業化や熱帯病學の研究の結果を聞知し、臺灣産業の第一位を占むる農林産の状態をも興味深く見學し、後四時約を履んで長谷川總督を訪ねて意見を交換し、五時半ホテルに歸つて許丙陳新兩君等本嶋人側委員の來訪に接し、夕食後帝大の足立教授等の來訪を受け、約二時間に互り緩談し九時室に入り、一浴の後、參考資料等に眼を曝らし十一時漸く寢に就いた。廿六日は全くの見學日で數度渡臺せる自分としても有効の一日であつた。

(四) 審議會の第一日

一廿七日は審議會第一日である。七時起床八時朝食、九時半總督府に出頭、齋藤總務長官と會談して十時會議に臨む。會長として總督の挨拶あり、終つて議事に入り掛官より諮問案の説明あり、二三委員の質問を済まして第一、第二特別委員の指名あり、正午散會、一同「ホテル」に入つて會食し、一時十分藤村市長を訪ひ用談の後登廳、後二時より開會の第二特別委員會に出席して諮問案に對する總括的質問應答あり、自分は前後二回起つて諮問案實行に關する心構へと臺灣を南方の基地としての内地朝野の認識の擧揚が本會議の收穫の一たるべく、又答申案も此の線に沿ふて審議さるべき旨を述べて置いたのである。

後四時半第二特別委員會を終つて第一委員會を傍聴し五時散會「ホテル」に小憩、委員の誰れ彼と語り六時半總督官邸の委員招待會に列した。久振りの支那料理を飽喫し、同席の諸君と快談し九時辭去、途中同郷の辻商會主人を訪ふて九時半「ホテル」に入つて第一日の日程を終つたのである。

(五) 東方齋荒尾先生の紀念碑建立の議

廿五日和知參謀長と會見の際、皇民運動や興亞運動の臺灣を風靡しつゝ、ある此の秋に於て、東方齋荒尾先生終焉の地たる臺北に紀念碑を建立するは世道人心の指導に補あるべしとの話出で、自分は是非之が成立を見たしと思ひ、同參謀長の協力を求めたる後、總督長官始め文教 内務 警務等の關係各局長に其の意を傳ふると共に市長を訪ふて敷地の提供其の他を依頼し、該運動の纏め方として臺日社長河村君を煩はすこととし、更に民間側の後宮商工會頭、赤司老、本嶋人側の許丙氏等にも諮り、何れも其の賛同を経たのであつた。更に滯臺中に廣く各方面の賛同を得、歸京の後、先生の終焉の狀況、渡臺の目的等に就ても記述して之を臺北に送り、之を公にし先生に對する一般の認識を廣めて之が建碑に着手するの順序とすべく打合せた次第である。此の行、端なくも自分着臺の第一日に於て此の企が話題に上つたことは故人の英靈の致す所と云ふべく、愈々成功の曉には後進として如何にも愉快な事の一でなければならぬ。

(六) 臺灣神社大祭の日

廿八日は臺灣神社大祭の日で領臺四十七年目の祭日であり、而して自分には渡臺の記念すべき年である。前七時起床し八時朝食九時半、明糖の小塚重役、明菓の西君の來訪を受けて相携へて東方齋紀念碑の敷地としての適否を探るべく先づ臺灣神社に詣でた後、圓山公園、建功神社境内等に檢分し龍山寺に本嶋人生活の一端に觸れて、正午ホテルに引返し、午食の後、舊友池田君始め帝大の伊藤、足立兩教授等の來訪を受けて語り。後一時半より階下の大應接室に於ける櫻楓會員二十名の小集茶話會に母校の現状、時局問題等に就き意見を交換し四時半散會。

後五時半臺中の長老松岡君來訪して久瀧を敘し、六時半梅屋敷に於ける臺拓、臺銀、臺電、臺糖四社合同の歡迎會に列した。會長始め委員等三十餘名一同歡を盡くして八時半許丙君の招きにて早退、大稻埕の一料亭に上り、三卷老を加へ石原産業社長と四人圓卓を繞りて對坐、本嶋人の生活状態を味ひ十時過ぎ歸館、一浴して十一時半就床した。

臺灣神社大祭の一日、亦有益な一日であつた。而かも重九の夕、一天快晴にして星斗爛熳たる處、遊子の感多少である。

(七) 第二特別委員會の第二日

例に依つて朝七時起床朝食を終へて九時登廳、第二特別委員會に赴く。同廿分開會、大谷委員長の議事進行振りあだやかに序を逐ふて答申参考案を審議し、正午迄に議題の大半を了し散會、一同車を聯ねて大稻埕の蓬萊閣に於ける臺北商工會議所主催招待會に臨み、挨拶の交換型の如く支那料理の美味に飽き、又妓生の洋琴や唱歌に南國情緒を味ひ、二時引返して更に特別委員會を開いて未了の問題討議に移り五時全部を終了した。

仍て自分の發議にて明日中に委員長の許に答申案を起草し、明後廿一日朝九時特別委員會を開いて之を決定し、十時よりの總會に臨むべく決定散會した。

其より第一特別委員會を傍聽して五時半郵便局に立寄り、東亞同文會宛左の意味を打電して、明三十日の東方齋先生四十六年周念祭に當り全生庵の墓前に報告方を依頼した。

『經濟審議會列席の爲め臺北に参りたる處、荒尾先生終焉の地たる此の臺北に紀念碑建立に付、官民有力者の間に協議、進行中なり、此の旨墓前に御報告ありたし』

善は小なりと雖も敢て爲すべし、惡は小なりと雖も爲すべからず、臺北に先生紀念碑を建立さるるは吾等後進の悦びでなければならぬ。

ホテルに小憩、數氏の嘉訪を受け又明治商店に敬意を表し、大東信託社長で同じく審議會委員たる陳圻君の招きにて江山閣に夕食して、例に依つて惡筆を揮ひ後九時過ぎ歸館。一浴此の記を草する次第也。(十月廿九日夜十時)

(八) 會議と講話の一日

三十日は午前及午後と及んで第一特別委員會に出席して其の質問應答に耳を傾けた。部門は工業振興の全面に互り多岐多端を極め、従つて之が検討も容易ならざるものあつたが、大體纏りをつけた様である。

午餐は一同と「ホテル」に共にし後四時半より帝大文政部長等の希望に依り教授連四十名參集の茶話會に臨み、約二時間に互つて興亞立志の動機より南方開拓に至る間の心境の過程を述べ、臺灣との因縁より南方問題乃至は帝國當面の危局に就き所感を陳べた後に質問應答に移り、六時半辭去、部長並に伊藤、足立、淺井諸教授に伴はれて御園なる小料亭に水料理の美味を喫しつ、餘談に花を咲かせ八時半「ホテル」に歸つて待受けられたる國民精神修研所の中西君、黃君夫妻、其他の教育關係者十名の小集に對し、「男子の信念長養の問題」に就いて口演し十時半散會、一浴寢に入つたのは十二時に近かつた。此の日も亦會議と講話の多忙な一日であつた。

九 會議最後の日

三十一日は審議會最後の日である。早朝より舊知の來訪あり、九時登廳。第二特別委員會に臨んで最後の仕上げを爲して、十時よりの總會に臨んだ。十時十分會長司會の下に兩特別委員長より會議の經過及結果に就て報告あり、終つて自分より本審議會設置の趣旨と本答申の重要性に鑑み、政府は本答申の實現が帝國の國是遂行に重要な意義あることに深く思を致し、宜しく前後緩急を計つて之が實行に努力することが、本答申をして生命あらしむるものたることを附帶決議としたく、之が採決を求めたる後、二三委員より意見の開陳あり、結局、委員の申合せ事項として記録に嚴存せしめることとして答申案の上程となり、兩特別委員長報告通り可決確定して總會を終了散會したのは午後〇時十五分であつた。依つて一同車を聯ねてホテルに入り午餐を共にして各自由行動に移り、茲に前後五日間に互る審議會を終つたのである。

午食後一時半明治商店の西君同伴市廳を経て二時草山の大屯ホテルに入り、一浴して靜思の機會を得た。

室は西南に面し、眼前遠く右に觀音山を望み、淡水の流を眼下に收め、光景廣潤雄大である。五日間塵界に出没したる身の少刻の閑を得て、茲に優遊し得るの幸を幸とするのであつた。二絶あり

七 草山温泉に浴して

澡浴草山輕旅塵一 廓然心境一層新
半年復見天南月 我是浪遊湖海人

草山に澡浴して旅塵輕く、廓然たる心境一層新なり。

半年復た見る天南の月、我は是れ浪遊湖海の人。

八 同上 舊韻に次す

超利忘名樂有餘 樓頭佇立月來初
遙青自遠雲烟澹 萬頃風光畫不如

利を超へ名を忘れて樂み餘りけり、樓頭佇立す月來るの初。

遙青は自ら遠く雲烟は澹く、萬頃の風光畫も如かず。

六時引返し總督官邸に長谷川總督を訪ふて別を敘し、六時半梅屋敷に於ける長官の招待會に列し、委員一同と語り、最後の正式晚餐を終へて八時半「ホテル」に歸つて行李を整へ臺北最後の日程了した。(以上十月三十一日夜九時半認之)

十 島内視察の第一日、臺北より臺中へ

明くれば十一月一日、島内視察の第一日である。總督府安井事務官等の東導にて一行は委員として郷古、岡野、吉成、高尾、大塚、莊田諸氏にして東導官、隨員を合せて十二名、中二、三委員の出入ありしも大體前記數名は終始行を共にした。

八時五十分「ホテル」を出で驛頭に長谷川總督の東上を送り、轉じて九時半發南行の車に入つた。交通局は一行の爲に特に一等車一臺を増結せられた爲め、一同意快然たり。十一時新竹下車、出迎の州官等に迎へられて郊外に天然瓦斯研究所を視察し、正午迎賓館に宮木州知事招待午餐會に臨み、知事始め各部長より夫れ々州内の状況や諸計劃を聴取し、一時發、竹東に日鑛經營の油田を視察し、後三時卅五分新竹發列車にて五時十一分臺中下車、州官等に迎へられたが、自分のみは舊友松岡富雄君の案内にて郊外の同君邸に入つて久潤を敘し、庭前に紀念撮影を爲した後、大廣間にて御夫婦の心からなる接待に預り、臺灣記者に所感を語つた後、同君と共に醉月樓に於ける州知事の招宴に赴いた。丁度興亞奉公日のこととて酒類を廢せられたのは大助かりであつた。領臺當時に一泊せし臺灣の名家林朝棟君の後繼林獻堂君を訪はんとせしも折悪しく臺北出張中とて果さず、九時早退して松岡君と市中を散歩し、獨り千代田旅館に入つて第一日の程を終つた。

松岡君の應接室に蘇峯學人の揮毫に係る「開拓萬里波濤」の大扁額あり、手廣き庭園、蒼樹鬱々たる邊りには數十の白鷺が飛び廻はる下には比律賓産の香蘭ワリン、ワリンが今を盛りと芳香を放つて

るる、主人の在臺四十年に近き歴史と、比律賓經略の夢を如實に象徴するものあるを見て一絶を賦して同君に贈つた。

九 賦して松岡老友に示す

白鷺雙雙繞樹安 幽蘭楚楚照檐丹

波濤開拓當年跡 明白主人眉宇看

白鷺雙雙樹を繞つて安く、幽蘭雙雙檐を照らして丹なり。

波濤開拓當年の跡、明白に主人眉宇に看る。

十一 第二日、臺中より日月潭へ

二日朝早く臺銀森支配人松岡君等の來訪を受けた後、八時半一同と自動車を連ねて疾驅十六キロ臺中の平野を過りて新高築港計畫を實地に見、轉じて太肚に臺灣バルブ會社のバルブ工場を視察し、糖業の副産物たるバカスよりバルブ生産の順序に興味を惹き、午餐の饗を享けて十二時四十分工場を立ち、一時廿三分彰化發の列車にて二時過ぎ二水に乗換への一時間を利用して驛前の増澤農園に熱帯植物や果樹の栽培を見、三時十分二水發四時九分水裡坑に下車、其より自動車にて濁水溪に沿ふて中央山脈の中に入り、九折の山路を迂回し高山の涼味を喫しつ、五時十分日月潭は水社に着き、態々臺

北から來會された臺電の松尾重役より發電の行程に就き説明を聴き、終つて潭を渡り、化蕃部落に上陸、蕃人の杵歌に蕃情を味ひ、涵碧樓の第一室に入つたのは後七時半であつた。日入つて月出で蕃界在留四十七年の昔を想ふて感新なるものあるは已むを得ない所であらう。

更衣して臺電主催の晚餐會に列し、室に歸つて折柄の十四夜の秋月に對して二絶あり、

十 日月潭畔涵碧樓

日月潭深萬碧涵 蕃歌搖曳度層嵐

如呼卅七年前夢 洗耳灘聲落古潭

日月潭は深く萬碧涵り、蕃歌搖曳として層嵐を度る。

呼ぶが如し四十七年前の夢、耳を洗ふの灘聲古潭に落つ。

舊韻

涵碧樓邊萬碧涵 大山山下對晴嵐

曾遊四十年前夢 一夜隨雨落碧潭（昭和十年作）

十一 同上 其二

六歲重凭卷畫樓 一新舊夢客心悠

追尋四十七年跡 只有潭心月影浮

世界を見渡しつ、

六歳重く凭る罨畫の樓、舊夢を一新して客心悠なり。
追尋す四十七年の跡、只た潭心月影の浮ぶあり。

十二 同上 其の三

日沈潭水絶微波、月上蕃山巖一河

滿腹鈴韜人未老、低徊伴取素娥多

日は沈んで潭水微波を絶ち、月は上つて蕃山巖一河。

滿腹の鈴韜人未だ老いず、低徊素娥を伴取して多し。

十三 同上 其の四

月華皓皓舊蕃山、領略倪黃水石竇

結髮當年南進客、鬢霜未得三恹心閑

月華は皓皓たり舊蕃山、領略す倪黃水石の竇。

結髮當年南進の客、鬢霜未だ恹心の閑を得ず。

日月潭は四十七年前埔里社在勤當時に往復した所、六年前にも一遊して舊交を暖めたので、今回も亦此の久戀の地に詩情を養つたのである。

十二 第三日、日月潭より臺南へ

六時半起床、蕃界の風物を満喫し、七時半國婦會長故武藤元帥夫人の同宿せらるるに會して久振りに挨拶を交換し、八時五十分樓を出で先づ魚池の「アッサム」茶試験所に赴いて所長より栽培狀況を聞き、又眼前に展開する高山の大觀に接して

十四 魚池園上の眺望

旭日曠曠照百疊、穿林一水碧潺湲

魚池園畔雙青峙、大雪合歡眉睫間

旭日曠曠として百疊を照らし、林を穿つの一水碧潺湲たり。

魚池園畔雙青峙ち、大雪合歡眉睫の間。

とは其の際の直感を露呈したものである。

九時四十分發、一路山を下ること五十分、第一發電所に同じく松尾重役の説明を聞き、辨當の襷を受けて十二時十分外車程に自動車を棄て一時十二分同じく増結一等車上の人となり、昨日來東導の新高郡長に集々街に別れを告げ、二時二十分二水にて乗り換へ一行の大塚、三井は嘉義にて分袖、委員六人外に東導官隨員合せて十名となり五時十分臺南着、州官の外、女子大出身櫻楓會員數名の出迎を

さきに臺灣に遊び、遠く南下して高雄州屏東製糖工場を視察したとき、詩人謝川松野綠老に會つた。同老は詩林社の同人であり、有名な漢詩人であり、夙に私の詩書を読んで言は、未見の知己である。偶然同工場に於て同老と會合して大正十二年四月、聖上陛下の皇太子であらせられた時分、時の社長二峰山本悌二郎君が鶴駕を迎へ感激の餘り賦された二峰君の二絶に次韻をしたことであつたがそれは別項の臺灣遊踪に掲げておいたのであるが、この工場には有名なる瑞竹がある。これは我國民讀本にも掲げられておる位有名なものであつて殿下が御臨御の後、珍らしくも花を開き實を結び落ちて瑞竹となつて繁茂して今日に及んでおる。同工場に於ては天恩の有難きを感謝すると同時に、この珍らしき竹を瑞竹と名づけ、丹誠こめてその發育に力を盡した。至誠の徹する所、事必ず成ると言ふことをこの瑞竹によつて明らかに示されて居る又工場に働ける三千の人々はこの瑞竹を朝夕愛撫して至誠の一路を辿つておると言ふことであつた。私はこの瑞竹を仰ぎ、又殿下を始め奉り多數の皇族方や大臣顯官の視察を記念せる記念堂に行つて種々の陳列品を見たのであつたが、最近松野老よりこれら瑞竹に關する先人の吟詠と共に私に贈るの絶句十首を寄せられた。次がそれである。

一

多年湖海慕材名 何幸天南初識荆

猶有襟期難話盡 中原他日欲申盟

多年湖海材名を慕ひ、何の幸か天南初めて識荆。

猶襟期話盡き難きあり、中原他日盟を申のべんと欲す。

二

個儻元嫌凡介鱗 鵬游禹城策編綸

雄心早已存興亞 君是東方齋替身

個儻元と嫌ふ凡介の鱗、鵬游禹城經綸を策す。

雄心早く已に興亞に存し、君は是れ東方齋の替身。

三

華僑禮聘一青襟 切齒俄邦吞噬心

權域新尋興亞緒 辭來歲俸八千里

華僑禮聘す一青襟、切齒す俄邦吞噬の心。

權域新に尋ぬ興亞の緒、辭し來る歲俸八千金。

四

世界を見渡しつ、